

第9号住居跡 (第156図)

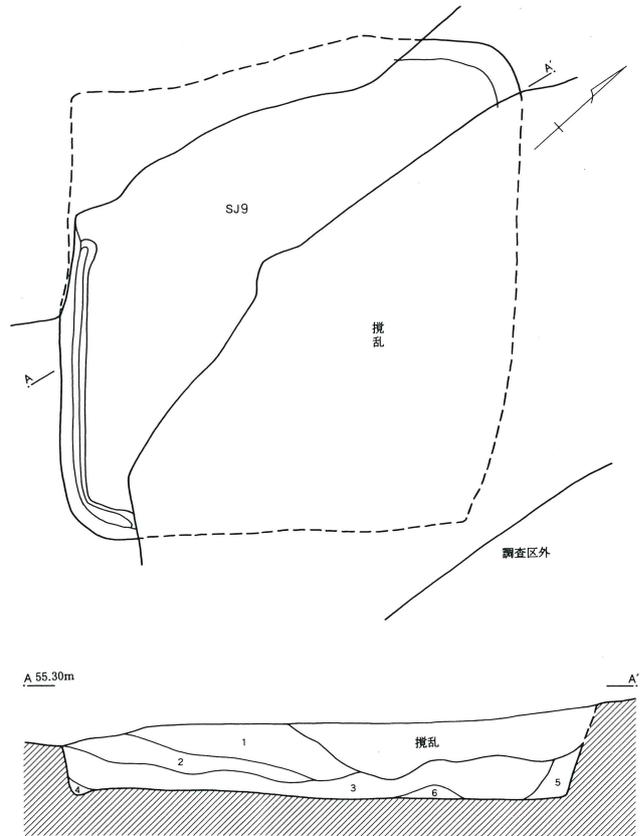
調査区北側の82-5グリッドに位置する。周囲は攪乱が激しく、特に、本住居跡の東・西側は大きく攪乱を受けていた。このため、ほとんど住居跡の形態を留めていなかった。わずかに北コーナー部分から南西コーナー部分にかけて検出した。本住居跡の南側には第11号住居跡が位置する。

平面形態は不明である。残存する規模は南北軸長3.94m、東西軸長は5.60mであった。深さは27cmである。南北軸方位はN-48°-Eである。

床面は、住居跡中央部分で検出されほぼ平坦である。南西コーナー部分では幅17cm、深さ5cm程の壁溝を検出した。カマドや柱穴は検出されなかった。

遺物は、土師器坏、皿、鉢、甕、台坏甕、須恵器坏、蓋、甕の破片が出土した。須恵器はいずれも末野産で占められていた。第157図1・2は暗文坏である。1の暗文は口縁部でおり返し松葉状の施文方法を取り、2の放射状の施文方法とは異なる。口唇部は内側に屈曲してから外に開いて立ち上がる。体部のケズリは未調整部分を残さない。須恵器坏の底部調整は、18が手持ちヘラケズリ、20・21は糸きり離し後、外周回転ヘラケズリを施している。19は皿の底部とみられ、糸切り離しのままである。蓋はいずれも口径が大きい。22は短頸の甕である。

第156図 第9号住居跡



第9号住居跡

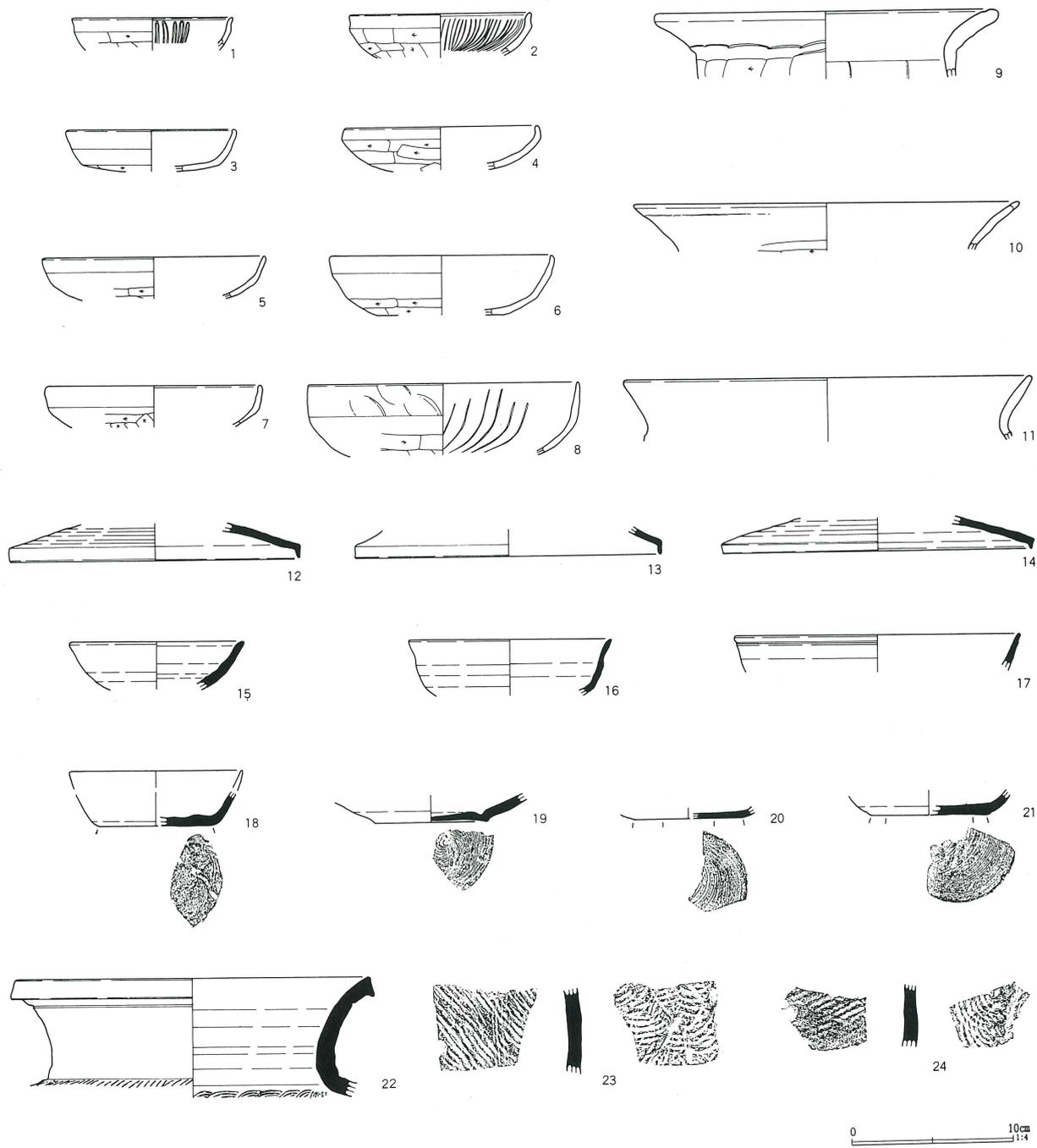
- 1 暗褐色土 しまりよし ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む
- 2 暗褐色土 しまりよし ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 3 黒褐色土 しまりよし ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 4 褐色土 ローム粒子を多量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量含む
- 6 暗褐色土 茶褐色粘土を含む

0 2m 1:60

第111表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第157図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(9.9)	(2.0)		AB	普通	黒褐色	5		放射状暗文
2	土師器坏	(11.1)	(2.7)		ABCD	普通	褐色	10	覆土	放射状暗文
3	土師器坏	(10.4)	(2.6)		BDF	普通	褐色	20		
4	土師器坏	(12.0)	(2.7)		BDF	普通	褐色	15		
5	土師器坏	(13.8)	(2.6)		ABDF	普通	褐色	10	覆土	
6	土師器坏	(13.6)	(3.7)		ABD	普通	暗褐色	10		
7	土師器坏	(13.2)	(2.6)		ABD	普通	褐色	15	覆土	
8	土師器坏	(16.9)	(4.5)		ABD	普通	褐色	10	覆土	放射状暗文
9	土師器甕	(21.0)	(4.2)		ABD	普通	褐色	10	覆土	
10	土師器甕	(23.9)	(3.0)		ABCDF	普通	褐色	15		
11	土師器甕	(25.2)	(4.0)		ABDF	普通	褐色	10	覆土	
12	須恵器蓋		(2.3)	(17.9)	AC針	良好	灰色	10	覆土	南比企産
13	須恵器蓋		(1.7)	(19.0)	AD針	良好	暗灰色	5	覆土	南比企産
14	須恵器蓋		(2.1)	(19.2)	ADF片	普通	暗灰色	5	覆土	
15	須恵器坏	(11.7)	(3.0)		A	良好	青灰色	15	覆土	末野産
16	須恵器坏	(12.5)	(3.5)		AF片	普通	褐灰色	5	覆土	末野産

第157図 第9号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
17	須恵器坏	(17.6)	(2.3)		A D片	普通	灰色	5	覆土	未野産
18	須恵器坏		(21.0)	(7.0)	A F片	普通	赤灰色	30	覆土	未野産
19	須恵器皿		(1.7)	(7.0)	D F	普通	褐灰色	20	覆土	未野産
20	須恵器坏		0.7	(6.8)	D F片	良好	灰色	20		未野産
21	須恵器坏		(1.6)	(7.2)	A片	普通	褐灰色	30		未野産
22	須恵器甕	(21.8)	(7.4)		A F片	普通	暗灰色	30	覆土	未野産
23	須恵器甕				A C D片	良好	乳灰色			未野産 青海波文
24	須恵器甕				A C D E片	普通	青灰色			未野産 青海波文

第112表 第9号住居跡出土遺物計量表

器種 計量値	土師器								須恵器						鉄・石器	
	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤	壺		甕
口縁部(片)	37	2	4	1	22				4	3					1	
(g)	175	12	31	4	440				36	40					350	
体部(片)	41		5		225				7						4	
(g)	152		20		1280				20						170	
底部(片)					3		1		6				1		84	
(g)					40		40		106				20		145	

第10号住居跡 (第158図)

調査区南側の83-4グリッドに位置する。周囲は攪乱が激しく、本住居跡の南側は大きく攪乱を受けていた。このため、ほとんど住居跡の形態を留めていなかった。カマドの付設される北壁から西壁の一部を検出した。本住居跡の北東側に第11号住居跡が位置する。平面形態や規模は不明である。主軸方位はN-54°-Eである。

床面は、ほぼ平坦である。確認面からの深さは20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、一部確認した西壁には幅22cm、深さ8cmの周溝が巡り、北壁では周溝

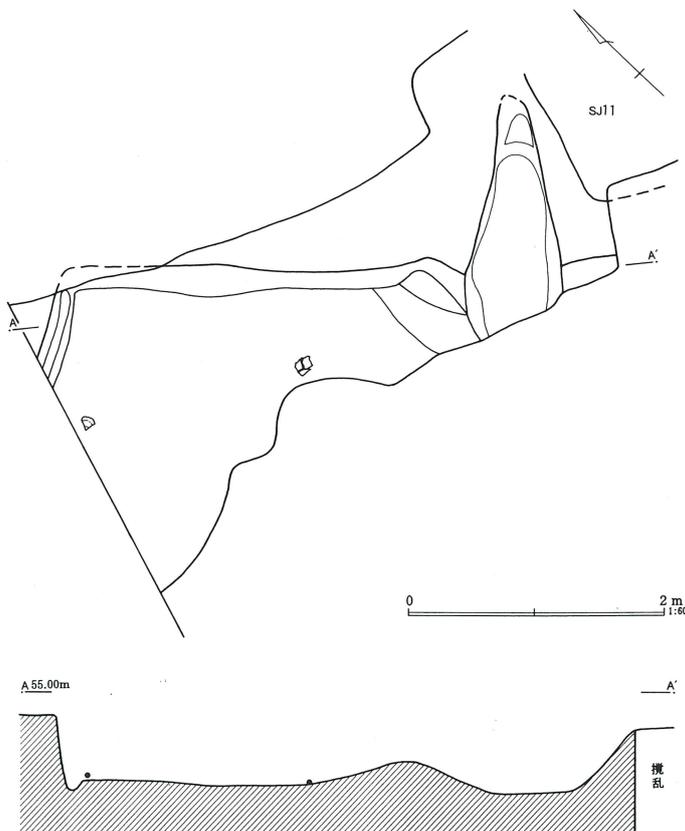
は見とめられなかった。

カマドは、北壁に検出された。規模は全長136cm、焚き口幅50cm、燃烧部の最大幅は59cm、深さ20cmである。カマド右袖は攪乱により欠損し、左袖がわずかに残存する。燃烧部では両壁が被熱により粘土が赤褐色に焼土化していた。煙道が壁外に長く伸び、奥壁をもち52cmの段をもって煙道に繋がる。また、カマド内の掛け口付近から甕の破片がまとまって出土した。第159図のカマド断面観察によると第2層灰褐色土は天井の崩落粘土であり、第3層の暗赤褐色土は焼土粒子

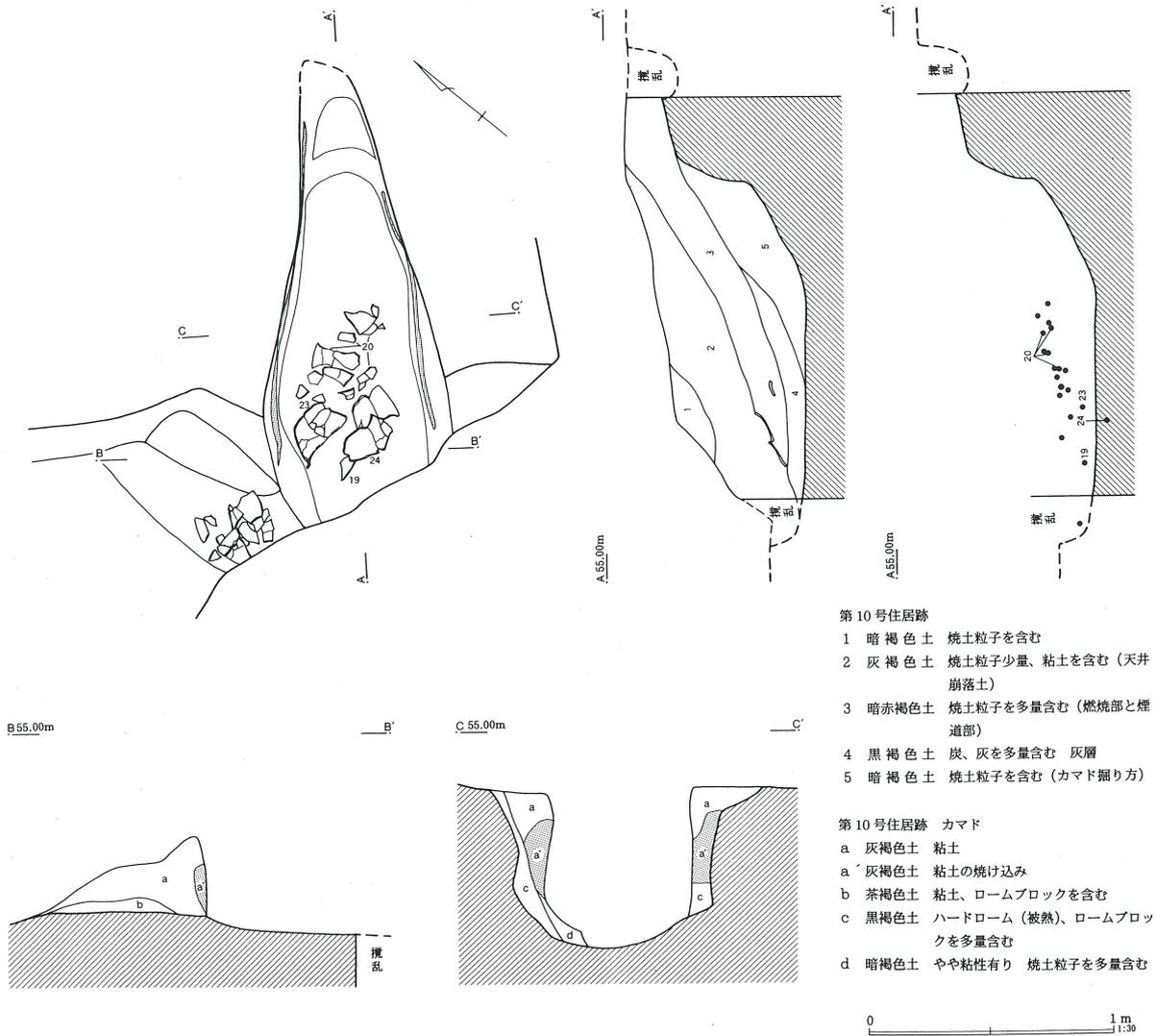
を多量に含む燃烧部から煙道部にかけての覆土である。甕はこの第3層からまとまって検出され、第2層と第3層に挟まって出土した部分がカマド掛け口の可能性が高い。残存する左袖は灰褐色粘土によって貼り込んでいる。また、燃烧部の構造はハードローム、ロームブロックを裏込めし、その上に灰褐色粘土を貼る。

遺物は、土師器坏、甕、須恵器坏、蓋、高盤、壺、甕の破片が出土した。須恵器は、未野産をはじめ秋間産の蓋や南比企産の坏などが出土している。

第158図 第10号住居跡



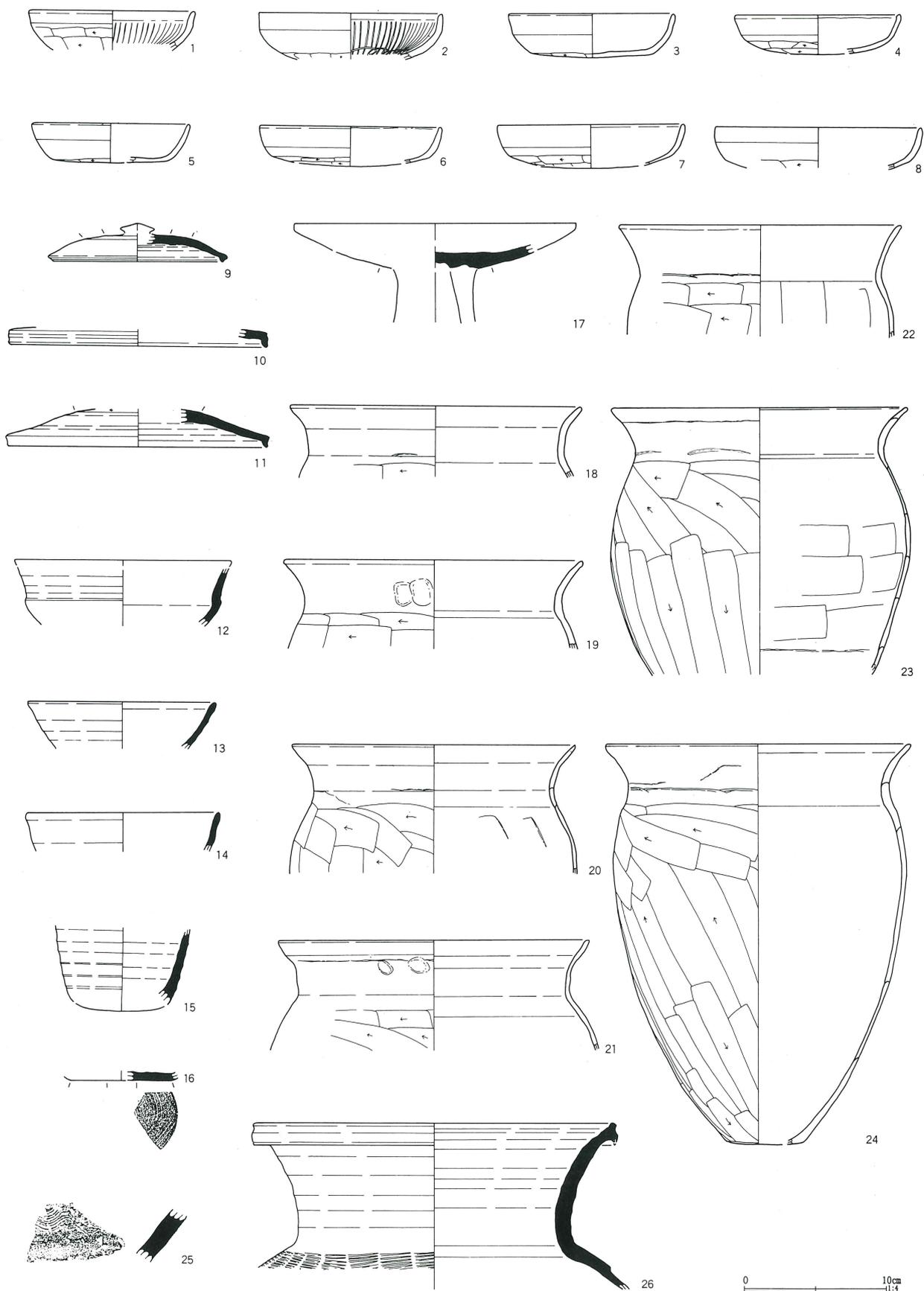
第159図 第10号住居跡カマド



第113表 第10号住居跡出土遺物観察表(第160図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(11.6)	(2.8)		ABCDEF	普通	橙褐色	10		放射状暗文
2	土師器坏	(12.8)	(3.3)		ABCDEF	普通	淡褐色	10		螺旋・放射状暗文
3	土師器坏	(11.5)	3.0		ABCDE	普通	褐色	50		
4	土師器坏	(11.6)	(2.8)		ABCDE	普通	橙褐色	10		
5	土師器坏	(11.0)	2.8		ABCDE	普通	褐色	20		
6	土師器坏	(12.6)	(2.8)		ABCDE	普通	茶褐色	10		
7	土師器坏	(13.1)	(3.1)		ABDEF	普通	褐色	20		
8	土師器坏	(14.5)	(2.9)		ABCDE	普通	褐色	10		
9	須恵器蓋	(12.0)	(2.7)		AF	良好	青灰色	25		秋間産
10	須恵器蓋	(18.3)	(1.2)		ACDEF片	普通	灰色	5		末野産
11	須恵器蓋	(18.4)	(2.7)		ADF片	普通	灰色	20		末野産
12	須恵器坏		(4.1)		ACD片	普通	灰色	5		末野産
13	須恵器坏	(13.1)	(3.3)		ADF針	良好	淡灰色	30		南北企産
14	須恵器坏	(13.5)	(2.8)		ADEF片	不良	褐灰色	5		末野産
15	須恵器坏		(5.9)		ADF	不良	青灰色	30		末野産
16	須恵器坏		(0.7)	(7.2)	ADEF針	良好	乳白色	10		南北企産

第160图 第10号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
17	須恵器高盤				A C D F片	普通	灰色	20		末野産
18	土師器甕	(20.4)	(5.0)		A B C D E F	普通	橙褐色	10		
19	土師器甕	(20.9)	(6.3)		A B C D E F	普通	橙褐色	15	カマド No.11	
20	土師器甕	20.0	9.2		A B C D E F	普通	茶褐色	50	カマド No.3・14・15・18	
21	土師器甕	(22.0)	7.8		A B C D E F	普通	褐色	15		
22	土師器甕	(19.8)	(7.9)		A B C D E F	普通	茶褐色	10		
23	土師器甕	20.8	(18.9)		A B C D E F	良好	橙褐色	80	カマド No.5・カマド・左袖	
24	土師器甕	21.4	(28.5)	(5.5)	A B C D E F	良好	褐色	50	カマド No.1・カマド	
25	須恵器甕				A C D F	普通	灰色	1		末野産
26	須恵器甕	(25.4)	(11.9)		A C D F片	普通	暗灰色	30		末野産

第114表 第10号住居跡出土遺物計量表

計量値	器種	土師器								須恵器						鉄・石器	
		坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	碗・鉢	高台坏	皿・盤	壺		甕
口縁部(片)		17		2		40				3	3					2	
(g)		174		20		1912				35	61					406	
体部(片)		37		4		183				4				1		10	
(g)		155		38		1290				30				70		240	
底部(片)						8				1						1	
(g)						79				10						20	

第11号住居跡 (第161図)

調査区北側の83-5グリッドに位置する。本住居跡の東南側は大きく攪乱を受けていた。このため、住居跡は北壁から西壁にかけて検出し、かろうじて南西コーナー部分を確認した。本住居跡の南西側に第10号住居跡が位置する。

平面形態は方形と推定する。残存する規模は南北軸長3.32m、東西軸長は3.52mであった。深さは8.2cmとやや浅い。カマドが検出されないため南北軸方位はN-43°-Wである。

床面は、住居跡中央部分から北西にかけて検出した。

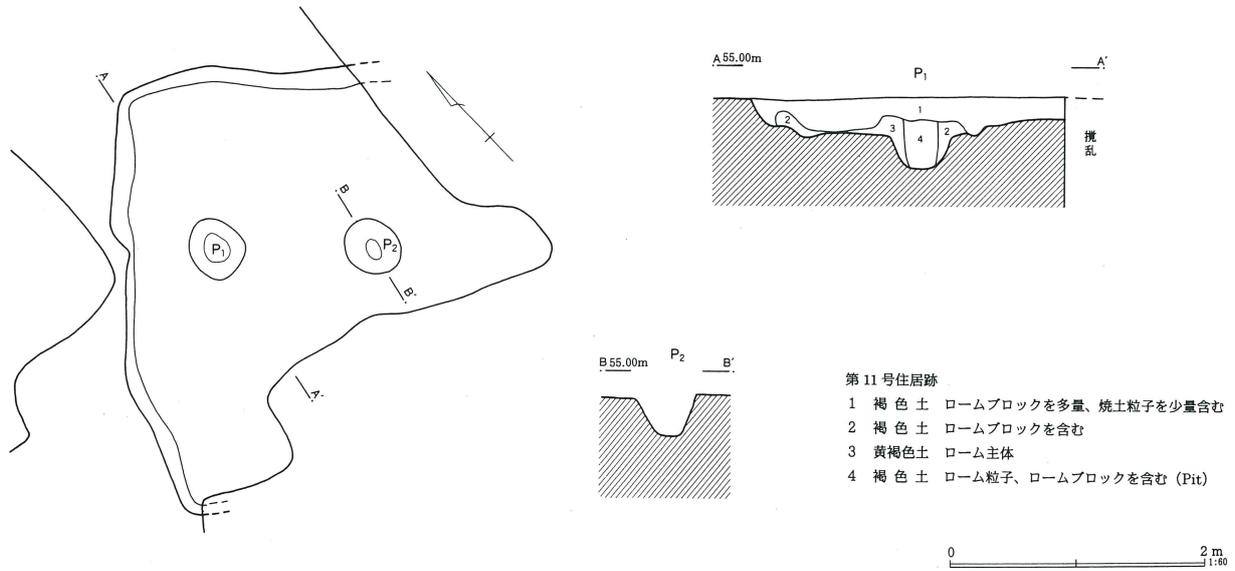
第2・3層はロームブロックを主体とした層で、柱穴を埋めており貼り床の一部と考えられる。壁溝は検出されなかった。柱穴は西壁から70cmほど東寄りにP1を確認した。カマドは検出されなかった。

遺物は、土師器坏、甕、台坏甕、須恵器坏、蓋、甕の破片が出土した。須恵器はいずれも末野産で占められていた。第162図5は外周を回転ヘラケズリ、6は体部下端を回転ヘラケズリ、8は糸きり離し後、外周を手持ちヘラケズリしている。9は土錘である。4・10は近世の混入品で10は土釜の底部破片である。

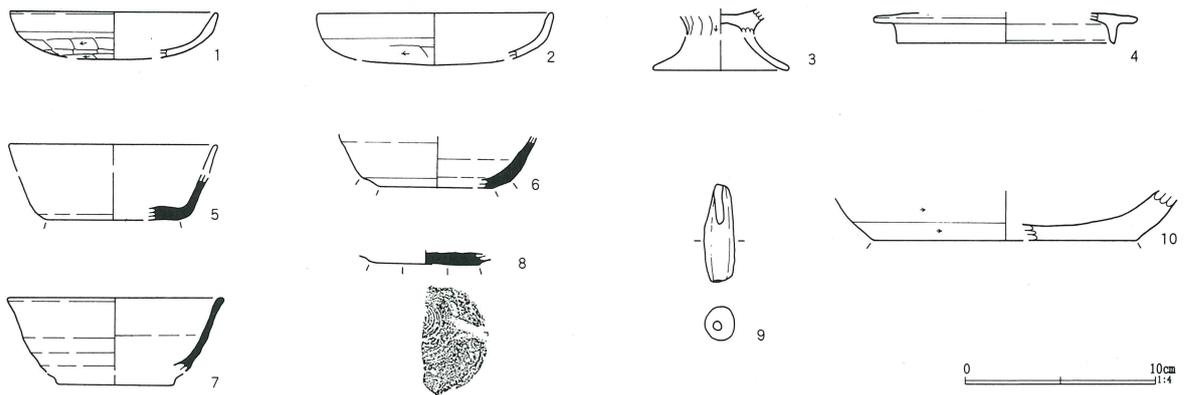
第115表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第162図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(10.9)	(2.5)		A D F	普通	淡褐色	10		
2	土師器坏	(12.4)	(2.8)		A D E F	普通	褐色	5		
3	土師器台付甕				A B C D E F	普通	褐色	20		
4	磁器蓋		(1.6)	(10.5)		良好	淡白灰色	50		中近世
5	須恵器坏		(4.0)	(7.0)	A C D F片	普通	茶褐色	10		末野産
6	須恵器坏		(2.8)	(6.0)	A C D F片	普通	暗灰色	5		末野産
7	須恵器坏	(11.4)	(4.6)		A D F片	普通	灰色	10		末野産
8	須恵器坏		(0.7)		A D F	不良	赤褐色	50		末野産 外周手持ちヘラケズリ
9	土錘	残存長 5.0、幅 1.6、孔径 0.5cm、重量 13.3g					茶褐色	95		黒斑有り
10	土釜		(2.7)	(14.0)	A D	不良	黒褐色	10		中近世

第161図 第11号住居跡



第162図 第11号住居跡出土遺物



第116表 第11号住居跡出土遺物計量表

器種 計量値	土師器								須恵器						鉄・石器	
	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甑	台付甕	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤	壺		甕
口縁部(片)	4				5			1	1	1					1	
(g)	17				29			16	11	20					70	
体部(片)	2		1		40		1								2	
(g)	10		3		183		20								100	
底部(片)									3						2	
(g)									49						112	

第12号住居跡 (第163図)

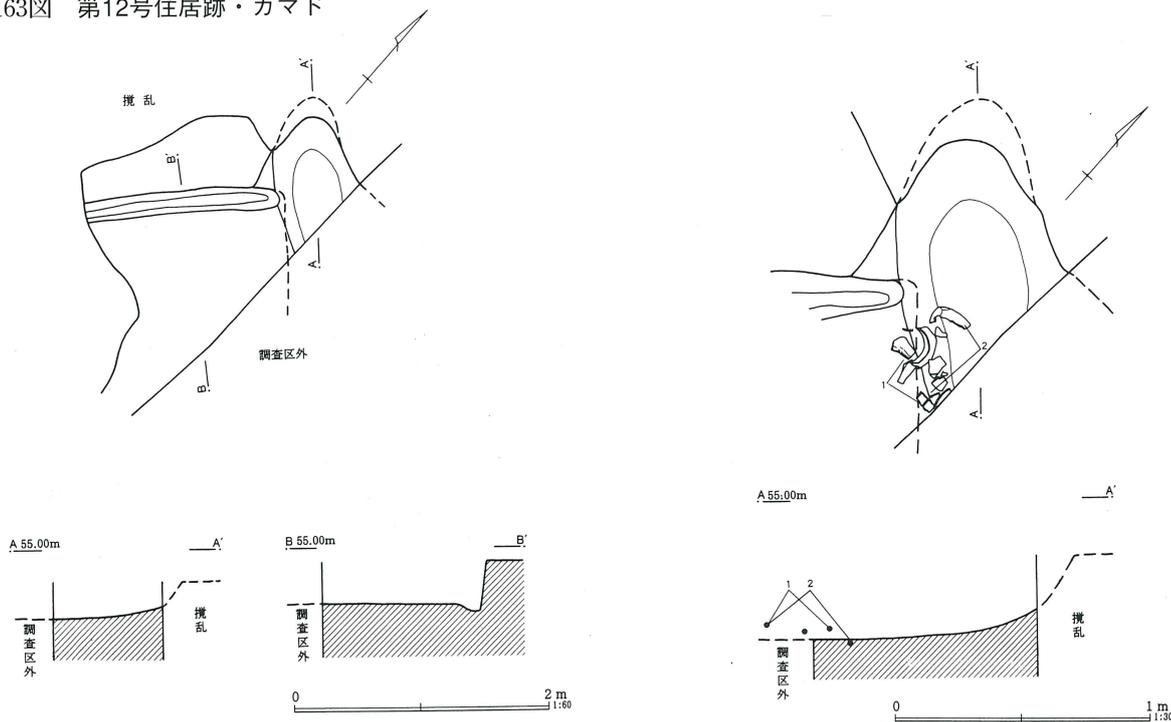
調査区中央の83-5グリッドに位置する。東側は調査区域外となる。また、カマドの一部は攪乱を受けている。本住居跡は、南側の第6号住居跡と重複関係にあり本住居跡が壊され古い。

平面形態は不明である。残存規模は主軸長1.56m、

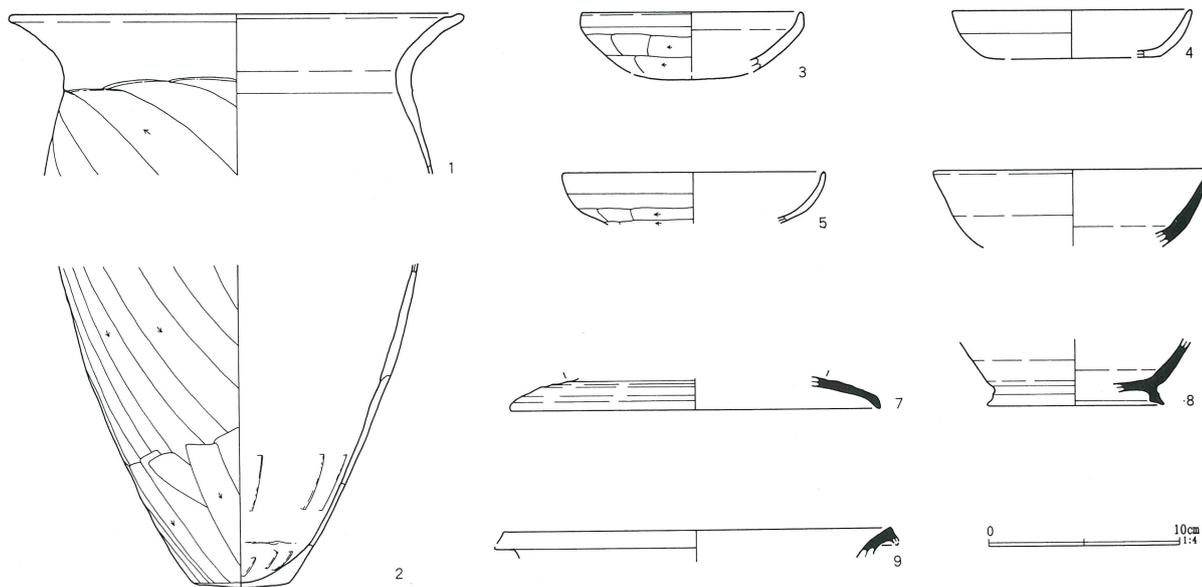
副軸長1.46m、深さ36cmである。主軸方位はN-44°-Eである。床面は平坦である。壁はカマドを確認した西側でわずかに残存し、周溝を伴う。カマドは残存長70cm、残存幅50cmである。

遺物はカマド内から甕を検出した。

第163図 第12号住居跡・カマド



第164図 第12号住居跡出土遺物



第117表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第164図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器甕	23.6	(8.5)		ABCDEF	普通	暗褐色	40	カマド No.1・3	
2	土師器甕		(17.0)	5.1	ABCDEF	普通	褐色	30	カマド No.1・4	
3	土師器坏	(11.6)	(3.5)		ABDE	普通	褐色	15		
4	土師器坏	(12.6)	(2.6)		AD	普通	茶褐色	20		
5	土師器坏	(13.8)	(2.7)		ABD	普通	褐色	10		
6	須恵器坏	(14.6)	(4.1)		ABD片	良好	暗灰色	15		末野産
7	須恵器高台坏		(3.5)	(9.4)	ACDF片	良好	灰色	20		末野産
8	須恵器蓋	(19.4)	(1.7)		A E F片	普通	黒褐色	15		末野産
9	須恵器壺	(20.4)	(1.7)		ACDF片	良好	暗灰色	10		末野産

第118表 第12号住居跡出土遺物計量表

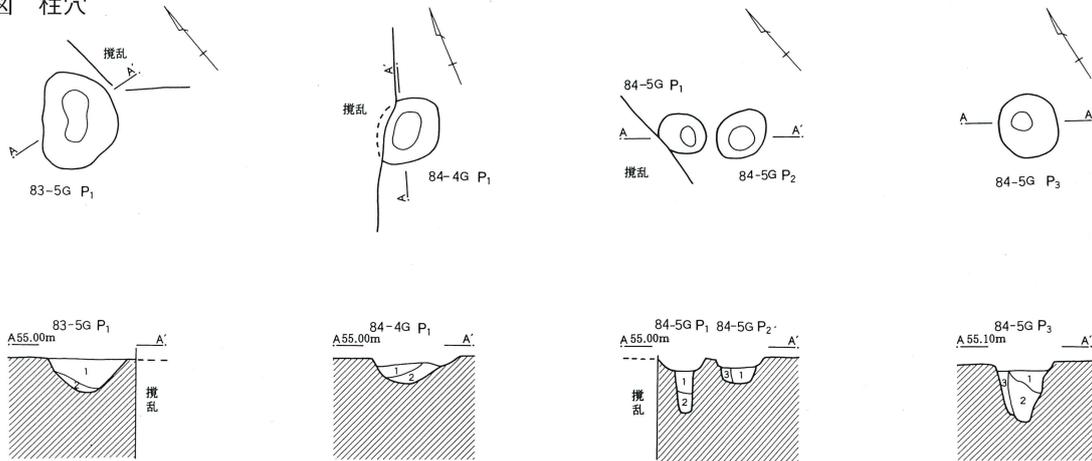
計量値	土師器								須恵器						鉄・石器	
	器種	環	皿	暗文環	鉢	甕	甗	台付甕	その他	環	蓋	椀・鉢	高台環	皿・盤		壺
口縁部(片)	6		2		16					4	1				1	
(g)	50		24		481					30	16				10	
体部(片)	12				51					1						1
(g)	91				327					6						8
底部(片)			1		2					2		1				
(g)			12		200					18		18				

2. 柱 穴

調査区域内からは、7基の柱穴が検出された。いずれも規模の小さいものであった。掘り込みも浅く、柱穴と判断したが建物跡の並びとするには難しい。84-5グリッドで検出した柱穴は、第3号住居跡の北側に

位置する。第3号住居跡は、カマド右側にテラスをもち付属的な施設が想定され、これらの上屋を支えた柱穴の可能性も考えられる。遺物は、84-5グリッドP3からは須恵器環、土師器台付甕の破片を検出した。

第165図 柱穴



83-5G Pit 1

- 1 黒褐色土 しまり良し ロームブロックを多量含む
- 2 褐色土 ややしまり良し ローム粒子を多量含む

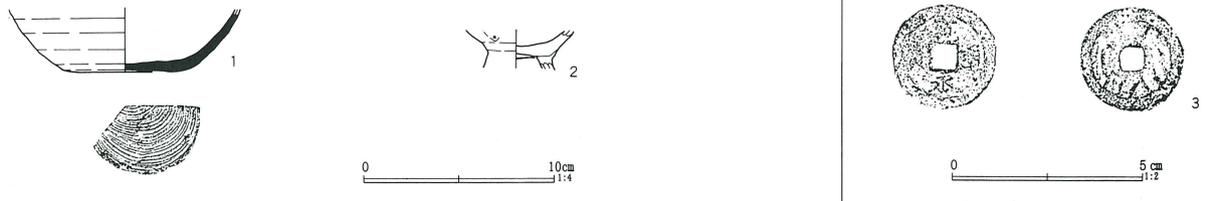
84-4G Pit 1

- 1 暗褐色土 しまり良し ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 2 褐色土 しまり良し ロームブロックを多量含む

84-5G Pit 1~3

- 1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
- 2 褐色土 ローム粒子を多量含む
- 3 暗褐色土 しまり良し ローム粒子を多量含む

第166図 柱穴出土遺物



第119表 柱穴出土遺物観察表 (第166図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器環		(3.3)	(6.6)	A B D F片	良好	褐灰色	25	84-5G P3	末野産 寛永通宝
2	土師器台付甕		(2.0)		A B D F	普通	赤褐色	90	84-5G P3	
3	古銭	銭径 2.77、穿径 0.65cm、重量 4.7g						100	83-5G	

VI 新田遺跡 (B区)

新田遺跡B区は、新田遺跡A区の南側に位置し、A区とB区の間は攪乱が激しく調査を断念した。

B区では、調査区全体に遺構が確認され奈良時代の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。また、土壌は25基を確認し大半が中・近世の遺構である。ピットは140基を検出したがこれらは形態や柱痕の依存状態から、掘立柱建物跡に復元される可能性を残すものも見られるが、周囲の攪乱が激しく組み合わせを特定するにはいたらなかった。

第1号住居跡は拡張住居である。また、カマド両袖に土師器甕が補強材として逆位の状態で埋置されていた。第2号住居跡は一辺約5mの大型住居跡で方形ブ

ランである。深さは70cm前後と比較的深く埋土にはロームブロックが大量に含まれ、人為的に埋め戻された痕跡をとどめていた。支柱穴を2ヶ所確認した。

出土遺物は、土師器坏、皿、甕、鉢、須恵器坏、蓋、甕などの遺物を検出した。特に暗文土師器が多く検出され、第2号住居跡からは暗文坏の底部外面に墨書をもつ。第3号住居跡からは内面に螺旋と放射状暗文が巡る。第4号住居跡からは土師器暗文皿が検出された。

土壌は墓穴と考えられる。熊野遺跡B区と同様南北軸をとる遺構と東西軸をとる遺構が存在する。

岡部町教育委員会でも、住宅建設に伴い平成1年12月から平成2年3月まで発掘調査を実施している。

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第168~170図)

調査区の南側77-6・7グリッドに位置する。調査区は幅0.8~1.5mと狭く南側は調査区域外となる。遺構の一部は攪乱により壊されていた。重複関係は第5・15・17号土壌に壊されていた。また、本住居跡は拡張住居跡であった。内側の住居跡が古く、北壁を約100cm、東壁を約85cm、南壁を50~70cm程外側に拡張し、西壁はそのまま利用していた。拡張前の住居跡はカマドの位置が不明である。規模は長方形で、東西軸長3.50m、南北軸長3.40m、深さ29cmである。拡張後の住居跡の形態は方形で、規模は主軸長4.50m、副軸長4.43m、深さ29cmである。主軸方位はN-67°-Eである。

床面は、地山のロームブロックを基盤としその上面に貼り床を施している。特に、拡張以前の住居跡部分や周溝内にはロームブロックが多く充填され硬くしまっていた。拡張部分は地山のローム土を主体とし貼り床は見られない。

住居跡中央部に床下土壌を検出した。断面観察によると、第1・2層はロームブロックを主体とした貼り床である。第3層は暗褐色土であり、さらに、第4層

は第2層と同様に貼り床状にロームブロックを主体とし、第4層に再び第3層と近似する土層であった。このことは床下土壌が二重底になっていた可能性が考えられる。規模は直径125cm、深さ75cmである。

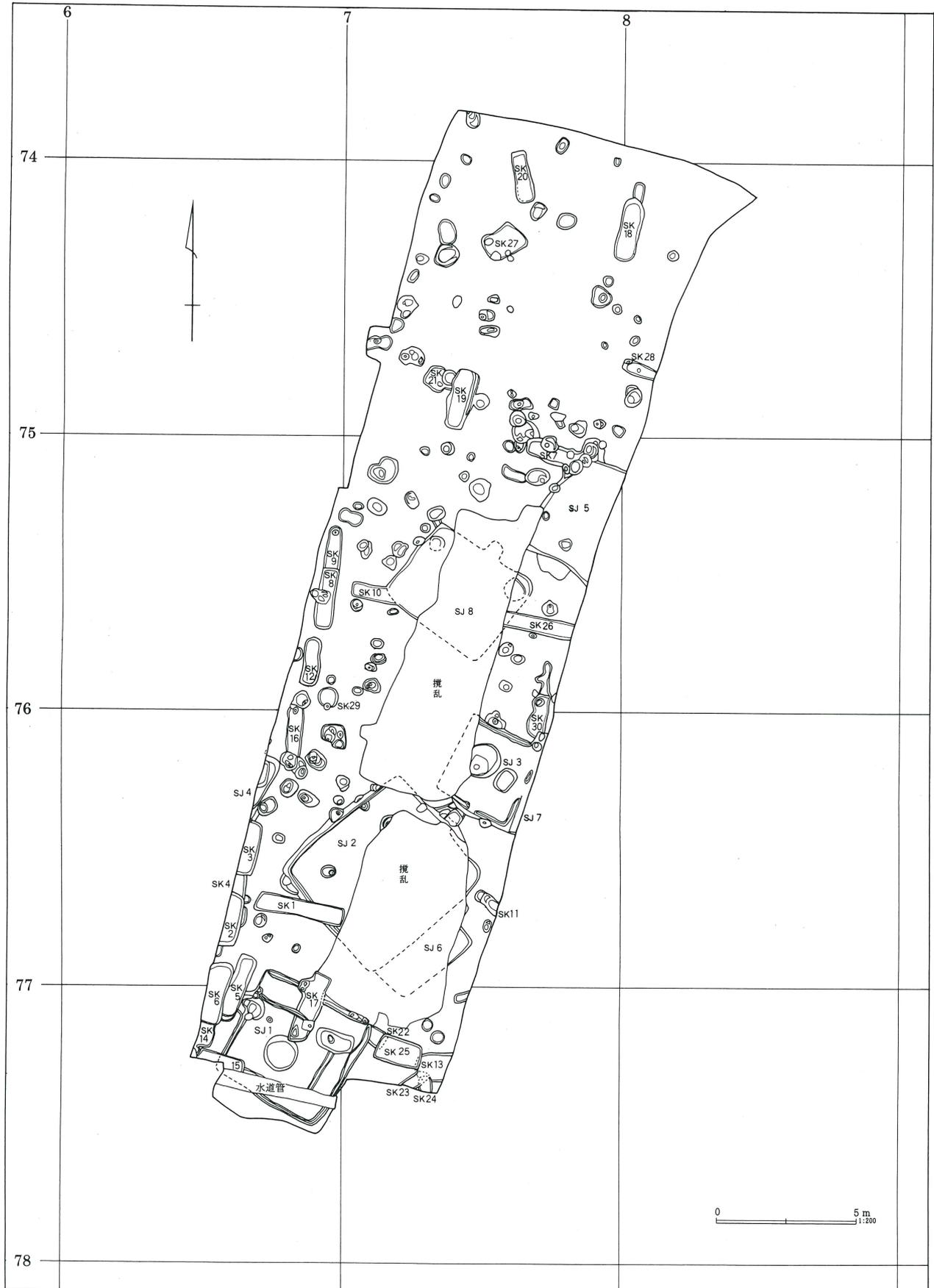
周溝はほぼ全周するものの北東コーナー部分とカマド北側で一部切れていた。壁はほとんど垂直に立ち上がる。貯蔵穴や柱穴は検出できなかった。

拡張後の住居跡に付設されたカマドを検出した。西壁のやや北よりに掘り込まれていた。煙道部分は土壌によって壊されていた。両袖は住居内に短く張り出す。灰白粘土によって造られていたが、両袖ともカマド芯材として土師器の甕を逆位の状態で埋設していた。

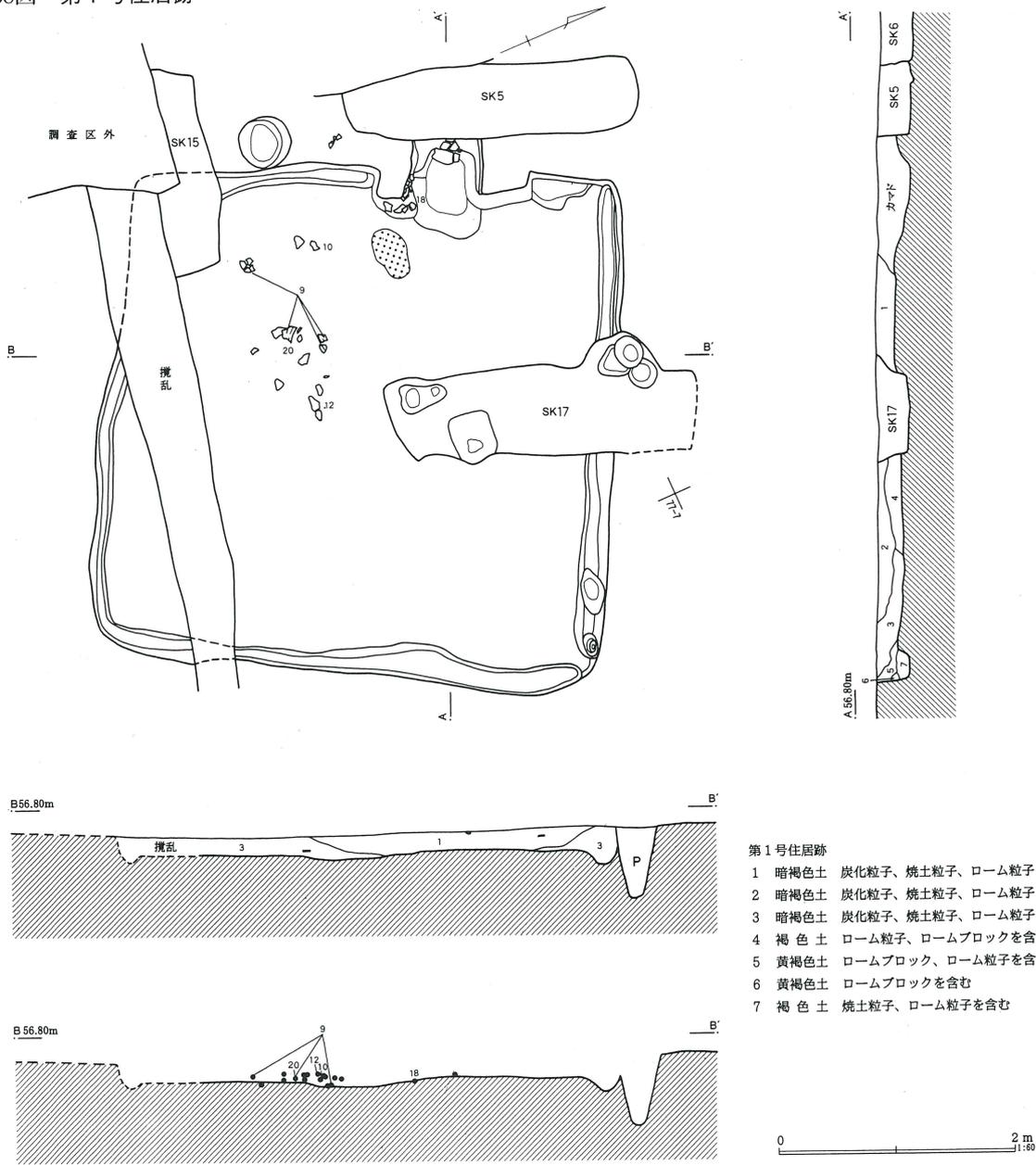
また、燃焼部内壁は被熱によって赤褐色に焼土化していた。覆土はカマド天井部に貼りこんでいた暗灰褐色土や灰褐色粘土ブロックが堆積し、一部天井の焼土層も崩落していた。カマド規模は、残存長72cm、焚き口幅72cm、焼成部幅48cm、深さ10cmであった。

カマドの左袖前面の床面には、焼土化した部分を検出した。また、周辺の床直上から土師器皿の破片や甕を検出した。

第167図 新田遺跡B区全体図



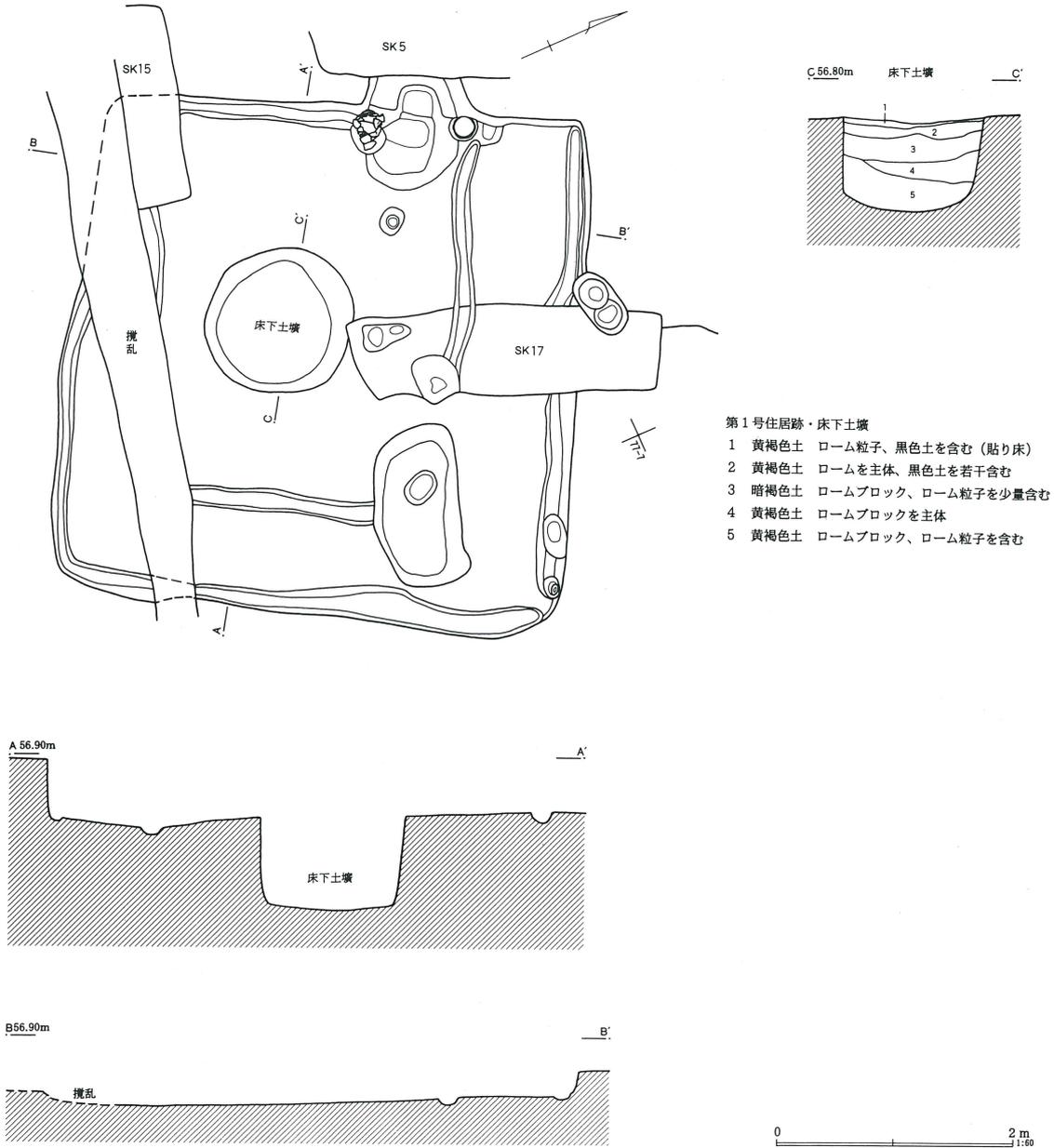
第168図 第1号住居跡



第120表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第171図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(13.6)	(3.1)		A B C D E F	普通	暗褐色	20		
2	土師器坏	(13.8)	(1.9)		A B D F	普通	褐色	20		
3	土師器皿	(14.8)	(2.1)		D F	普通	暗褐色	10		
4	土師器坏	(12.8)	(2.4)		A B D	普通	褐色	20		
5	土師器坏	(14.8)	(3.4)		A B D F	普通	暗褐色	25		
6	土師器坏	(14.0)	(2.0)		A B D F	普通	明褐色	15		
7	土師器皿	(14.4)	(2.6)		A B D F	普通	暗褐色	15		
8	土師器皿	(16.8)	(2.3)		A B D F	普通	暗褐色	10		
9	土師器皿	(15.2)	(3.4)		A B D	普通	茶褐色	80	No.4・5・12・14	
10	土師器皿	(18.0)	(3.2)		A B D F	普通	明褐色	20	No.16	
11	土師器坏	(16.5)	(4.4)		A B C D F	普通	橙褐色	30		放射状暗文

第169図 第1号住居跡掘り方

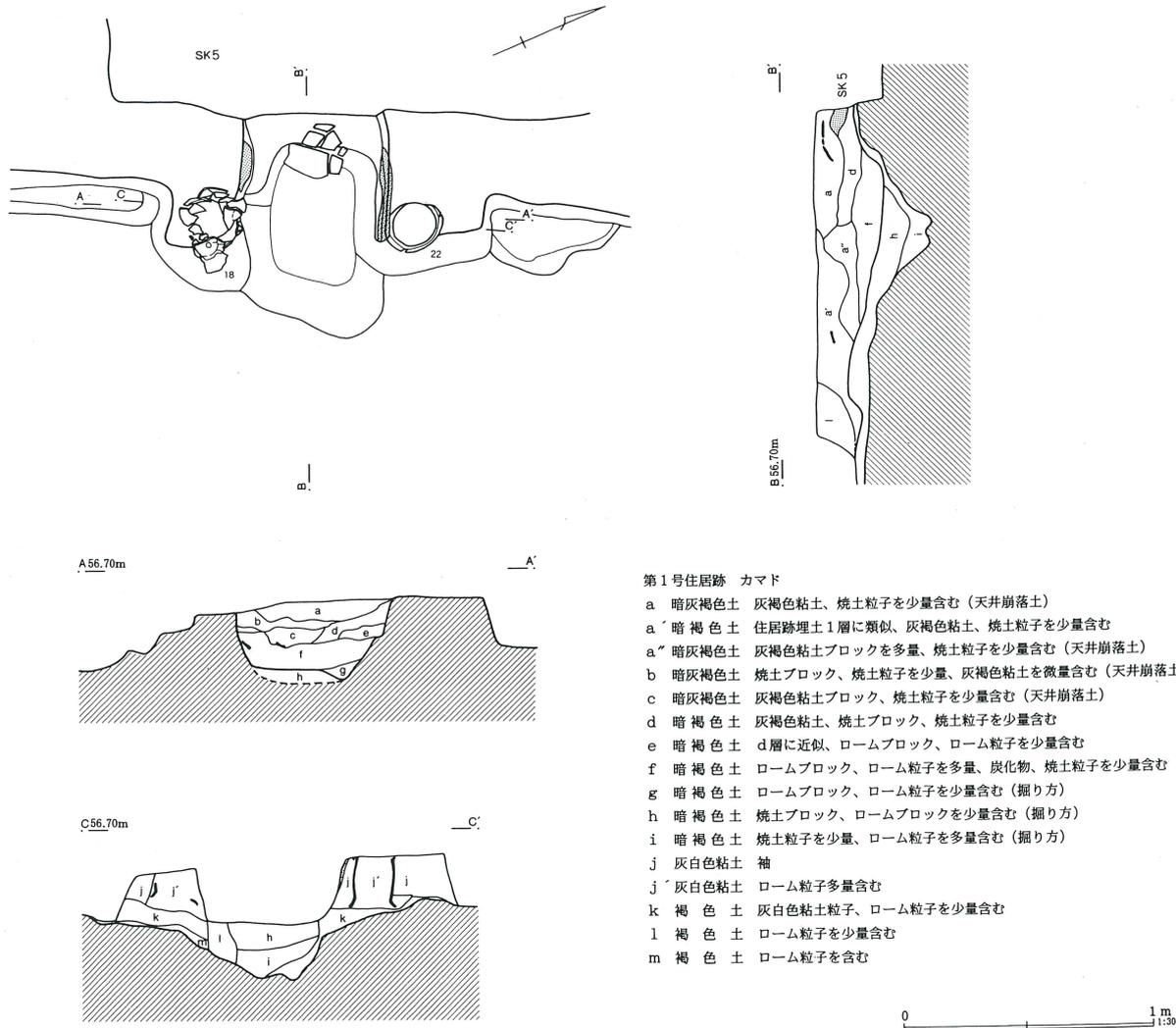


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
12	土師器坏	(17.2)	(3.3)		A B C D	普通	褐色	25	No.7	
13	土師器皿	(19.6)	(1.7)		A B D F	普通	暗褐色	10		
14	須恵器蓋	(12.8)	(1.9)		片	普通	乳灰色	15	カマド内一括	末野産
15	須恵器蓋	(17.8)	(2.4)		A C F片	普通	淡灰色	10		末野産
16	須恵器坏		(0.8)		A F片	普通	灰色	20		末野産 底部 全面回転ヘラ
17	土師器甕	(18.8)	(4.5)		A B C D F	普通	暗褐色	15		
18	土師器甕	21.0	(17.0)		A B C D E F	普通	淡褐色	50	No.19・カマド左袖内No.1	
19	土師器甕	(22.3)	(4.9)		A B D F	普通	明褐色	5		
20	土師器甕	(24.1)	(7.7)		A B F	普通	赤茶褐色	15	No.12	
21	土師器甕	(22.6)	(8.9)		A B D F	普通	褐色	10		
22	土師器甕	(22.2)	(28.0)		A B C D E F	良好	褐色	70	カマド右袖内No.1	

遺物は、土師器環、皿、暗文環、甕、須恵器環、蓋、壺、甕などを検出した。図示した須恵器は胎土から末野産である。14は推定口径12.8cmとやや小型、14は推定口径17.8cmと大型であった。また、16は坏底部と判断したが、器肉はやや厚く、底部外面は全面回転ヘラケズリが施されている。

カマド袖に埋設されていた甕は、18を左袖内から、22を右袖内から検出した。両者は口縁部の屈曲がわずかに異なるが、いずれも器肉薄く、胴部に張りをもち、外面のヘラ削り調整は上半分を斜め方向に掻き揚げ、その後、下半分を下方向に削り込み類似している。19・20は、胴部が球状に張る壺と見られる。

第170図 第1号住居跡カマド



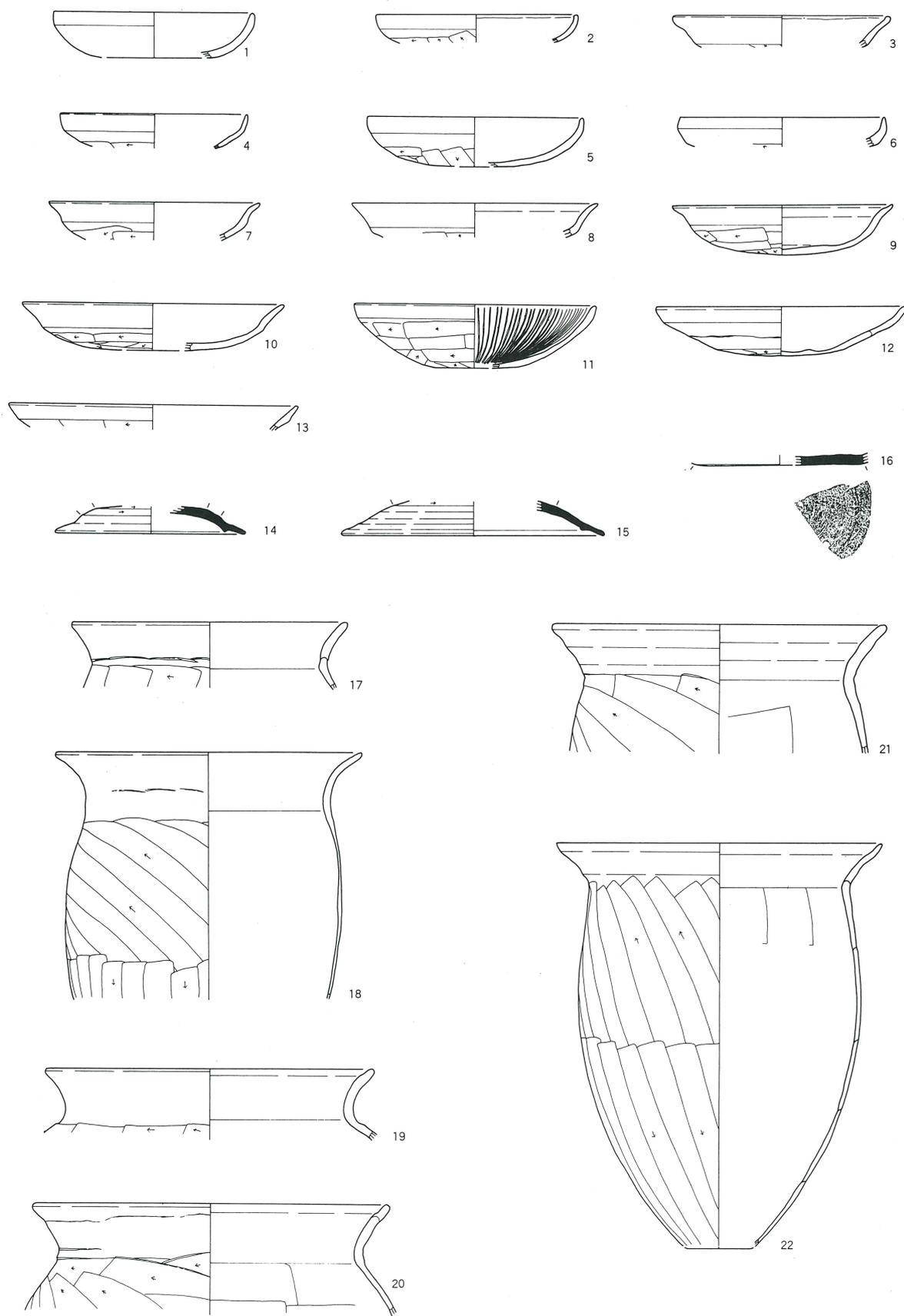
第1号住居跡 カマド

- a 暗灰褐色土 灰褐色粘土、焼土粒子を少量含む(天井崩落土)
- a' 暗褐色土 住居跡埋土1層に類似、灰褐色粘土、焼土粒子を少量含む
- a'' 暗灰褐色土 灰褐色粘土ブロックを多量、焼土粒子を少量含む(天井崩落土)
- b 暗灰褐色土 焼土ブロック、焼土粒子を少量、灰褐色粘土を微量含む(天井崩落土)
- c 暗灰褐色土 灰褐色粘土ブロック、焼土粒子を少量含む(天井崩落土)
- d 暗褐色土 灰褐色粘土、焼土ブロック、焼土粒子を少量含む
- e 暗褐色土 d層に近似、ロームブロック、ローム粒子を少量含む
- f 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子を多量、炭化物、焼土粒子を少量含む
- g 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子を少量含む(掘り方)
- h 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロックを少量含む(掘り方)
- i 暗褐色土 焼土粒子を少量、ローム粒子を多量含む(掘り方)
- j 灰白色粘土 袖
- j' 灰白色粘土 ローム粒子多量含む
- k 褐色土 灰白色粘土粒子、ローム粒子を少量含む
- l 褐色土 ローム粒子を少量含む
- m 褐色土 ローム粒子を含む

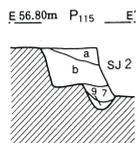
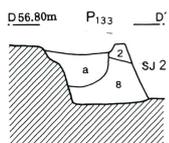
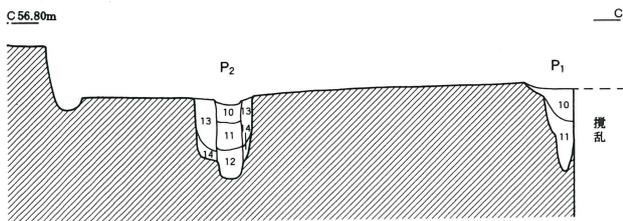
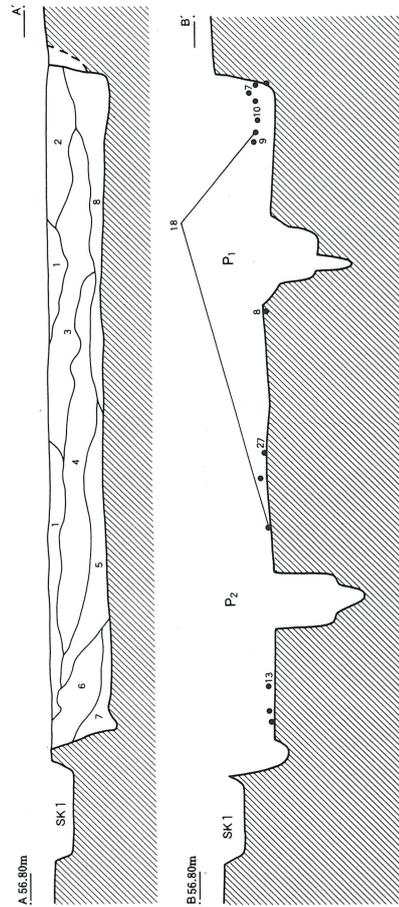
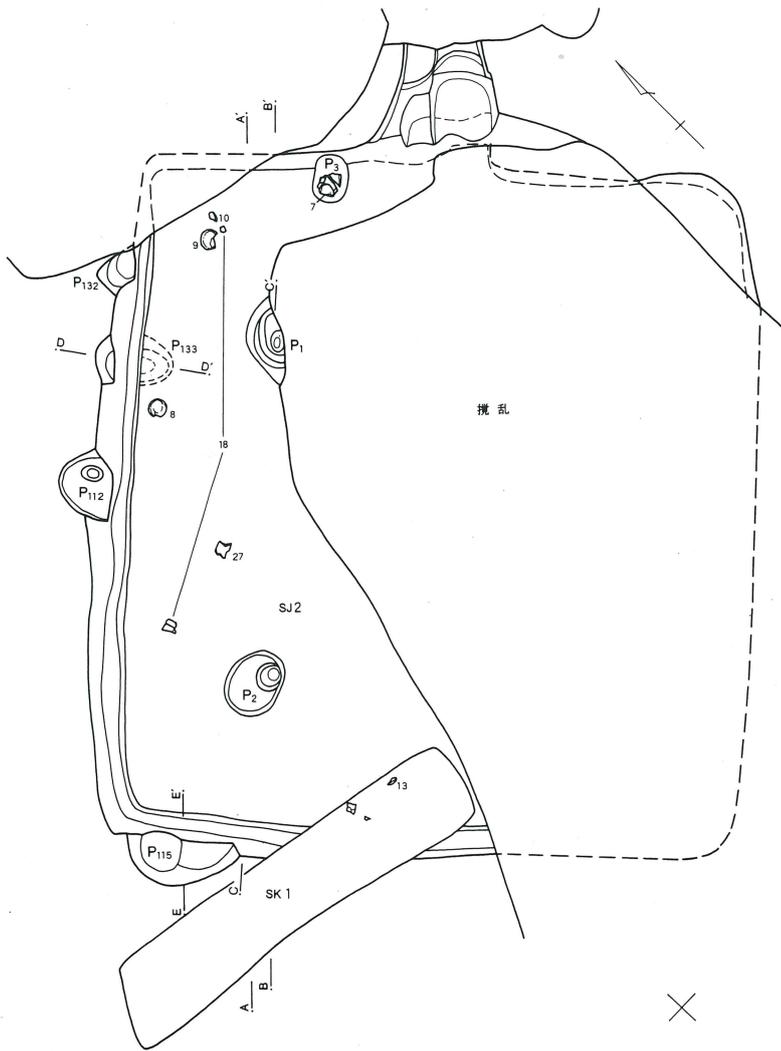
第121表 第1号住居跡出土遺物計量表

器種 計量値	土師器							須恵器						鉄・石器		
	坏	皿	暗文環	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	碗・鉢	高台坏	皿・盤		壺	甕
口縁部(片)	17	7			25					5						
(g)	115	295			1711					50						
体部(片)	83		3		163				2					1	3	
(g)	450		12		1369				25					5	25	
底部(片)									1							
(g)									22							

第171图 第1号住居跡出土遺物



第172図 第2号住居跡



Pit133
a 暗褐色土 ローム粒子を微量含む

Pit115
a 暗褐色土 ロームブロックを微量含む
b 黒褐色土 黒色砂質土

第2号住居跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子を微量含む
- 2 褐色土 焼土粒子を多量、ローム粒子を微量含む
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量含む
- 4 明褐色土 ソフトローム、ハードロームブロックを多量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子を少量、黒色土ブロックを含む
- 6 褐色土 ローム粒子を微量含む
- 7 褐色土 ローム粒子を多量含む
- 8 褐色土 黄灰色粘土、焼土粒子を少量含む
- 9 明褐色土 ローム粒子を多量含む
- 10 暗褐色土 ローム粒子を少量、黒色土を含む
- 11 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
- 12 暗褐色土 砂質 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
- 13 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 14 褐色土 ローム粒子を含む 硬い



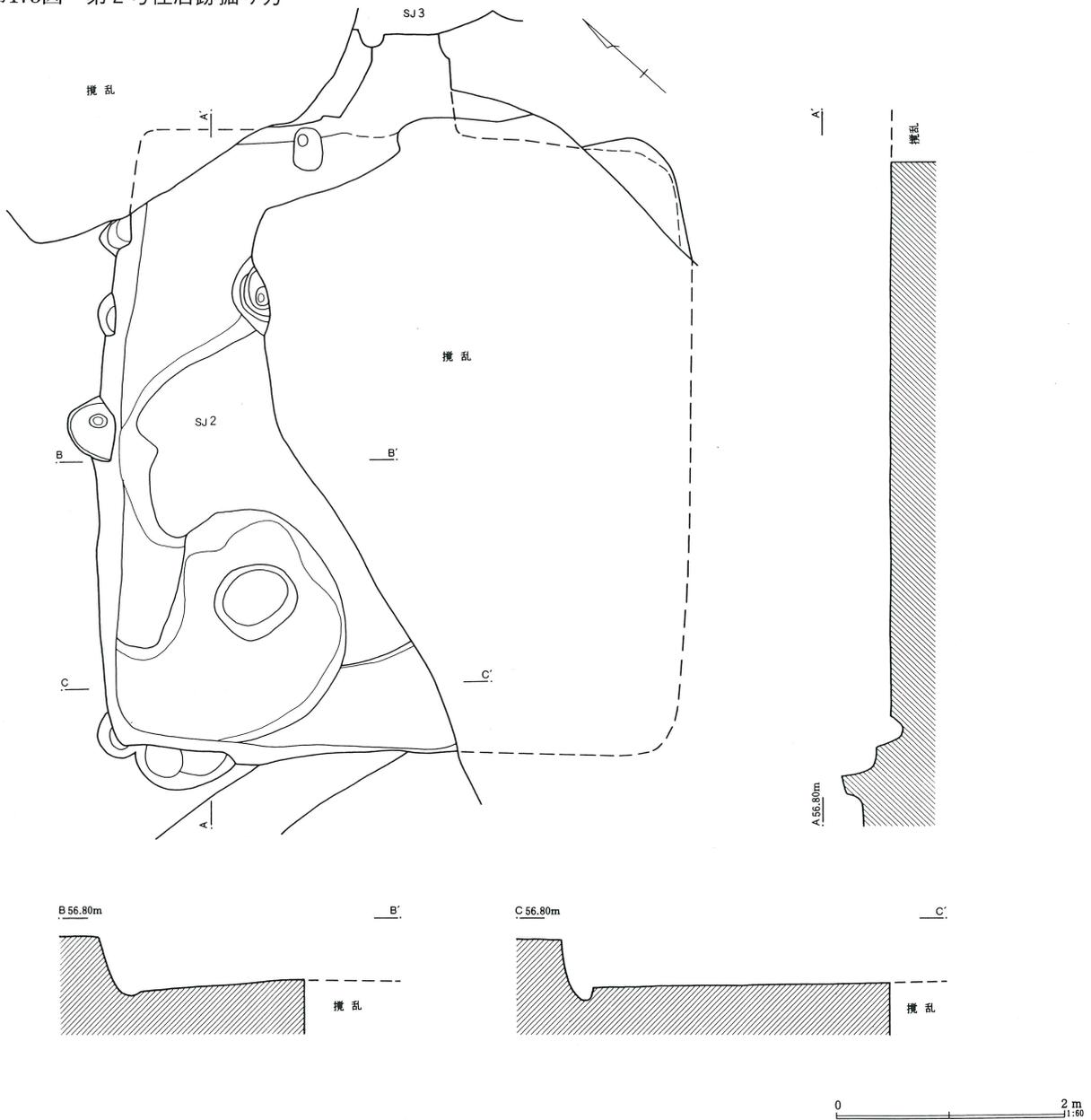
第2号住居跡 (第172~174図)

調査区の南側76-6・7グリッドに位置する。遺構の半分以上を攪乱により壊されていた。残存するのは北壁と南壁の一部と東壁に設けられたカマドである。重複関係は第1号土壌に壊されていた。また、本住居跡の南側に第6号住居跡が存在する。

形態は方形である。規模は主軸長5.60m、副軸長5.27m、深さ46.5cmである。主軸方位はN-45°-Eである。

床面は、地山のローム土を基盤とし硬くしまっていた。住居跡の北壁に並行して支柱穴2箇所を検出した。P1は径72cm、深さ73cm、P2は径43cm、深さ74cmである。また、本住居跡の掘り方は、中心部分を掘り残し、周囲をドーナツ状に掘り窪めて貼り床を施していた。壁の検出部分では周溝を検出した。覆土の状態は、断面観察によると、第4層に多量のロームブロックがレンズ状に堆積していた。本住居跡が廃絶後に、周囲で新

第173図 第2号住居跡掘り方



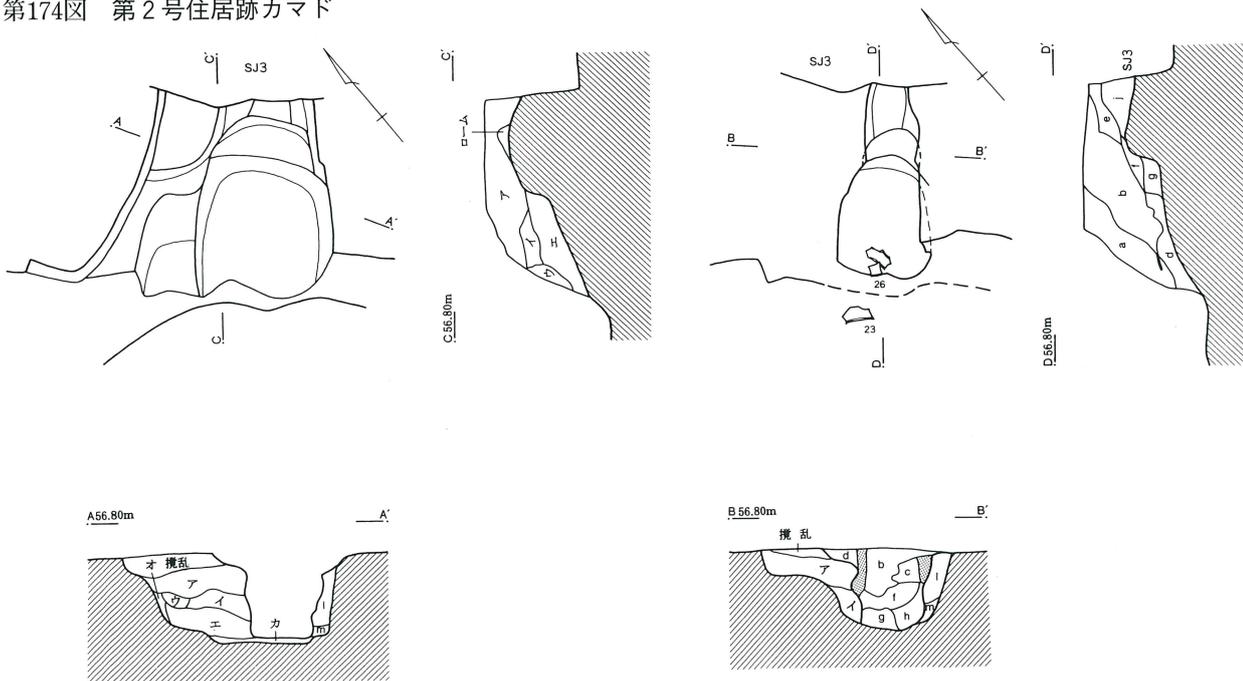
たに住居跡が造られた際の地山ロームを廃棄したものと捉えられる。

カマドは、東壁の中央部で検出し、造り替えが行われていた。残存する新カマドは燃烧部が狭く、煙道も細長い。底面は緩やかに立ち上がり、煙道部との境に奥壁をもつ。規模は残存長77cm、最大幅32cmである。旧カマドの規模は残存長82cm、燃烧部幅64cmと幅を広

げる。

遺物は、土師器坏、暗文坏、鉢、甕、須恵器坏、蓋、壺、甕などを検出した。図示した須恵器坏・蓋はいずれも胎土中に白色針状物質を含むことから南比企産産であるが、27の甕は末野産である。暗文土師器も多く出土した。18は底面に「九」の墨書が残る。カマド内からは23の土師器甕と26の土師器鉢が出土した。

第174図 第2号住居跡カマド



第2号住居跡 旧カマド

- ア 灰褐色土 粘土 (天井崩落土)
- イ 灰褐色土 粘土被熱 (天井崩落土)
- ウ 暗赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを含む
- エ 暗褐色土 砂質 焼土粒子を少量含む (m層に近似)
- オ 暗褐色土 焼土粒子を少量含む
- カ 褐色土 茶褐色土、白色粘土、焼土粒子、炭化物を含む

第2号住居跡 カマド

- a 暗灰褐色土 灰褐色粘土、焼土粒子、焼土ブロックを少量含む
- b 暗赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量含む (天井崩落土)
- c 暗赤褐色土 焼土粒子、焼土ブロックを多量含む
- d 暗灰褐色土 天井粘土被熱部分
- e 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子、粘土を少量含む
- f 暗褐色土 焼土粒子を多量、ローム粒子、炭化物を少量含む

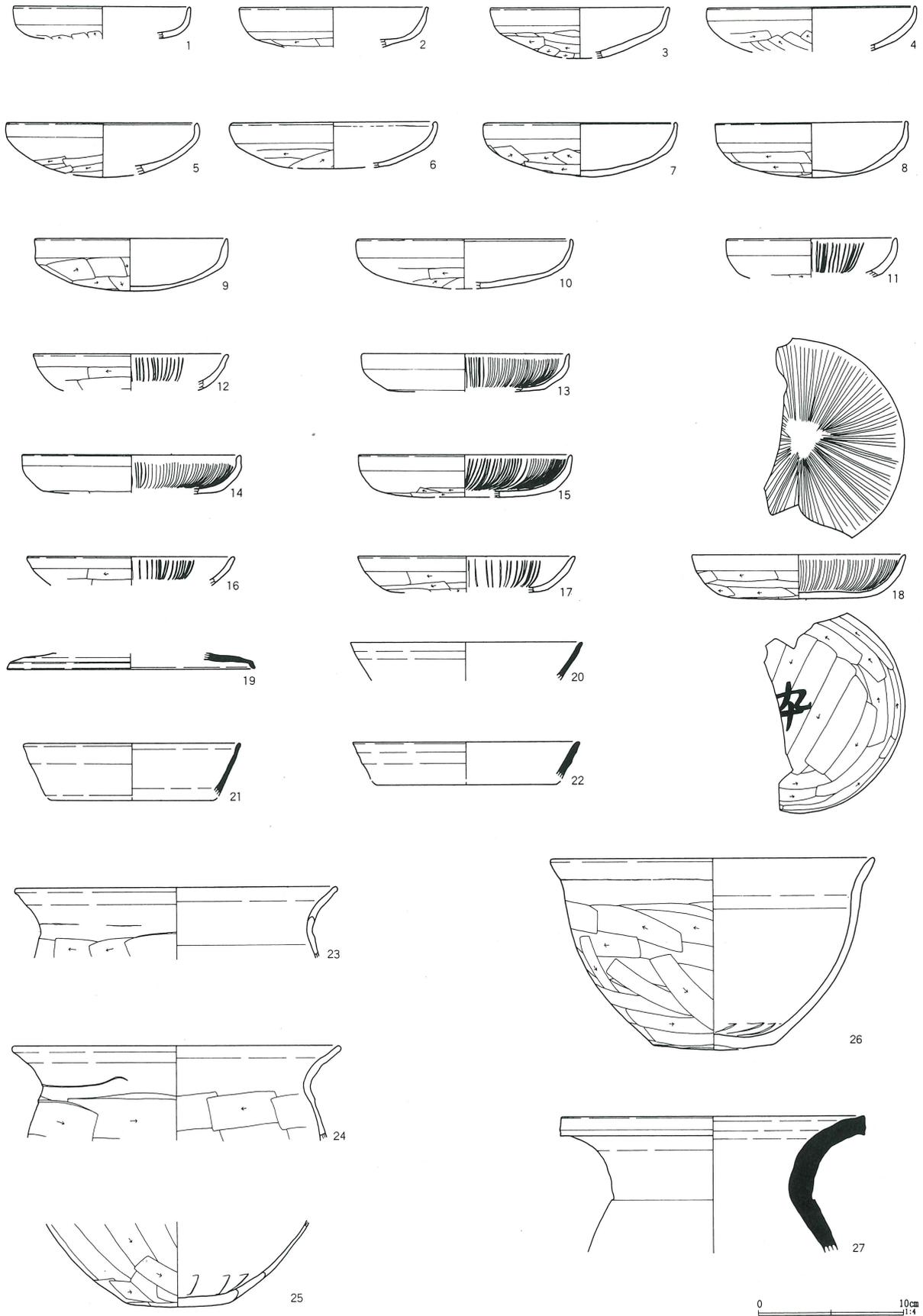
- g 暗褐色土 焼土粒子を多量含む
- h 暗褐色土 g層に近似 g層より焼土粒子少ない
- i 黒色土 灰、炭化物を少量含む
- j 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを少量含む
- k 暗灰褐色土 粘土貼りつけ
- l 暗褐色土 灰褐色粘土、灰褐色粘土粒子を多量含む (掘り方 粘土貼り付け部分)
- m 暗褐色土 l層より暗い 砂質 ロームブロック、ローム粒子を少量含む



第122表 第2号住居跡出土遺物計量表

器種 計量値	土師器							須恵器				灰釉	鉄・石器			
	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甗	その他	坏	蓋	碗・鉢	高台坏	皿・盤	壺	甕	鉄器
口縁部(片)	153		13	1	2				3	1				3		2
(g)	1075		235	375	15				14	8				300		29
体部(片)	223		7						2					2	2	
(g)	240		28						7					51	3.2	
底部(片)					5				4							
(g)					110				36							

第175图 第2号住居跡出土遺物



第123表 第2号住居跡出土遺物観察表(第175図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(12.1)	(2.2)		A D F	普通	褐色	15		
2	土師器坏	(12.9)	(2.8)		A D F	普通	褐色	20		
3	土師器坏	(12.2)	(3.4)		B D F	普通	暗褐色	25	覆土	
4	土師器坏	(14.4)	(3.1)		A B D F	普通	褐色	20	覆土	
5	土師器坏	(13.2)	(3.5)		C D F	普通	褐色	30	覆土	
6	土師器坏	(14.1)	(3.1)		A B D F	普通	褐色	40		
7	土師器坏	13.1	3.7		B C D F	普通	褐色	60	No.2	
8	土師器坏	13.2	3.8		B C D F	普通	褐色	100	No.8	
9	土師器坏	13.2	3.6		B D F	普通	褐色	90	No.5	
10	土師器坏	(14.8)	(3.4)		A B D F	普通	褐色	25	No.7	
11	土師器坏	(11.7)	(2.7)		A B D F	普通	橙褐色	10	覆土	放射状暗文
12	土師器坏	(13.3)	(2.5)		A B D F	普通	褐色	5	覆土	放射状暗文
13	土師器坏	(14.2)	(2.6)		A D F	良好	橙褐色	15	No.14	放射状暗文
14	土師器坏	(15.0)	(2.6)		A B D F	普通	橙褐色	30		放射状暗文
15	土師器坏	(14.6)	(2.9)		A B C D F	普通	赤褐色	20		放射状暗文
16	土師器坏	(14.1)	(2.0)		A B F	普通	橙褐色	5	覆土	放射状暗文
17	土師器坏	(14.8)	(2.5)		A B D F	普通	橙褐色	5	覆土	放射状暗文
18	土師器坏	(14.8)	3.0		A B D E	良好	赤褐色	50	No.6・No.11	放射状暗文 墨書
19	須恵器蓋	(17.1)	(1.1)		A F 針	良好	灰色	10		南比企産
20	須恵器坏	(15.9)	(2.6)		A 針	良好	灰色	5		南比企産
21	須恵器坏	(14.8)	(4.0)		A D F 針	良好	灰色	5	覆土	南比企産
22	須恵器坏	(15.6)	(3.0)		A F	良好	灰色	10	覆土	産地不明
23	土師器甕	(22.0)	(5.0)		A B D F 片	普通	褐色	15	カマド No.3	
24	土師器甕	(22.4)	(6.6)		A B D F 片	普通	赤茶褐色	20	覆土	
25	土師器甕		(5.9)	7.4	A D F	普通	茶褐色	30	覆土	
26	土師器鉢	(22.4)	13.3	(8.3)	A B C D E F	普通	明褐色	40	カマド 左袖内No.1	
27	須恵器甕	(20.8)	(9.5)		A B F 片	普通	暗灰色	20	No.10	末野産

第3号住居跡(第176図)

調査区の中央76-7グリッドに位置する。遺構の西側半分を攪乱により壊されていた。残存するのは北壁から東壁と南壁の一部である。重複関係は東側に第7号住居跡が存在し、本住居跡が切りこんでいる。

形態は方形と推定される。残存規模は南北軸長3.43m、東西長2.58m、深さ16cmである。主軸方位はN-16°-Wである。

床面は、ロームブロックを含む貼り床によって平坦である。住居跡中央から円形の床下土壇1号を検出した。規模は長軸130cm、短軸(110)cm、深さ70cmである。貼り床を剥がして床下土壇2号を検出した。規模は長

軸88cm、短軸66cm、深さ71cmである。北壁と南壁は垂直に立ち上がり周溝も検出したが、東壁は第7号住居跡の覆土を壁にしていたため明確につかむことができなかった。このため、床面で検出した周溝により範囲を確認することができた。

カマドや柱穴および貯蔵穴などの施設は検出できなかった。

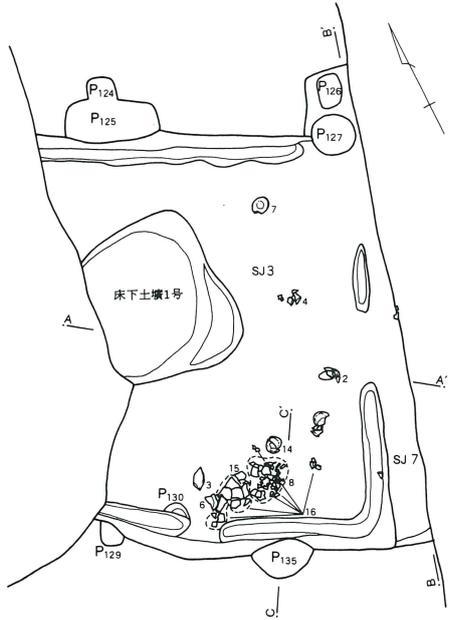
遺物は、南壁際から集中して検出した。出土した須恵器坏、蓋はいずれも末野産で占められていた。また、床直から16の「く」の字状口縁甕を検出した。この他、器高の浅い暗文坏が多く出土した。

第7号住居跡(第176図)

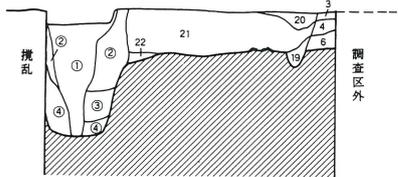
調査区の中央76-7グリッドに位置する。遺構は西側の第3号住居跡によって切られ、東側は調査区外に

伸びる。残存規模は南北軸長2.80m、深さ11.6cmである。南北軸方位はN-38°-Wである。

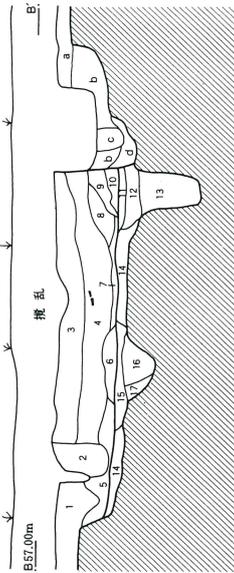
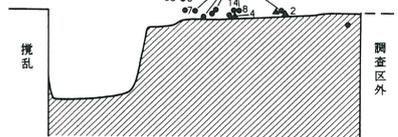
第176図 第3・7号住居跡・掘り方



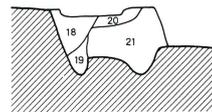
A 57.00m 床下土壇1号 A'



A 56.70m 床下土壇1号 A'



B 57.00m C'

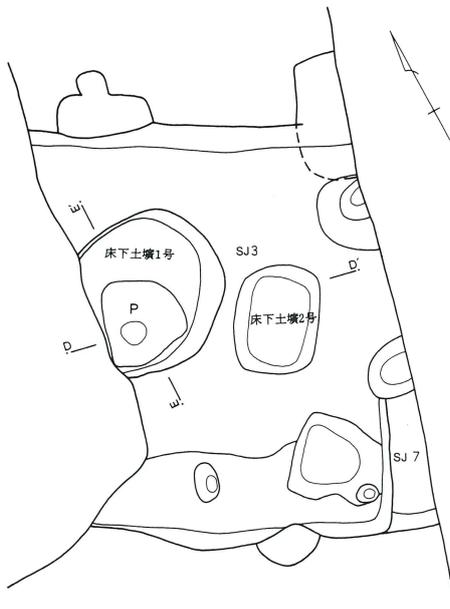


第7号住居跡

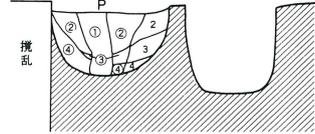
- 1 灰褐色土 ロームブロック、浅間Aを多量含む 浅間A集積層を部分的に含む
 - 2 暗灰褐色土 ローム粒子を少量、白色粘土粒子、浅間Aを微量含む
 - 3 暗灰褐色土 ロームを殆ど含まない
 - 4 褐色土 やや粘質 微細ローム粒子、焼土粒子を少量含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒子を少量含む
 - 6 明褐色土 褐色粘土、焼土粒子を多量含む(カマド崩壊土)
 - 7 褐色土 ローム粒子、焼土粒子、粘土粒子を少量、ロームブロックを部分的に含む
 - 8 褐色土 ローム粒子を多量含む
 - 9 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、粘土粒子を含む
 - 10 明褐色土 焼土ブロックを多量含む
 - 11 灰白色粘土 ロームブロックを含む(貼り床面 ガチガチに硬い)
 - 12 明褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
 - 13 褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを含む(Pit掘り方)
 - 14 明褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む(貼り床)
 - 15 暗褐色土 ロームブロック、褐色土、焼土粒子を含む(貼り床面硬くしまる)
 - 16 褐色土 ロームブロック、焼土ブロックを含む
 - 17 褐色土 ロームブロックを少量含む(掘り方)
- 第3号住居跡
- 18 暗褐色土 ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子を微量含む
 - 19 褐色土 やや粘性有り 微細ローム粒子、焼土粒子を少量含む
 - 20 褐色土 焼土ブロック、黄灰色砂質粘土を含む
 - 21 褐色土 焼土ブロックを含む
 - 22 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロックを含み、しまりもつ(貼り床)

Pit 126・127

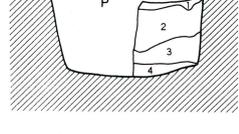
- a 暗褐色土 焼土粒子、ローム粒子を微量含む
- b 暗褐色土 ローム粒子を多量含む
- c 暗褐色土 ローム粒子を微量含む
- d 暗褐色土 ロームブロックを少量、ローム粒子を含む
- e 黄褐色土 ロームブロック主体 暗褐色土を含む



D 56.50m 床下土壇1号 床下土壇2号 D'



E 56.50m 床下土壇1号 E'

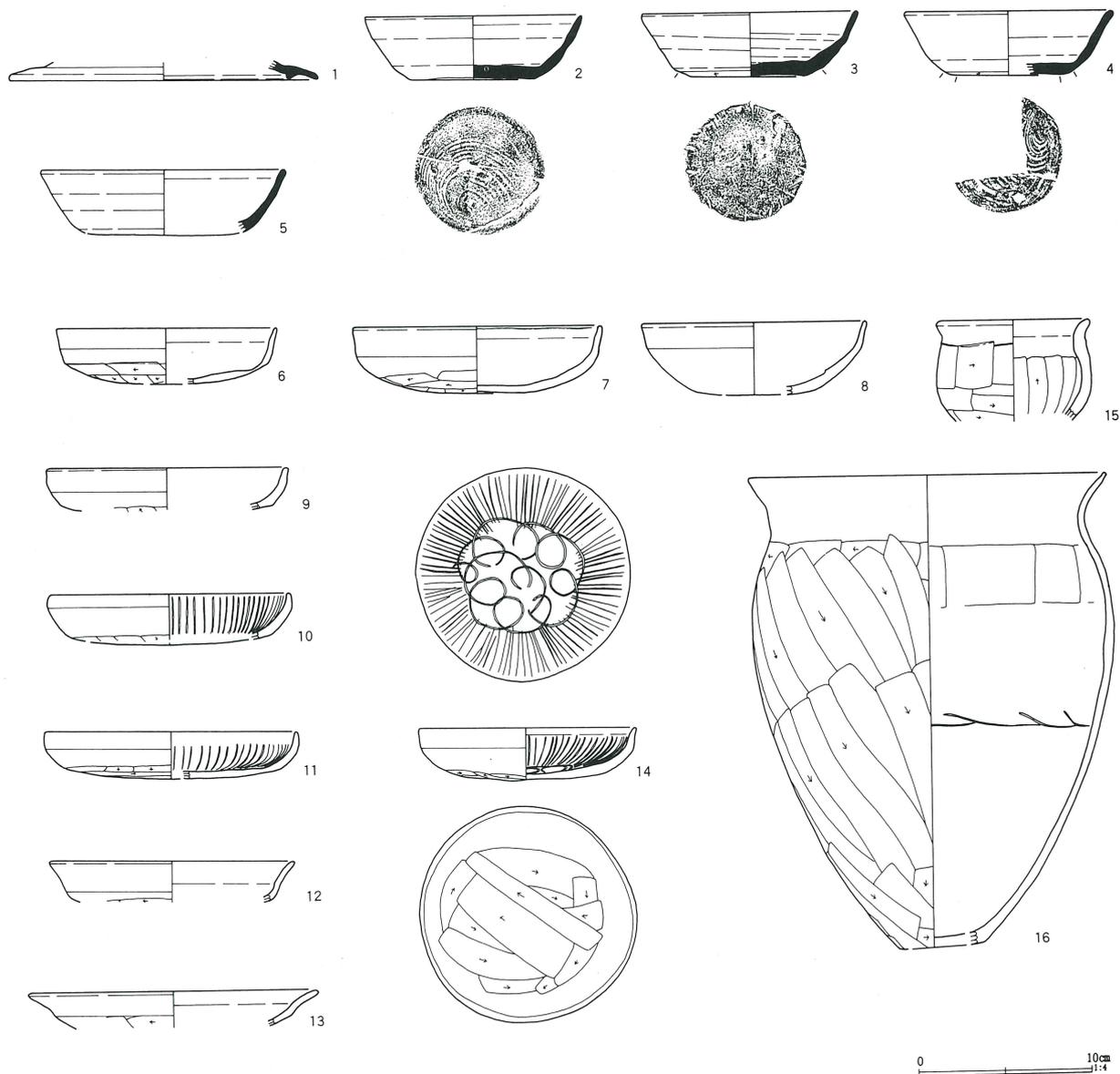


第3号住居跡 床下土壇1・2号・Pit

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子を、ロームブロックを多量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
- ① 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む(掘立柱穴)
- ② 暗黄褐色土 ロームブロックを多量含む(掘立柱穴)
- ③ 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む(掘立柱穴)
- ④ 暗黄褐色土 ロームブロックを多量含む(掘立柱穴)



第177図 第3号住居跡出土遺物



第124表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第177図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器蓋	(17.9)	(1.1)		ACDF片	普通	黒灰色	10		末野産
2	須恵器坏	12.5	3.7	7.1	ACDF片	普通	褐灰色	80	No.11	末野産
3	須恵器坏	12.4	3.7	6.5	ACDF片	良好	灰色	90	No.1	末野産 重ね焼き内面火襷
4	須恵器坏	(12.0)	3.7	(6.8)	ACDF片	普通	淡灰色	30	No.13	末野産
5	須恵器坏	(14.0)	(3.7)		ACD片	良好	灰色	20		末野産
6	土師器坏	(12.7)	(3.2)		ABCDE	普通	褐色	40	No.2	
7	土師器坏	14.3	3.9		ABD	良好	橙褐色	90	No.15	
8	土師器坏	(12.8)	(4.2)		ABDF	普通	赤褐色	30	No.6	内面口縁部外面赤彩
9	土師器坏	(13.9)	(2.4)		ADEF	普通	橙褐色	10	覆土	
10	土師器坏	(13.8)	(2.9)		ADEF	良好	橙褐色	20	覆土	放射状暗文
11	土師器坏	(14.5)	(2.2)		ABCDEF	良好	橙褐色	30	覆土・カド左側	放射状暗文
12	土師器皿	(14.0)	(2.3)		ABDEF	普通	褐色	10		
13	土師器皿	(16.6)	(2.1)		ABDEF	普通	褐色	5		

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
14	土師器坏	12.4	3.1		A B C D E F	良好	橙褐色	100	No.8	螺旋・放射状暗文
15	土師器小型壺	(8.6)	(5.9)		A B C D E F	普通	橙褐色	20	No.5	
16	土師器甕	21.5	27.6	(5.0)	A B F	普通	褐色	70	No.3・4・5・6・7・9	

第125表 第3号住居跡出土遺物計量表

計量値	器種	土師器							須恵器						鉄・石器		
		坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甑	台付甕	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤		壺	甕
口縁部(片)		62	6	3		19			1	7	1						
(g)		568	20	175		844			41	386	11						
体部(片)		107			6	363				4	2						1
(g)		302			32	1100				11	12						202
底部(片)						7	1			2							
(g)						52	5			19							

第4号住居跡 (第178図)

調査区の中央76-6グリッドに位置する。検出した部分は北東コーナー部のみで、遺構は西側の調査区域外に伸びる。東側には第2号住居跡が存在し、南側には第3号土壇が存在する。

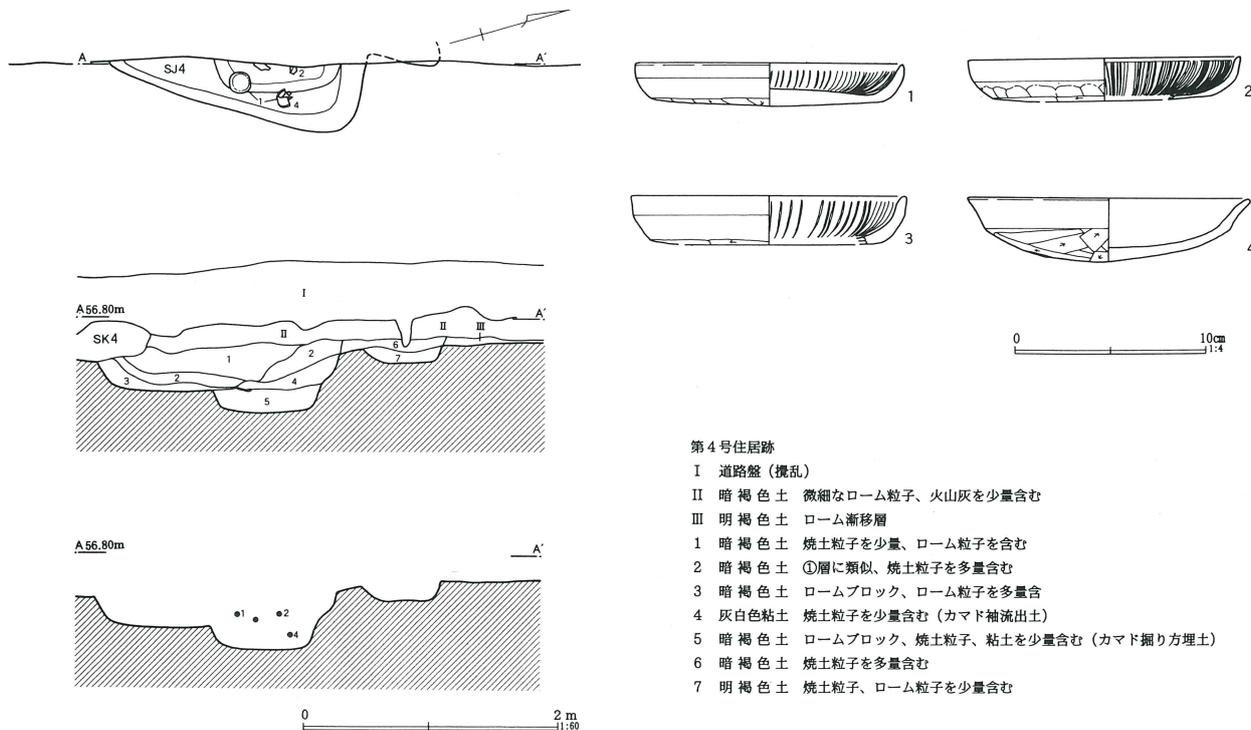
形態は不明である。残存する規模は南北軸長2.30m、東西軸長0.52m、深さ30.6cmである。主軸方位はN-75°-Eである。

床面は、ロームブロックを含む貼り床によって平坦

である。北東コーナー部に貯蔵穴を確認した。規模は長軸100cm、深さ15cmであった。壁溝やカマドは検出できなかった。

遺物は、土師器坏、皿、暗文坏、甕、台付甕の破片を検出した。第178図1~3は貯蔵穴の周辺で検出された。いずれも、土師器皿で、器高浅く、底部は平坦である。内面に放射状の暗文を施し色調は橙褐色である。4は丸底で口縁部を大きく外反させる土師器皿である。

第178図 第4号住居跡・出土遺物



第126表 第4号住居跡出土遺物観察表(第178図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器皿	14.0	2.3		A B C D E F	良好	橙褐色	90	No.1・2	放射状暗文
2	土師器皿	(14.3)	(2.2)		A B D E F	良好	橙褐色	30	No.4	放射状暗文
3	土師器皿	(14.4)	(2.6)		A B D E F	普通	橙褐色	10		放射状暗文
4	土師器皿	(14.9)	3.3		A B C D E F	普通	褐色	80	No.2	

第127表 第4号住居跡出土遺物計量表

計量値	器種	土師器							須恵器						鉄・石器		
		坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	碗・鉢	高台坏	皿・盤		壺	甕
口縁部(片)		2	4	3		2											
(g)		3	279	229		9											
体部(片)		7				27											
(g)		9				271											
底部(片)							1										
(g)							24										

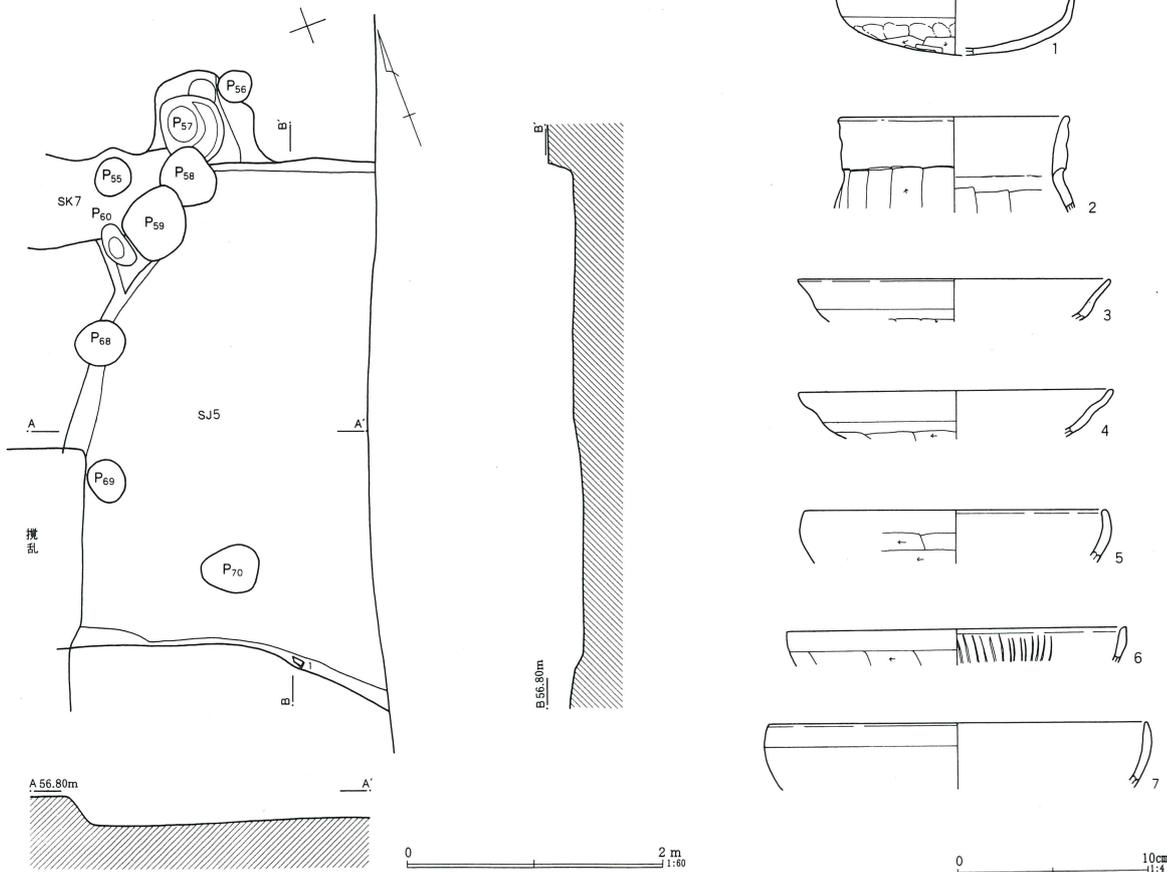
第5号住居跡(第179図)

調査区の中央76-6グリッドに位置する。検出した部分は住居跡の西側部分のみであるが、北西コーナー部は土壌やピットによって切られて、南西コーナー部は攪乱を受けていた。遺構の東側は調査区域外に伸びる。

本住居跡の南西側には第8号住居跡が存在する。

形態は不明である。残存する規模は南北軸長4.14m、東西軸長2.42m、深さ22.5cmである。主軸方位はN-21°-Wである。

第179図 第5号住居跡・出土遺物



床面は、ロームブロックを含む貼り床によって平坦である。貼り床を剥がすと住居中央付近は地山ロームを残しドーナツ状に荒掘りされていた。周囲は細かな凹凸が見られた。周溝やカマド、貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は、土師器坏、皿、暗文坏、甕破片を検出した。坏は、丸底で体部の調整は口縁部分までケズリが見られる。小破片であるが第179図1、5、7は口径が異なり器種組成が認められる。3、4は皿である。2は口縁部が弱いナデ調整されている。器種は鉢とする。

第128表 第5号住居跡出土遺物観察表(第179図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(12.5)	(3.2)		A B D	良好	茶褐色	80	No.1	
2	土師器鉢	(11.9)	(5.1)		A B D	普通	暗褐色	10		
3	土師器皿	(16.4)	(2.2)		A B C D E F	普通	黄褐色	5		
4	土師器皿	(16.5)	(2.6)		A B C D E F	普通	褐色	20		
5	土師器坏	(16.0)	(2.8)		A B D	良好	黒褐色	5		
6	土師器坏	(18.0)	(1.9)		A D	良好	橙褐色	10		放射状暗文
7	土師器坏	(20.0)	(3.5)		A B C D E F	普通	茶褐色	5		

第129表 第5号住居跡出土遺物計量表

計量値	土師器								須恵器						鉄・石器	
	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甗	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤	壺		甕
口縁部(片)	12	5	1	1												
(g)	146	38	4	28												
体部(片)	20		1		39											
(g)	89		13		152											
底部(片)																
(g)																

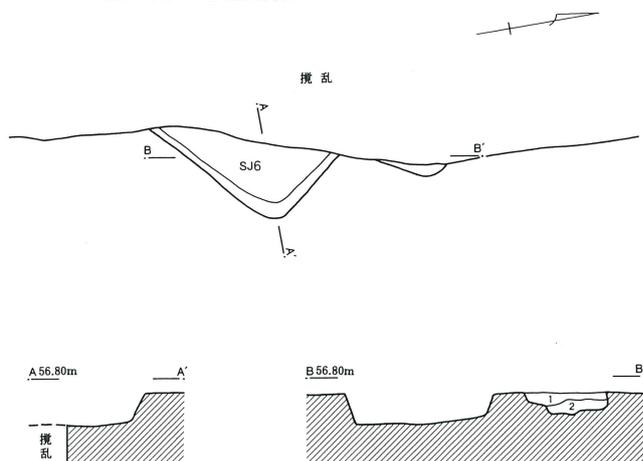
第6号住居跡(第180図)

調査区の中央76-7グリッドに位置する。住居跡西側に大きな攪乱を受け、検出した部分は住居跡の北東コーナー部およびカマドの一部分のみである。北西側には攪乱を挟んで第2号住居跡が検出された。形態は不明である。残存する規模は南北軸長1.20m、東西軸長0.60m、深さ23cmである。主軸方位はN-80°-Eである。

床面は、地山ロームを基盤とし貼り床によって平坦である。北東コーナー部の北側にカマドの一部が検出された。本住居跡のカマドは北壁に設けられていた。規模や構造は不明である。かろうじて断面観察により燃焼部の堆積層を確認した。第1層は焼土ブロック、焼土粒子を多量にを含んでいた。また、第2層は焼土ブロック、焼土粒子に加え、灰褐色粘土を多量にを含んでいた。壁溝や貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は土師器坏、鉢、甕の破片を少量検出した。

第180図 第6号住居跡



第6号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土ブロック、焼土粒子、ロームブロック、ローム粒子を多量、炭化物を少量含む
- 2 暗褐色土 焼土ブロック、焼土粒子、灰褐色粘土を多量含む



第130表 第6号住居跡出土遺物計量表

計量値	土師器								須恵器						鉄・石器		
	器種	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤		壺	甕
口縁部(片)					1	1											
(g)					5	3											
体部(片)	2					13											
(g)	8					24											
底部(片)																	
(g)																	

第8号住居跡(第181図)

調査区の中央75-7グリッドに位置する。遺構の中央に大きな攪乱を受け、西側の一部と北東コーナー部のみ検出できた。また、重複関係は第1・10号土壇に壊されていた。

住居跡の形態は方形で、規模は主軸長3.46m、副軸長4.32m、深さ34.5cmである。主軸方位はN-38°-Wである。

床面は、地山のロームブロックを基盤としその上面に貼り床を施している。貼り床を剥がすと住居跡中央部分が掘り下げられていた。床下土壇の可能性も考え

られるが攪乱によって詳細は不明である。壁は北西コーナーから南西コーナーに至る西壁を検出した。ほぼ垂直に立ち上がり、壁溝はもたない。また、北東コーナー部を検出し、貯蔵穴の一部を確認したが規模は不明である。

遺物は、土師器坏、皿、甕、須恵器坏などを検出した。図示した1の須恵器坏は、胎土に白色針状物質を含み南比企産である。2、3は北武蔵型坏である。5は土師器鉢とした。

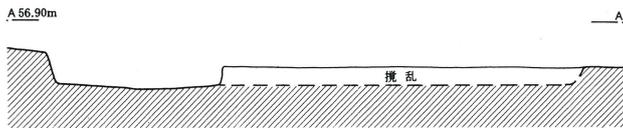
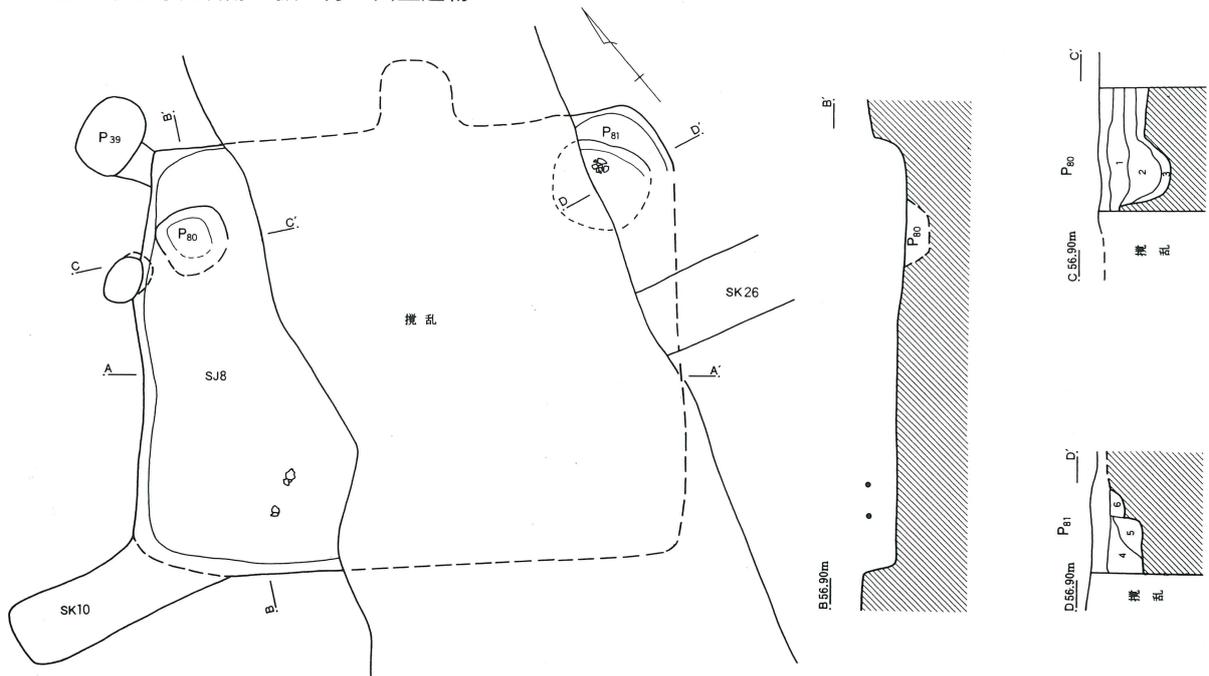
第131表 第8号住居跡出土遺物観察表(第181図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器坏	(13.9)	(3.7)		A D F 針	良好	灰色	10	覆土	南比企産
2	土師器坏	(14.0)	(2.5)		A B D E	普通	淡褐色	5	覆土	
3	土師器坏	(12.4)	(2.7)		A B D E	普通	明褐色	15	覆土	
4	土師器皿	(15.0)	(2.6)		A B D E	普通	褐色	5	覆土	
5	土師器鉢	(23.8)	(7.7)		A B C D E F	良好	明褐色	20	覆土	

第132表 第8号住居跡出土遺物計量表

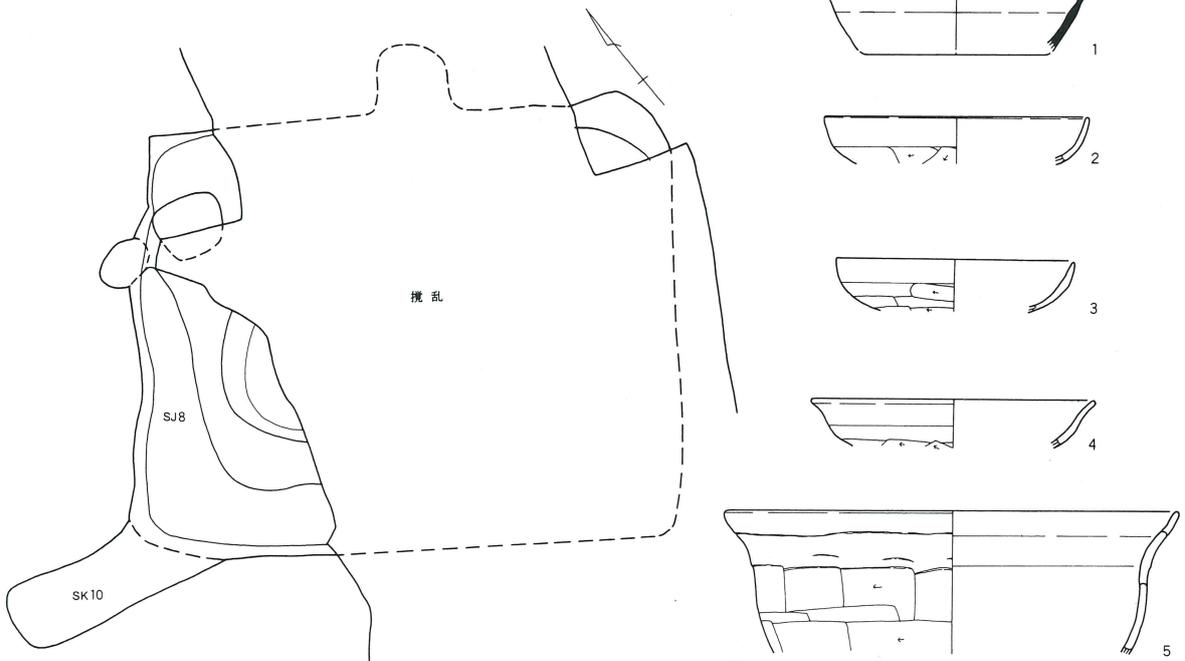
計量値	土師器								須恵器						鉄・石器		
	器種	坏	皿	暗文坏	鉢	甕	甗	台付甕	その他	坏	蓋	椀・鉢	高台坏	皿・盤		壺	甕
口縁部(片)	7	1			1	1				2							
(g)	32	7			52	10				22							
体部(片)	8					27			1								
(g)	20					230			9								
底部(片)																	
(g)																	

第181図 第8号住居跡・掘り方・出土遺物



第8号住居跡

- 1 暗褐色土 灰色味有り ローム粒子を多量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量、ロームブロックを少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子を多量含む
- 6 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を含む



0 2 m 1:80

0 10 cm 1:4

2. 掘立柱建物跡

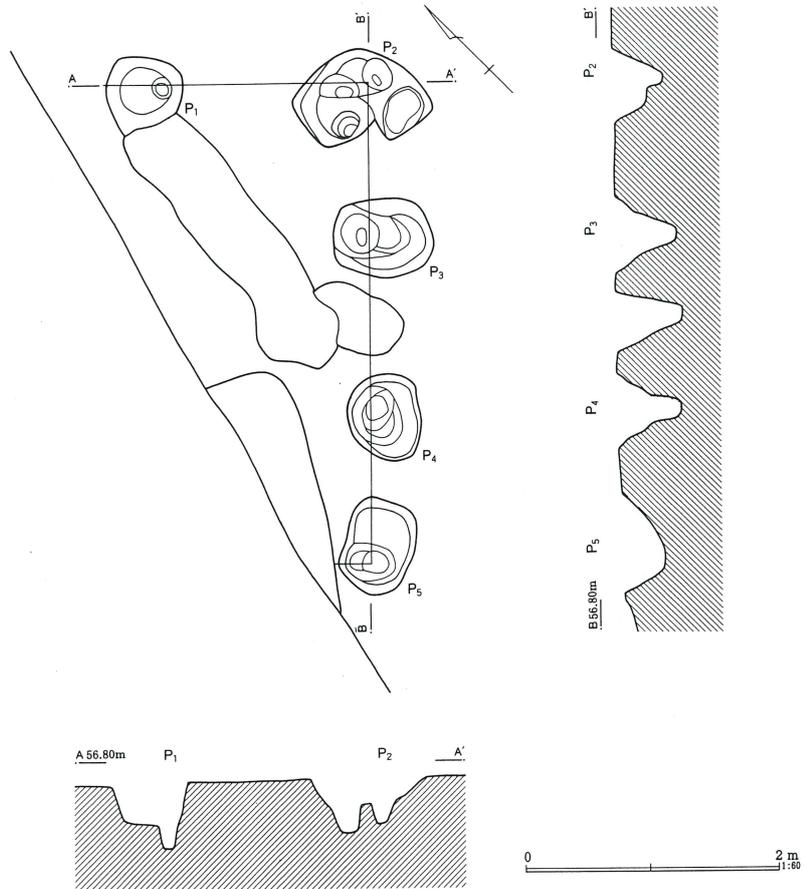
第1号掘立柱建物跡 (第182図)

調査区の中央76-6グリッドに位置する。検出した柱穴はP1~P5の5箇所である。遺構は西側の調査区域外に延び全体の規模は不明である。主軸方向はN-35°-Eである。本建物跡の東側にほぼ同じ軸方向をもつ第2号住居跡が存在する。また、本建物跡と重複関係をもつ第4号住居跡が建物中央に検出されている。

建物規模は西側の南北の並びが3間(P2~P5)、北側の東西の並びが2間までを確認した。柱間は、南北1.30mで全長3.90m、東西は1.80mを測る。

遺物は、各柱穴から土師器片が少量検出され、P3からは北武蔵型坏の口縁部破片、P5からは末野産の須恵器坏の口縁部破片が出土している。

第182図 第1号掘立柱建物跡



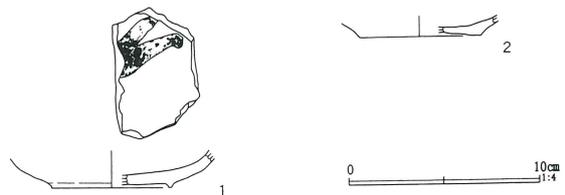
3. 土壇

本調査区からは、30基の土壇を検出した。いずれも、近世の遺構と見られる。土壇墓の可能性が考えられる。調査区域内での検出位置は、全体に広がる。土壇の形態は、長方形26基、正方形3基、不整形1基である。

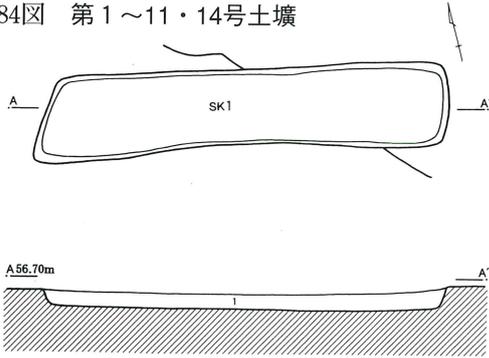
長方形の土壇は、長軸方向を真北より7°~20°前後の軸方向を取るものと、ほぼ直行する軸方向を取るものに大別される。調査区西寄りや北・南寄りで検出した土壇は南北方向に長軸をもつ。また、第2・3・4、5・6・14、8・9号土壇の重複はほぼ同じ軸でわずかにずらしながら造り替えている。中央部で検出した第1・10・26号は東西方向に長軸をもつ。正方形は第21、27、29号である。第29号土壇は、長軸75cm、短軸67cm、深さ10cmの規模である。土壇内からは扁平の河

原石が4個並べた状態で検出された。いずれも、径13cm前後の大きさである。不整形としたものは第30号土壇である。

第183図 土壇出土遺物

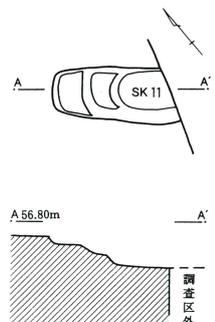
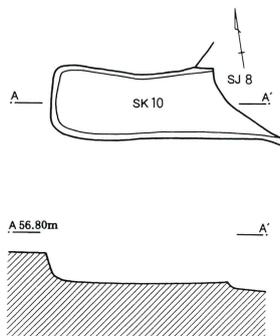
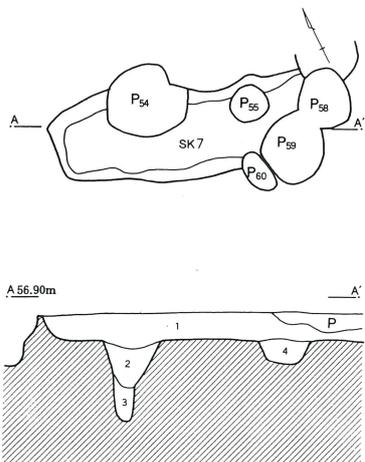
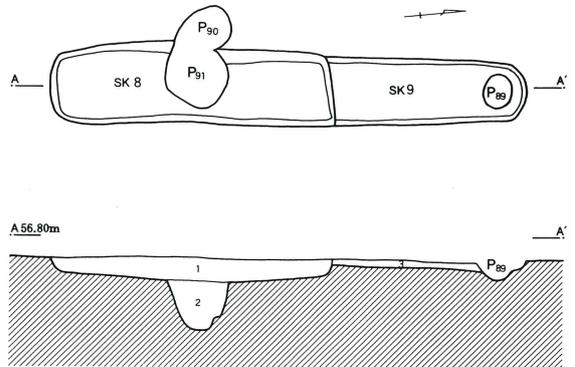
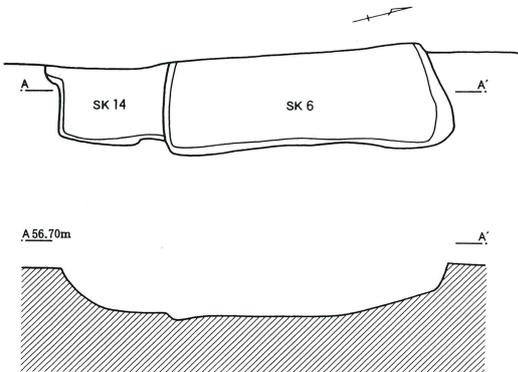
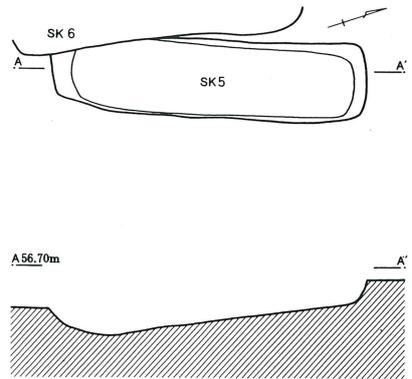
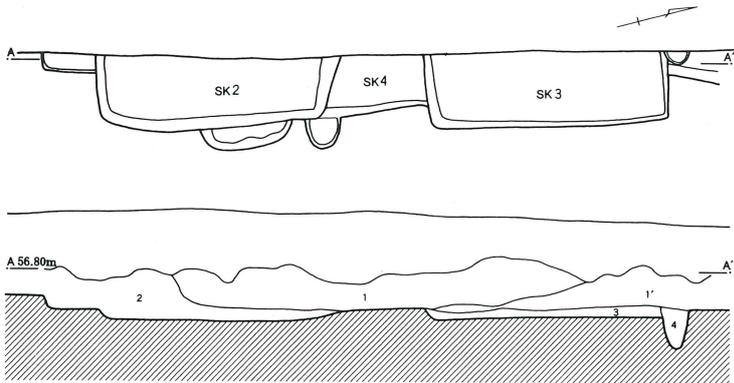


第184図 第1～11・14号土壌



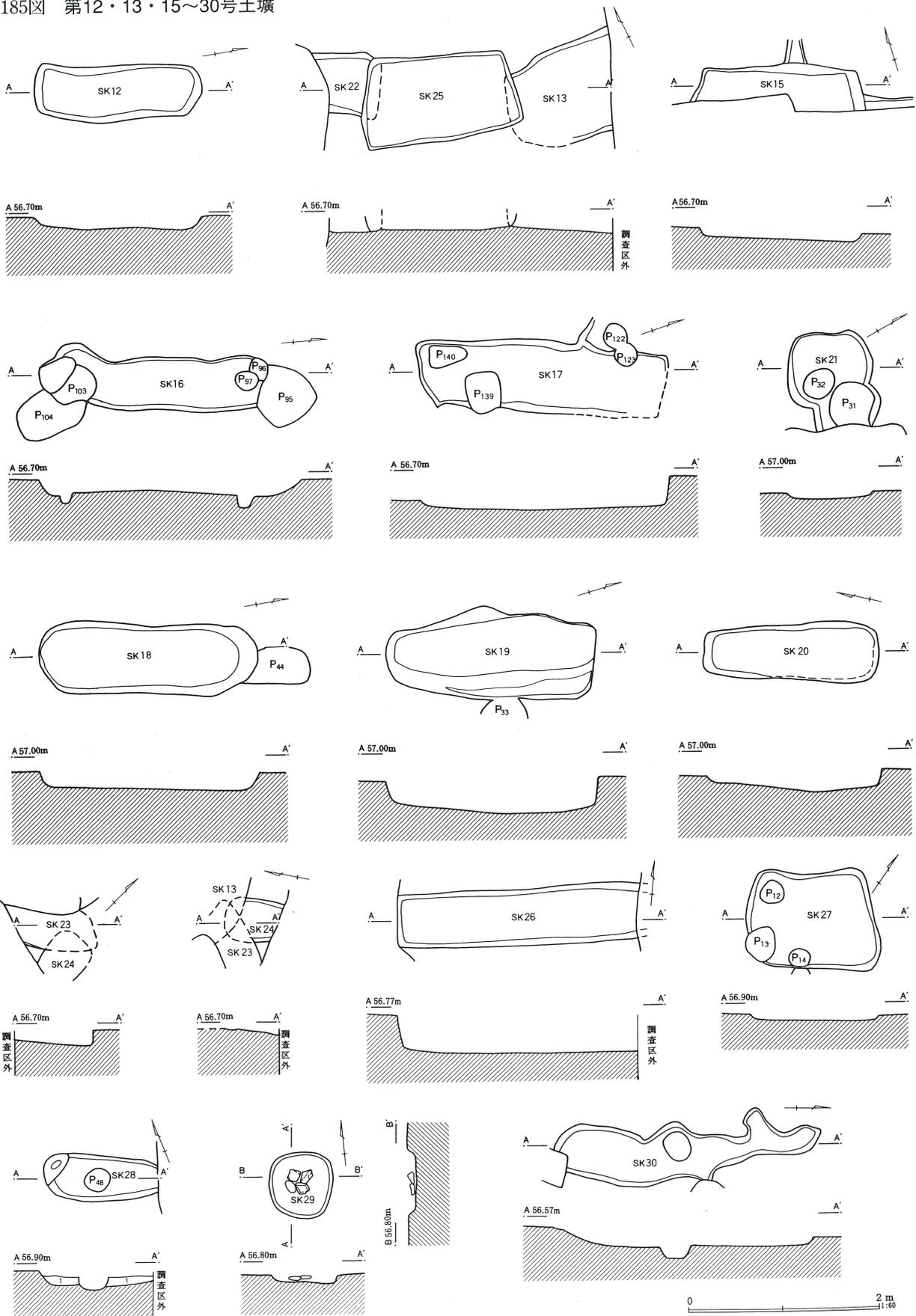
- 第1号土壌
 1 褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量含む
 第2・3・4号土壌
 1 灰褐色土 浅間A、ローム粒子を含む
 1' 暗灰褐色土 1層よりやや暗い
 2 灰褐色土 火山灰を少量、ロームブロックを含む
 3 明褐色土 ローム粒子を主体、灰褐色土ブロックを含む
 4 褐色土 ローム粒子を微量含む

- 第7号土壌
 1 灰褐色土 ローム粒子、黒色土粒子、火山灰を含む
 2 暗褐色土 ローム粒子を微量含む
 3 褐色土 ロームブロックを含む
 4 暗褐色土 ローム粒子を含む
 第8・9号土壌
 1 灰褐色土 火山灰を少量含む
 2 暗褐色土 ロームブロックを含む
 3 褐色土 火山灰、ローム粒子を少量含む



0 2 m 1:50
調査区外

第185図 第12・13・15~30号土墳



遺物は、土師器や須恵器が混在しているが、第3号や焙烙の底部破片を出土、第10号土壙からは瀬戸の小土壙からは瀬戸のすり鉢、第8号土壙からはかわらけ皿を検出した。

第133表 土壙出土遺物観察表 (第183図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	小皿		(2.0)	(6.4)	F	良好	乳灰色	30	SK-10	瀬戸
2	かわらけ		(1.1)	(6.4)	A B F	普通	明褐色	20	SK-8	

第134表 土壙一覧表

番号	位置	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方位	備考
1	76-6・7	長方形	3.19	0.59	1.42	N-78°-W	
2	76-6	長方形	1.93	0.50	1.20	N-7°-W	
3	76-6	長方形	1.93	0.60	1.48	N-10°-W	
4	76-6	長方形	3.35	0.40	1.25	N-7°-W	
5	76-6 77-6	長方形	2.50	0.60	1.49	N-22°-W	
6	76-6 77-6	長方形	2.20	0.72	4.02	N-20°-W	
7	75-7	長方形	2.16	0.67	2.42	N-57°-W	
8	75-6	長方形	2.24	0.58	1.73	N-9°-W	
9	75-6	長方形	1.56	0.49	0.69	N-9°-W	
10	75-7	長方形	(1.45)	0.47	2.40	N-70°-W	
11	76-7	長方形	(0.43)	0.44	2.55	N-43°-W	
12	75-6	長方形	1.77	0.59	1.75	N-10°-W	
13	77-7	長方形	(1.13)	1.02	2.24	N-72°-W	
14	77-6	長方形	(0.84)	0.56	3.15	N-19°-W	
15	77-6	長方形	1.76	(0.47)	1.52	N-63°-W	
16	76-6	長方形	(2.78)	0.55	1.33	N-8°-W	
17	76-6 77-6	長方形	2.64	0.76	1.26	N-24°-W	
18	74-7・8	長方形	2.34	0.71	2.89	N-12°-W	
19	74-7	長方形	(2.21)	0.91	3.76	N-19°-W	
20	73-7 74-7	長方形	1.85	0.57	1.51	N-15°-W	
21	74-7	正方形	0.80	0.81	0.80	N-30°-W	
22	77-4	長方形	(0.55)	0.63	1.24	N-36°-W	
23	77-7	長方形	(0.84)	(0.48)	(1.76)	(N-34°-W)	
24	77-7	長方形	(0.56)	0.43	(0.54)	(N-17°-W)	
25	77-7	長方形	1.68	0.91	1.55	N-62°-W	
26	75-7	長方形	(2.53)	0.58	2.41	N-80°-W	
27	74-7	正方形	1.35	1.00	0.75	N-49°-W	
28	74-8	長方形	(1.23)	0.44	1.78	N-34°-W	
29	75-6	正方形	0.75	0.67	1.09	N-8°-W	
30	75-7 76-7	不整形	2.89	0.50	0.97	N-2°-W	

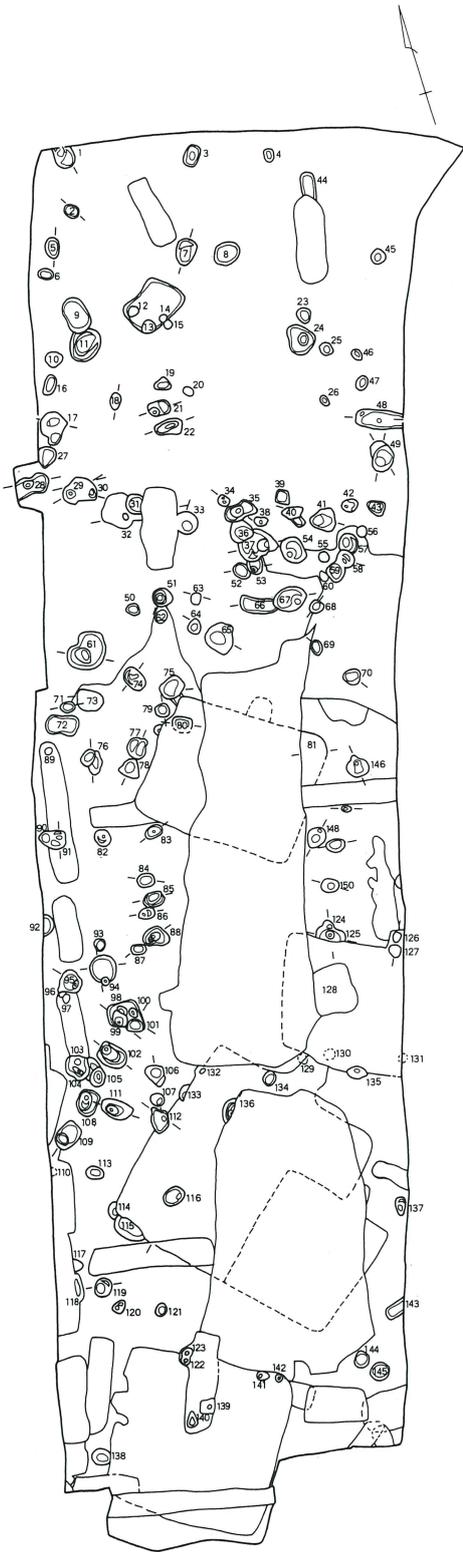
4. 柱穴

調査区全体からは150基の柱穴を検出した。柱穴は、調査区域が狭く攪乱や他の遺構などの重複によって掘立柱建物跡として判断することができないため単独の柱穴として処理した。しかし、断面観察により明らか

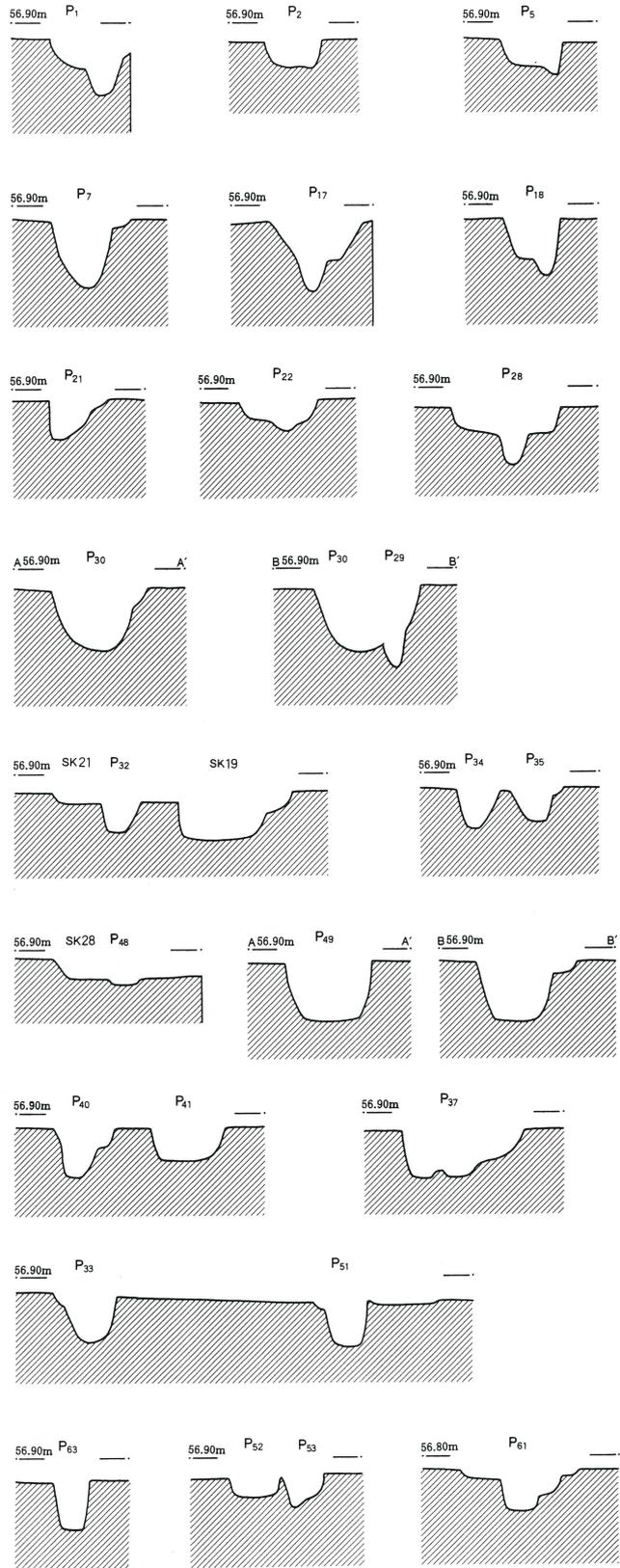
に柱痕が見られ、柱穴の並びが認められるものも存在した。このうち、P95、P100、P102、P108、P109は第1号掘立柱建物跡とした。

遺物は、極めて少なく、土師器や須恵器の小破片を検出したに留まる。

第186図 柱穴(1)

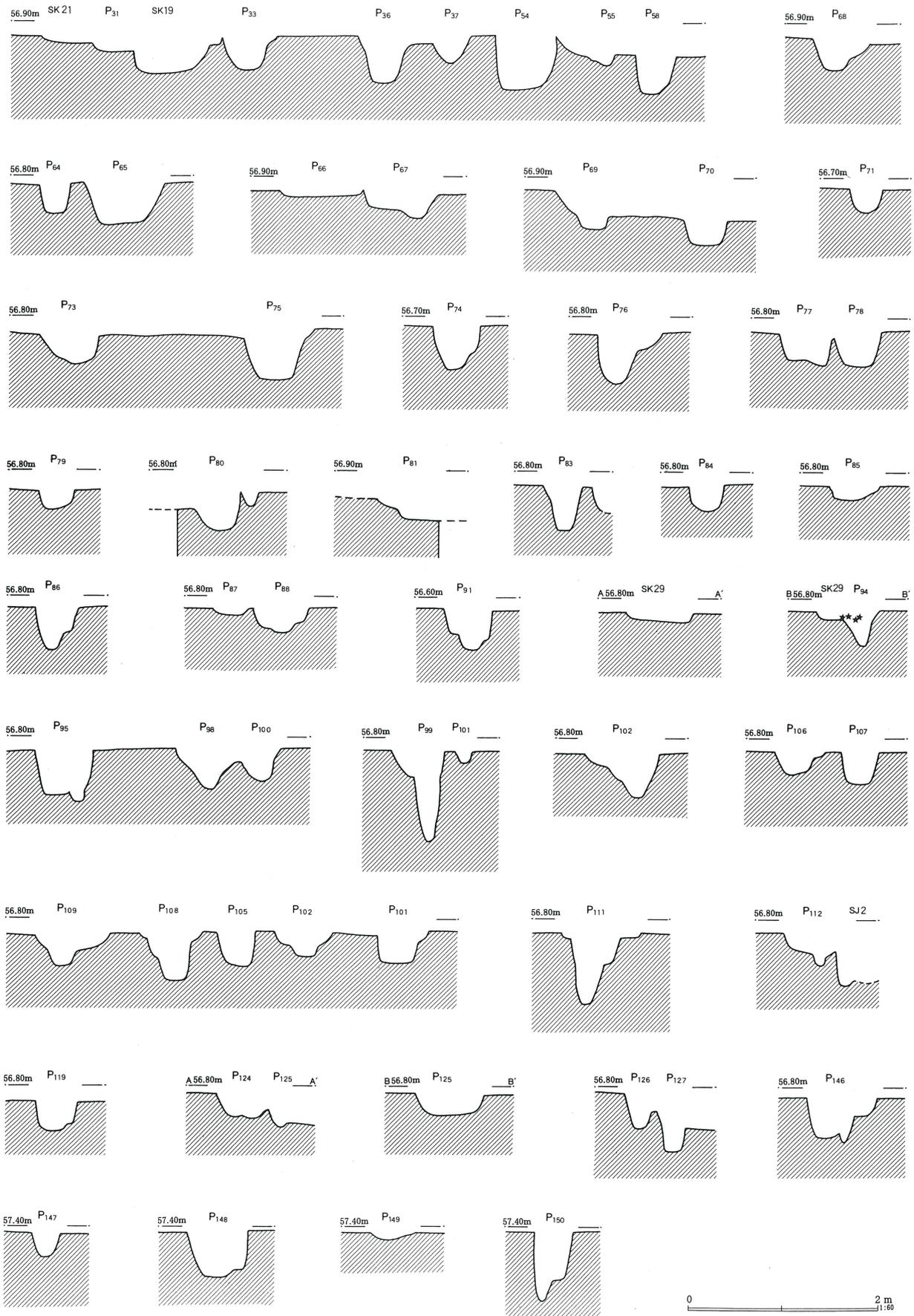


0 5 m 1:200



0 2 m 1:60

第187图 柱穴(2)



第135表 柱穴新旧対照表

新番号	グリッド	旧番号	長軸	深さ	新番号	グリッド	旧番号	長軸	深さ	新番号	グリッド	旧番号	長軸	深さ
001	73-7	1	63.0	47.0	051	75-7	5	52.0	35.8	101	76-6	3	45.0	30.4
002	73-7	2	42.0	22.4	052	75-7	11	50.0	16.9	102	76-6	4	79.0	49.4
003	73-7	3	62.0	14.9	053	75-7	12	48.0	26.2	103	76-6	20	50.0	12.8
004	73-7	4	26.0	8.8	054	75-7	3	70.0	73.6	104	76-6	21	45.0	24.4
005	74-7	12	51.0	27.4	055	75-7	35	31.0	12.0	105	76-6	5	76.0	53.0
006	74-7	22	36.0	8.4	056	75-7	39	28.0	13.9	106	76-6	9	55.0	26.2
007	74-7	13	64.0	56.7	057	75-7	38	54.0	17.4	107	76-6	10	37.0	34.8
008	74-7	19	71.0	10.8	058	75-7	4	47.5	46.2	108	76-6	6	70.0	51.0
009	74-7	23	92.0	8.4	059	75-7	36	57.0	21.6	109	76-6	7	77.0	36.2
010	74-7	25	48.5	15.6	060	75-7	37	37.0	22.8	110	76-6	22	20.0	29.2
011	74-7	24	97.5	12.0	061	75-7	9	117.0	35.6	111	76-6	8	82.0	76.2
012	74-7	36	25.0	27.0	062	75-7	31	18.5	11.2	112	76-6	11	48.0	32.6
013	74-7	37	37.0	41.6	063	75-7	17	32.0	38.8	113	76-6	23	45.0	36.3
014	74-7	38	22.0	31.2	064	75-7	1	41.5	32.5	114	76-6	24	43.0	24.5
015	74-7	39	25.0	8.7	065	75-7	2	85.0	46.7	115	76-6	13	92.0	44.1
016	74-7	26	55.0	10.5	066	75-7	32	92.0	7.0	116	76-6	15	55.5	74.4
017	74-7	18	87.0	64.2	067	75-7	13	86.0	28.0	117	76-6	26	27.0	5.4
018	74-7	16	45.0	45.1	068	75-7	20	40.0	35.1	118	76-6	25	73.0	20.0
019	74-7	28	37.0	56.8	069	75-7	14	35.0	15.8	119	76-6	12	51.0	35.0
020	74-7	29	24.0	5.8	070	75-7	15	47.0	32.8	120	76-6	14	34.0	23.9
021	74-7	15	50.0	31.5	071	75-7	26	36.0	25.2	121	76-6	18	32.0	7.1
022	74-7	14	63.0	22.1	072	75-7	34	84.0	10.0	122	76-6	16	26.0	39.9
023	74-7	30	37.0	15.4	073	75-7	8	73.0	48.6	123	76-6	17	26.0	18.4
024	74-7	31	80.0	16.8	074	75-7	6	68.0	46.6	124	76-7	10	27.0	24.0
025	74-7	32	40.0	54.5	075	75-7	7	63.0	32.5	125	76-7	5	20.0	7.0
026	74-7	33	22.0	8.1	076	75-7	28	72.0	57.3	126	76-7	7	27.0	22.2
027	74-7	27	60.0	10.7	077	75-7	24	62.0	35.9	127	76-7	4	35.0	31.0
028	74-7	5	92.0	46.8	078	75-7	25	57.0	36.8	128	76-7	1	143.0	70.0
029	74-7	17	52.5	45.2	079	75-7	16	39.0	20.6	129	76-7	12	23.0	29.0
030	74-7	6	77.0	54.5	080	75-7	19			130	76-7	3	27.0	6.5
031	74-7	1	57.0	30.0	081	75-7	18			131	76-7	6		
032	74-7	7	36.0	39.2	082	75-7	30	42.0	26.4	132	76-7	14	40.0	33.5
033	74-7	2	57.0	39.7	083	75-7	23	44.0	49.3	133	76-7	13	38.0	12.5
034	74-7	10	38.0	34.8	084	75-7	27	38.5	28.0	134	76-7	9	37.0	33.0
035	74-7	11	82.0	28.5	085	75-7	22	52.0	35.1	135	76-7	2	48.0	55.5
036	74-7	3	65.0	49.7	086	75-7	21	42.0	46.6	136	76-7	8	70.0	71.0
037	74-7	4	100.0	43.2	087	75-7	29	48.0	7.0	137	76-7	11	40.0	12.5
038	74-7	35	31.0	20.8	088	75-7	10	65.0	29.6	138	77-6	1	45.0	19.0
039	74-7	20	40.0	20.9	089	75-6	8	27.0	8.40	139	77-6	3	48.0	39.1
040	74-7	8	65.0	38.7	090	75-6	7	45.0	13.0	140	77-6	2	40.0	52.3
041	74-7	9	69.0	29.2	091	75-6	6	50.0	42.0	141	77-7	1	40.0	47.1
042	74-7	21	42.0	31.6	092	75-6	2	48.0	7.3	142	77-7	5	20.0	6.2
043	74-7	34	48.0	9.4	093	75-6	4	32.0	9.8	143	77-7	4	62.0	11.4
044	74-8	6	77.0	13.9	094	75-6	3	82.0	34.0	144	77-7	2	44.0	15.0
045	74-8	5	40.0	31.6	095	75-6	1	64.0	54.7	145	77-7	3	43.0	4.6
046	74-8	4	30.0	6.8	096	75-6	5	23.0	17.7	146	75-7	仮P 1	75.0	50.7
047	74-8	3	42.0	25.0	097	75-6	9	25.0	21.1	147	75-7		27.0	25.5
048	74-8	2	124.0	22.0	098	76-6	19	32.0	20.8	148	75-7	仮P 2	68.0	51.6
049	74-8	1	80.0	44.4	099	76-6	1	45.0	102.7	149	75-7		46.0	8.7
050	75-7	33	38.5	5.4	100	76-6	2	26.0	22.2	150	75-7		40.0	75.7

Ⅶ 結語

1. 古代榛沢郡と熊野遺跡B区 一律令的集落構造の変化について一

はじめに

熊野遺跡B区の整理を通して、検出された住居跡の構築方向からその変化をとらえ集落の構造がどのように変化するのかを明らかにしたい。

集落研究には住居跡の主軸方向の配置や数軒から構成された住居跡の単位を把握し、集落の変遷を指摘するなどこれまで多くの研究がある。高橋一夫氏は、ある時期に突如として集落が出現し、この集落はある時期に突如として消滅する。しかも、こうした集落は大規模集落であることに注目し「計画村落」という概念を設定し、古代集落の分析をおこない一般の自然村落と区別した。しかも、計画村落は、行政的で強制的なものであるとし、園宅地の所有が認められていないとした(高橋 1979)。また、岡部町六反田遺跡の検討においては、竪穴住居跡の入り口部を特定し、集落内の道を想定し、そこから「小住居跡群」および「住居跡群」をとらえた(高橋 1983)。鈴木徳雄氏は、古代児玉郡における集落設営の計画性にかかわる諸問題について具体的に検討し問題提起をしている(鈴木 1991)。この中で、「将監塚・古井戸遺跡に認められるような平坦地に散開する大規模な集落域を定め、住居間の空閑地を含めて開墾する形態は、従来の鬼高期の集落形態とは異なっている」とし、高橋氏の述べた計画村落について、農業だけに立脚した集落ではなく寺院や官衙あるいは開発のために強制力をもった目的設営された村落に重点が置かれたことに注意すべきであるとした。さらに、鈴木氏は、文献史学の立場からの理論的背景をもつ「計画村落」という範疇を、考古学的な現象の範疇に用いるのは好ましくなく、計画性の高い集落については「計画的集落」という範疇で把握すべきだと提唱した。鳥羽政之氏は熊野遺跡の研究を精力的に行なっている。この中で、律令期の集落分析を掘立柱建物跡、竪穴建物、井戸等が「コ」の字型、「L」字型、雁行型等規則的に配置される遺構群に注目しこれらの建物群を「白樹原・檜下型集落構成」と

呼称した。しかも、建物群とその周辺の竪穴建物は有力家長の家と中小農民の居住地ととらえた(鳥羽 1997)。

今回は、熊野遺跡B区の竪穴住居跡がどのような規制や方向性をもっているのか、また、これらがどのように変化するのか。さらには、榛沢郡内の他の集落化を合わせて検討し集落構造の変化の相異点と変化を引き起こす要因について検討し問題点を考えたい。

1 土器の変遷による時間軸の設定

熊野遺跡B区および新田遺跡A・B区から検出された住居跡は、58軒、出土した土器から概ね7世紀後半から9世紀後半である。隣接する熊野遺跡A・C・D区および岡部町教育委員会による熊野遺跡第1次～第96次の調査などで約400軒の竪穴住居跡、約150棟もの掘立柱建物跡を検出しており、これらの調査成果を待たねば熊野遺跡の詳細な土器変遷や集落分析は不可能である。今回は、熊野遺跡B区の調査成果をもとに若干の土器の変遷を検討し、集落構造の変化を検討する時間軸を設定したい。

検出された土師器は坏、皿、暗文坏、鉢、甕、甑、台付甕、須恵器は坏、蓋、椀、鉢、高台付坏、皿、盤、壺、甕、この他鉄器、石器がある。今回は、土師器坏、皿、暗文坏、須恵器坏、蓋、高台付坏を中心に検討し6段階に時間軸を設定した。

第I段階

熊野遺跡B区においては出現期にあたる。第35号住居跡出土の土器群が該当する。土師器坏は鬼高系の須恵器模倣坏である有段口縁坏が残存する。口径は10cm前後と11cm前後、最大径は13.7cmである。主体的に出土する土師器坏は北武蔵型坏である。口縁部が内屈または内湾し底部は丸底である。整形は口縁部ヨコナデ、体部は手持ちヘラケズリを施す。口縁部と体部の境は未調整部をほとんどもたない。法量的には大・中・小の器種組成が存在する。また、7は口縁部と体部の境に弱い稜をもち模倣坏の系譜を引く小型有稜坏である。

第188图 土器変遷図

	有段口縁坏	小型有稜坏	北武蔵型坏	暗文坏	皿・鉢	須恵器蓋・坏
第I段階						
						第23号住
第35号住						
第36号住						
第II段階						
第7号住						
第2号住						
第III段階						
新田B 第2号住						
第37号住						
第IV段階						
第19号住						
第11号住						
第V段階						
第5号住						
第VI段階						
第13号住			第16号住	第30号住		
				第13号住		

暗文坏はいずれも丸底であるが、口縁部の形態や調整法に差異が認められ、一様ではない。口縁部は短いヨコナデを施し、口唇部は内面に弱い面をもち断面三角形である。器面は17のように土師器坏と同様のややざらつくものと19のように丁寧に撫でられ光沢をもつものが存在する。皿は、暗文をもつものもたないものが存在する。形態は器高浅く、口縁部は直線的に開くものや上方にわずかに立ち上がるものなど様々である。須恵器は末野産の坏Gの蓋・身を共伴する。89は第23号住居跡出土資料である。

第Ⅱ段階

この段階の資料は第7号住居跡と第2号住居跡の土器群が該当する。両住居跡には若干の新旧が認められる。出土する土器は全体的に法量を大きくし、土師器坏は前段階に認められた有段口縁坏、小型有稜坏は姿を消す。主体は北武蔵型坏であるが第7号住居跡では体部の未調整部がわずかであるのに対し第2号住居跡では未調整部を明瞭に残す。口縁部の形態もやや内湾するのに対し、第2号では上方に立ち上がる。皿は、前段階のような形態は消滅し、第7号住居跡出土の皿は外傾に内湾気味に立ちがる15、16と、逆ハの字状に開く18が出現する。第2号住居跡ではいずれも逆ハの字状に開くものである。須恵器は第7号では坏Gの蓋、身が残存し、大型の返りをもつ蓋と共伴する。第2号では大型の返りをもつ蓋のみとなる。

第Ⅲ段階

この段階の資料は新田遺跡B区第2号住居跡、熊野遺跡B区第37号住居跡が該当する。土師器坏の形態は丸底気味で、口縁部は上方に立ち上がる。暗文坏は、形態が平底気味で体部内湾する。整形は底部ヘラケズリ、体部外面に未調整部を残す。須恵器は無返りの蓋、坏は浅く口径大きい。整形は底部外周回転ヘラケズリである。新田遺跡B区第2号住は南比企産、熊野遺跡B区第37号住は末野産である。

第Ⅳ段階

この段階の資料は第19号住居跡、第11号住居跡が該当する。土師器坏は平底化の傾向を強くし、底部外面

をヘラケズリする。体部は上方に立ち上がりわずかに開く。須恵器は底径がやや縮小し外周を回転ヘラケズリする。蓋・坏・高台付坏ともに産地は末野産である。

第Ⅴ段階

この段階の資料は第5号住居跡が該当する。土師器坏は平底化傾向を強くし、体部は外傾にやや開いて立ち上がる。また、9のような平底の土師器坏が出現する。暗文坏も9と同類の形態である。皿は木製皿の模倣品とみられる。須恵器は末野産と南比企産が検出されるが末野産が多い。坏の底部調整は糸切り離しママである。

第Ⅵ段階

この段階の資料は第10号住居跡、第13号住居跡、第16号住居跡が該当する。土師器坏は平底で、体部は外傾にわずかな屈曲をもって開いて立ち上がる。須恵器は高台付皿、高台付椀、坏などが検出され生産地は末野産が主体である。

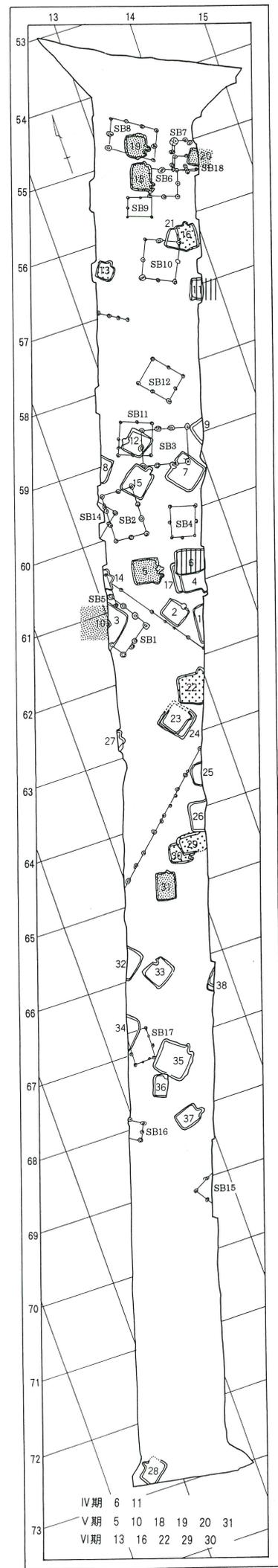
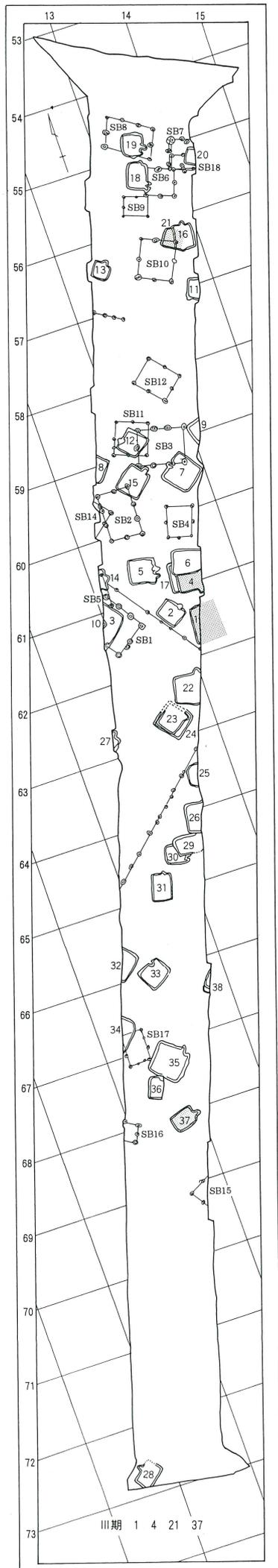
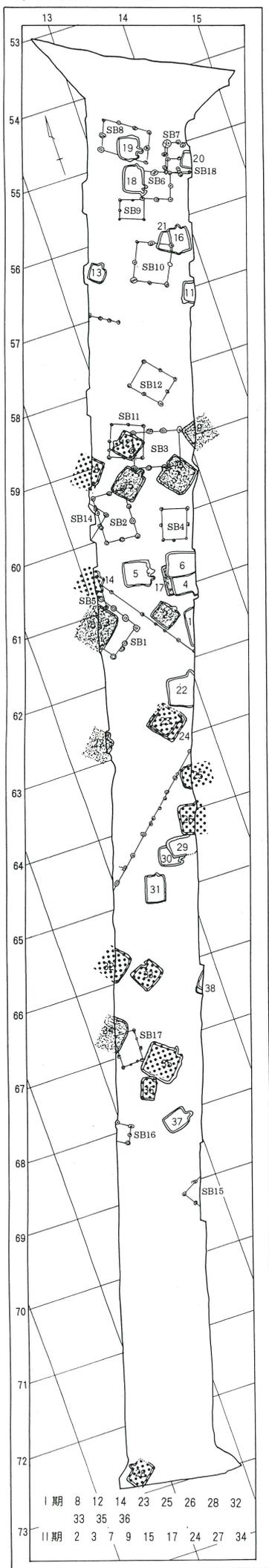
このように検出された土器の変遷を第Ⅰ段階～第Ⅵ段階に区分した。集落の変遷はこれをもととして検討した結果である。

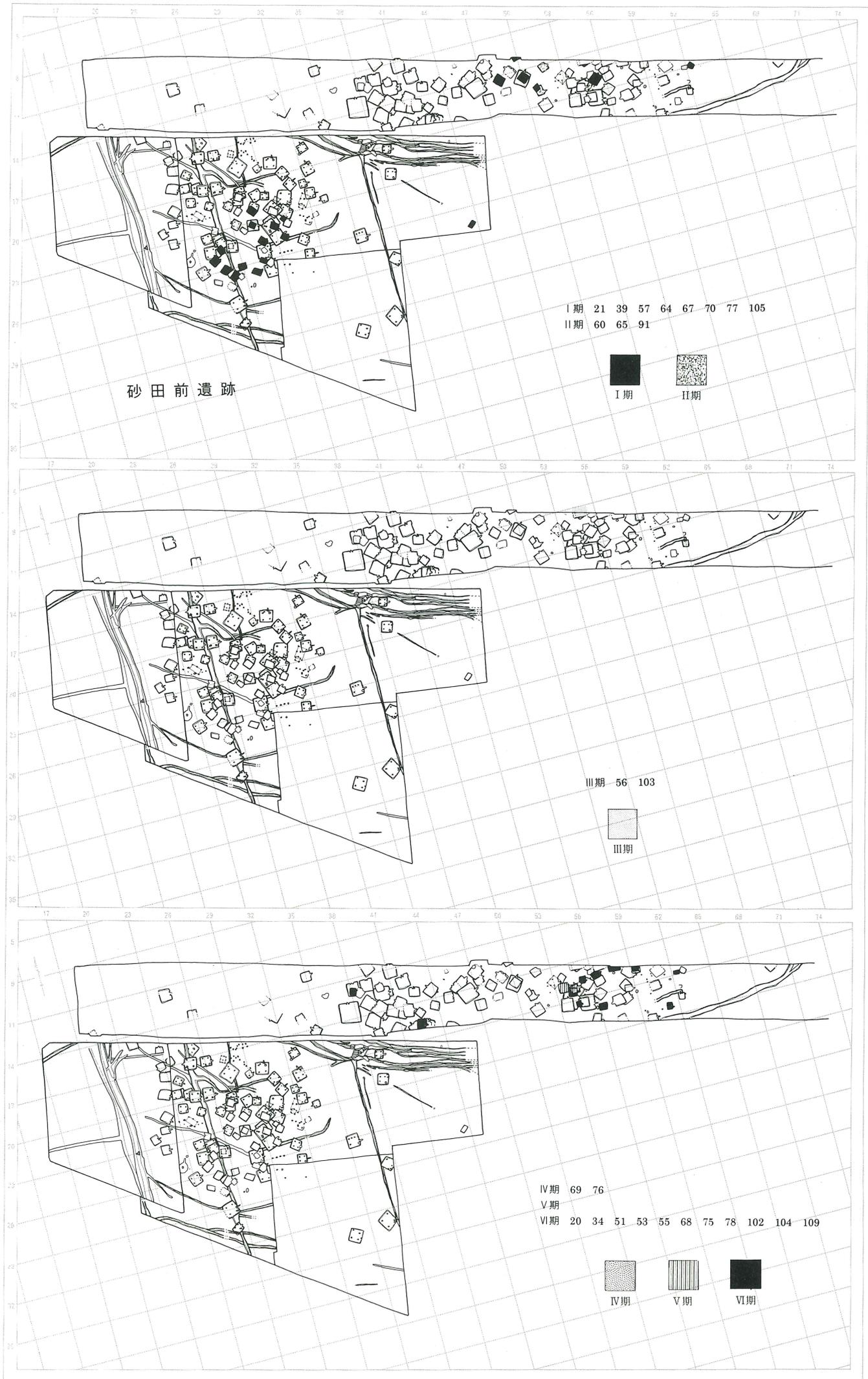
年代的想定をすると、第Ⅰ段階は砂田前遺跡の第Ⅴ期新、末野遺跡第Ⅵ段階と平行し、概ね7世紀第4四半期から8世紀初頭。第Ⅱ段階は砂田前Ⅵ期古、内出Ⅱ期・Ⅲ期、末野遺跡第Ⅶ段階と平行する。概ね、8世紀第1四半期とする。第Ⅲ段階は砂田前第Ⅵ期新、内出Ⅳ期、末野Ⅷ段階と平行すると考えられ8世紀第2四半期から中葉とする。第Ⅳ期は8世紀後半、第Ⅴ期を8世紀末～9世紀前半、Ⅵ段階を9世紀後半とする。

2 集落構造の変遷

熊野遺跡B区の住居跡を段階別に検討を行った結果第192図に示したような変遷が想定される。むろん、土器編年における段階の推移は時間幅が長くその間に住居跡が継続することはやや無理があり、近接する住居跡の存在は全てが同時性をもっていただけと考えられず、同じ段階においても変遷する可能性を含む。ここでは、住居跡の方向性に注目し、軸方向が北に対し斜

第189图 熊野遺跡B区集落変遷図





行するのに対しほぼ直交する形態の存在が認められた。方向性の変化が数軒の単位による住居跡群などで構成される居住空間により規制されるのではなく、むしろ、集落全体の居住空間は時間的変化の中で規則的に変化した可能性が認められる。

熊野遺跡B区の第Ⅰ・Ⅱ段階では、竪穴住居跡の軸方向が北方向に対し約25°~60°前後斜行して構築され

第191図 白山、内出、六反田遺跡集落変遷図

白山遺跡

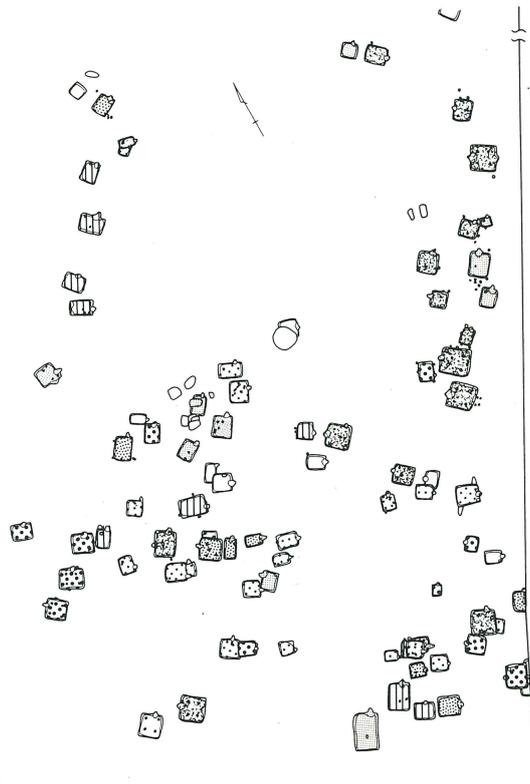
- Ⅰ期 2 3 5B 12 18 19 20 21 27 46 61
67A 70 72
- Ⅱ期 6 15 34 43 47 48 49 50 51 55 56
63 65 66A 71A
- Ⅲ期 22 28 32 35 52 53 54 60 62 64
- Ⅳ期 17 29 36 41B 44 57 58 59 77 78
- Ⅴ期 10 11 13 25 37 38 41C 73 74
- Ⅵ期 1 4 5A 7 8 9 14A 14B 16 23 24
39 40 41A 66B 67 68 69B 75

内出遺跡

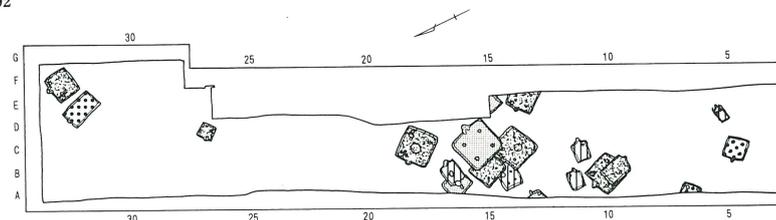
- Ⅰ期 2 3 19
- Ⅱ期 4 5 9 13 14 15 20 21
- Ⅲ期 8 10 12 17
- Ⅳ期 1 6 7 11 16
- Ⅴ期
- Ⅵ期

六反田遺跡

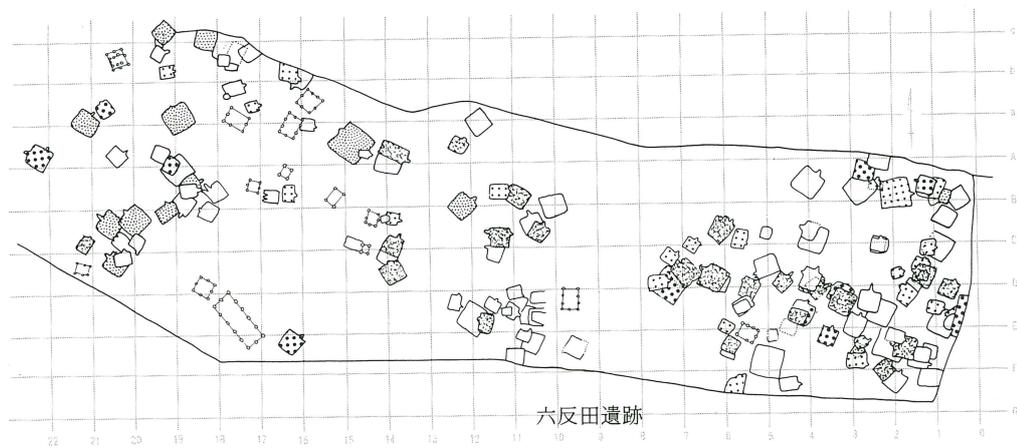
- Ⅰ期 5 32 43 46 47 58 63 67 68 83 99a
99b 112 117 119 122 127 130 131
135 138 139 140 150 151
- Ⅱ期 8 18 23 26 34 35 39 44 45 51 55a
55b 56 61 66 70 79 82 84 88 90 92
95 97 105 134 136 147a 147b
- Ⅲ期 6 24 64 85 86a 86b 87 96
- Ⅳ期 2 12 50 89 101 116 120 143 144
106 110
- Ⅴ期 106 110
- Ⅵ期 1 10a 10b 11 15 19 21 25a 25b
27 28a 28b 42 49 52 65 75 77
98 107



白山遺跡



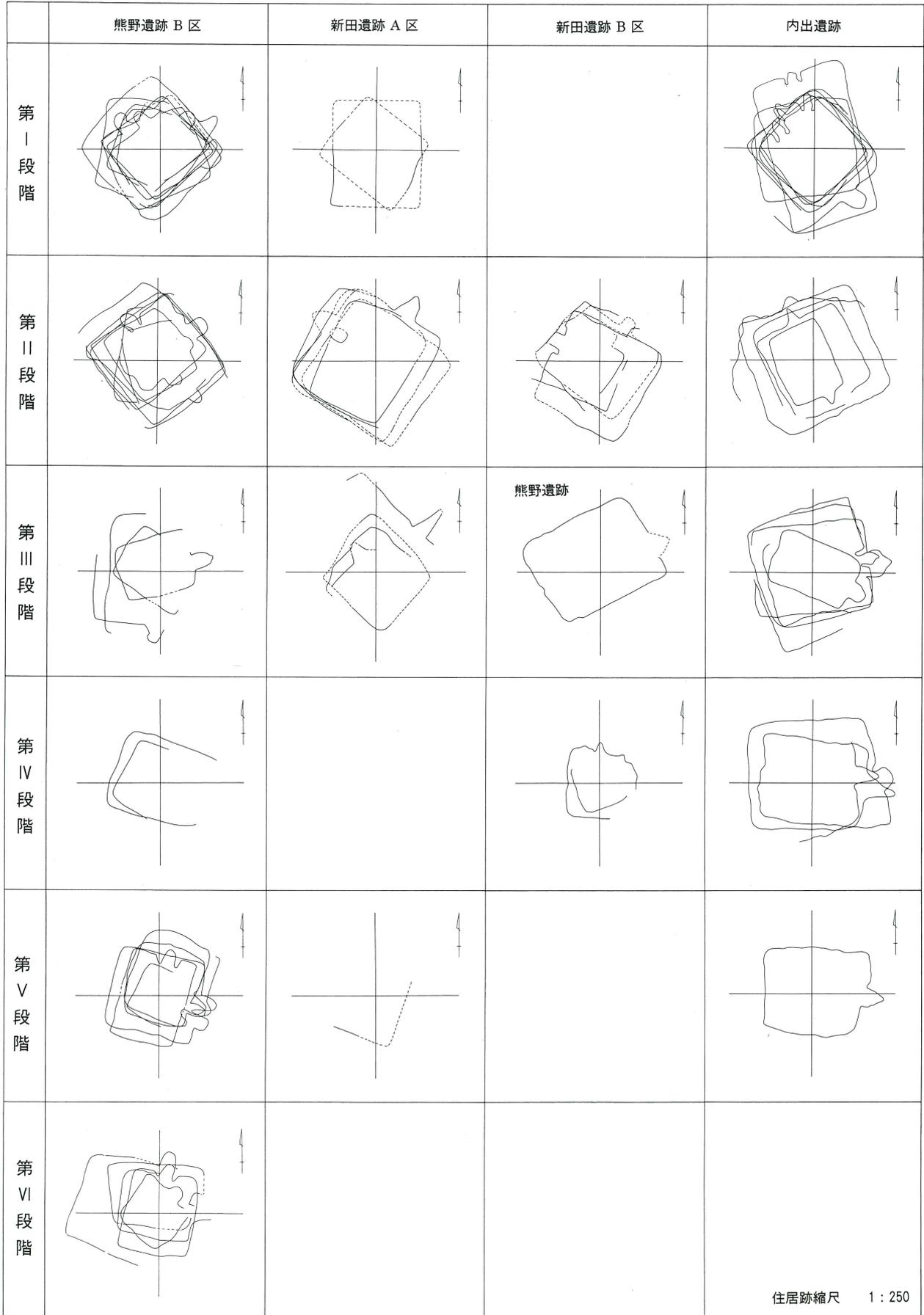
内出遺跡



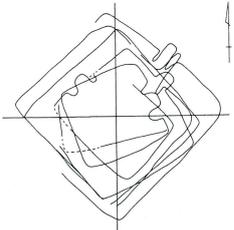
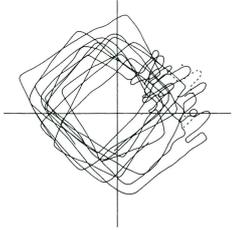
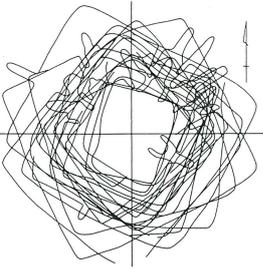
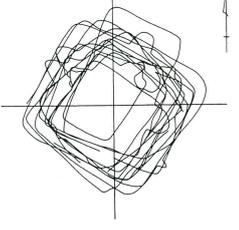
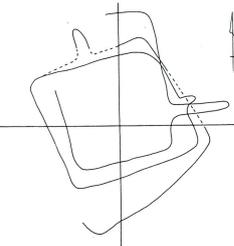
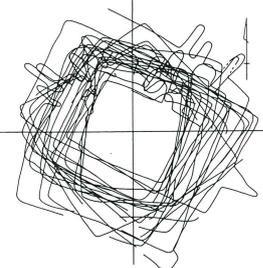
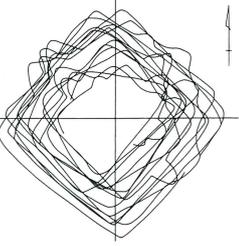
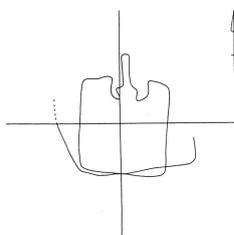
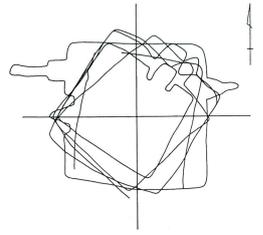
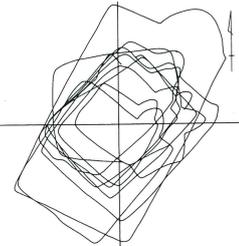
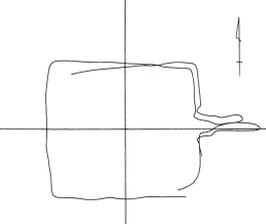
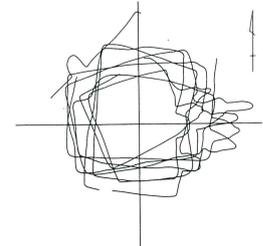
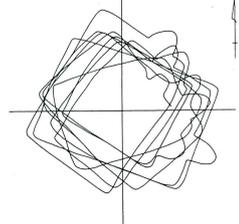
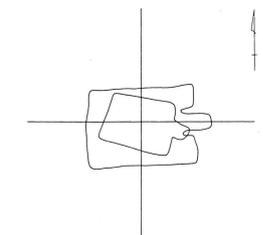
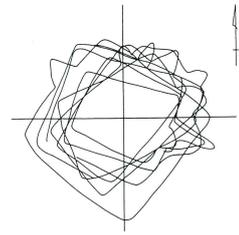
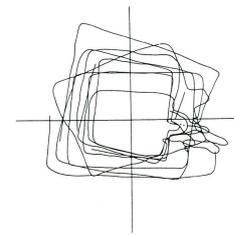
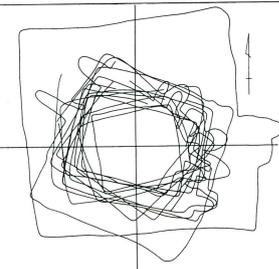
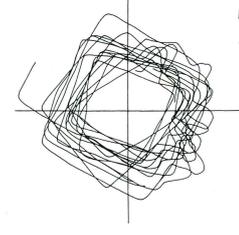
六反田遺跡



第192図 住居跡変遷図



住居跡縮尺 1 : 250

	砂田前遺跡B P	砂田前遺跡	六反田遺跡	白山遺跡
第 I 段階				
第 II 段階				
第 III 段階				
第 IV 段階				
第 V 段階				
第 VI 段階				

ている。例外的住居跡の存在はあるが、37軒中20軒が該当する。第Ⅲ段階においては、21号住居跡が斜行するが、第1・4・37号住居跡はほぼ北方向に軸を変化させる。第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ段階においてはほとんどの住居跡方向が北方向に統一されていた。

ではこうした傾向がどの程度の範囲におよぶのか同じ榛沢郡内の遺跡の検討を行ってみる。先にも触れたように、熊野遺跡A、C、D区の調査成果が待たれるが、新田遺跡A、B区をはじめこれまで調査報告された砂田前遺跡、白山遺跡、内出遺跡、六反田遺跡、宮西遺跡について分析を行った。

砂田前遺跡は、熊野遺跡の北東に位置する。集落の存在は6世紀前半の古墳時代後期から開始され奈良・平安時代に至るまで住居跡の存在が確認された。ここでは特に7世紀後半以降の住居跡を対象に集落変遷を検討した。第Ⅰ段階では北側と南側に集落が対峙して存在する。いずれの住居跡方向も北に対しほぼ斜行すると考えられる。第Ⅱ段階になると北側集落のみ継続し、南側の集落は終息してしまう。北側集落はこの段階ですでに斜行する住居跡と直行する住居跡が存在する。第Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ段階ではほぼ住居跡は直行する。

内出遺跡は、熊野遺跡の東に位置する。ほぼ同一の集落である。集落の存在は7世紀後半から開始され奈良時代に至るまで住居跡の存在が確認された。第Ⅰ段階では、ほぼ斜行する住居跡が主体となり、第19号住居跡は直行し、第20号住居跡は長軸が長く形態に特殊性をもち傾きの角度が弱い。第Ⅱ段階で3軒であるが斜行する。第Ⅲ段階では規模の小さな第1号住居跡が斜行し、他の2軒は直行する。第Ⅳ、Ⅴ段階ではほぼ住居跡は直行する。第Ⅵ段階の住居跡は認められなかった。

白山遺跡は、熊野遺跡の東側に隣接する集落である。にもかかわらず他の集落の変化と大きく異なり軸方向がいずれの段階も斜行する住居跡が主体である。集落構造が第Ⅰ、Ⅱ段階をそのまま踏襲して第Ⅲ～Ⅵ段階まで構造的変化を示さず展開する。熊野遺跡と同様の時期に集落が営まれるにもかかわらず、この違いは、

北側に存在する白山古墳群（第3図参照）による規制が伝統的に意識されていた可能性が考えられ、古墳造営領域に奈良・平安時代の住居跡が確認されない。地形や台地の崖線、古墳群の領域が伝統的に残された集落構造となる。

六反田遺跡は、熊野遺跡の西約2キロに位置する。集落の存在は古墳時代前期から開始され奈良・平安時代に至るまで住居跡の存在が確認された。ここでは特に7世紀後半以降の住居跡を対象に集落変遷を検討した。第Ⅰ、Ⅱ段階では住居跡方向が北に対しほぼ斜行すると考えられる。第Ⅲ段階になると斜行する住居跡と直行する住居跡が存在する。第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ段階ではほぼ住居跡は直行する。第Ⅵ段階になると直行する住居跡に混じって再び斜行する住居跡が出現する。

宮西遺跡は六反田遺跡の南側に近接する集落である。岡部工業団地造成により発掘調査が進められ、現在整理が行われており、調査成果は明らかにされていないため詳細は不明である。しかし、隣接する大寄八幡神社周辺の道路拡幅調査に伴って発掘調査された宮西遺跡では奈良・平安時代の集落が検出された。調査範囲が狭いため住居跡の全体が不明確ではあるが確認された住居跡壁の方向などから北に対しほぼ直行する軸方位をとることがわかった。宮西遺跡の住居跡の時期は概ね第Ⅲ段階以降である。

榛沢郡内の律令期の集落について時期変遷別に検討をした。その結果、住居跡の方向性は北に対し斜行する住居跡は第Ⅰ、Ⅱ段階に認められ、北に対しほぼ直行する住居跡が出現するのが第Ⅲ段階に認められた。また、第Ⅳ、Ⅴ段階ではほとんどの住居跡が直行する傾向が認められた。第Ⅵ段階では検討資料が不足のためやや不明瞭ではあるが熊野遺跡B区では直行する住居跡、六反田遺跡ではやや斜行化する住居跡も認められた。しかし、白山遺跡ではこうした集落変化は認められず、第Ⅰ～Ⅵ段階に至るまで斜行する住居跡で構成されていた。

3 まとめ

集落の住居跡は、建物方向にまとまりと変化が存在

する。これらは、集落構造に一定の規範が存在していたことを示していると考えられる。カマド位置や住居規模には差異が認められこうした住居構造の違いと住居跡方向では異なった規範が存在していたのであろう。

住居跡方向は集落領域の区画に起因すると考えられ、第Ⅰ、Ⅱ段階は前段階の継続であるとともに、地形の方向性に規制され区画されていた可能性が推測される。熊野遺跡は中宿遺跡とともに北側に櫛引台地と妻沼低地との境に崖線が存在し、この地形的規制が台地上に展開する律令的集落に規範を設け集落構造を形成させたものと考えられる。しかし、第Ⅲ段階に至っては、これまでの規範とは別の東西南北といった方向性の規範が新たに集落構造に適用され住居跡が構築の際に順次変化したものと考えられる。第Ⅵ段階においてはこの規範に変化がおきたものと考えられる。こうした背

景には、集落領域の規範だけではなく、他の空間領域、また、水田等の条里施行に伴う区割りが、郡内にどのような規範を示していたのかその影響がどの領域までおよんでいたのかが問題となろう。律令時代とは戸籍により個別に人身を把握するとともに、条里により土地の管理を使用としていたのではないだろうか。この様相を熊野遺跡B区では住居跡方向の規範として現象化された結果ではないだろうか。

以上述べてきたように、集落構造の変化が榛沢郡内の傾向としてどこまでとらえることができるのか、また、他群における傾向を掴むことができるのか、今回検討した新田遺跡、内出遺跡、砂田前遺跡、六反田遺跡では適合した。しかし、白山遺跡では不適合であった。こうしたことが他の集落においてどのような傾向を示すか今後の課題としたい。(赤熊 浩一)

2. 大形甑の問題

熊野遺跡B区からは7点の土師器大形甑が出土し、その中には、内面にミガキ処理を施されていたものもあった。ここでは、熊野遺跡B区を中心とした地域から出土した大形甑について検討し、特に内面ミガキ処理のされている大形甑に注目して考察を加えたい。

a 形態(第193図)

熊野遺跡B区周辺から出土した大形甑を戸森前遺跡(中村1999)・砂田前遺跡(佐藤1998)・熊野遺跡B区(赤熊2000)の編年をもとに分類した。

戸森前Ⅵ期：大形甑・カマドの出現期。胴部の張りが強い。

戸森前Ⅶ期：口縁部の屈曲が弱くなる。

戸森前Ⅷ期：胴部の張りが弱くなる。

砂田前Ⅰ期：長胴化が進む。

砂田前Ⅱ期：大形甑の出土例が増大する。ミガキ処理が施されるものが出現する。

砂田前Ⅲ古期：大形甑の出土例が最も多い。

砂田前Ⅲ新期：大形甑の出土例が減少しはじめる。

砂田前Ⅳ古期：ミガキ処理された大形甑の出土例なし。

砂田前Ⅳ新期：胴部が直線的に立ち上がる。

砂田前Ⅴ古期：出土例1例のみ。

砂田前Ⅴ中期：ミガキ処理された大形甑の出土例なし。

砂田前Ⅴ新期：大形甑の出土例なし。

熊野Ⅰ期：ミガキ処理された大形甑の最終段階。

熊野Ⅱ期：破片のみの出土のため、詳細不明。

熊野Ⅲ期：大形甑の出土例なし。

熊野Ⅳ期：器壁がかなり薄くなる。

熊野Ⅴ期：破片のみの出土のため、詳細不明。

(これ以降大形甑の出土例なし)

大形甑の形態は、同時期の甕の形態の変化と同様に長胴化が進み、口縁部の屈曲も弱くなる。また、器壁の厚さも薄くなる傾向にある。しかし、時期を通して、著しい形態の変化は認められなかった。カマド自体にも大きな変化が起きなかったと推測できる。

第193図 出土遺物対照表	B：砂田前遺跡 (1991)
熊：熊野遺跡B区(2000)	砂：砂田前遺跡 (1998)
六：六反田遺跡 (1981)	岡：岡部条里遺跡(1998)
白：白山遺跡 (1989)	中：中宿遺跡 (1997)

第193図 大形甗の変遷

戸森前Ⅵ期		戸森前Ⅶ期		戸森前Ⅷ期		砂田前Ⅰ期	
砂田前Ⅱ期							
砂田前Ⅲ期(古)							
砂田前Ⅲ期(新)							砂田前Ⅳ期(古)
砂田前Ⅳ期(新)				砂田前Ⅴ期(古)	砂田前Ⅴ期(中)	砂田前Ⅴ期(新)	
熊野Ⅰ期				熊野Ⅱ期	熊野Ⅲ期	熊野Ⅳ期	熊野Ⅴ期

内面ミガキ処理のされた大形甕からもほぼ同じ傾向が見られる。内面ミガキ処理された大形甕は、砂田前Ⅱ期から出現し、熊野Ⅰ期で姿を消すが、同時期にはミガキ処理のされない大形甕も多数出土しており、形態にも大きな差は認められないことから、前時代からの伝統的な土器製作手法と、新しい技術による土器製作が共存していたと考えられる。

b 出土位置 (第194図)

大形甕の出土位置について考察する。

大形甕の検出された高さについては確認できないものが数多くあったため、出土位置の平面分布について検討・分類した。そのため、住居跡との同時性は、不正確となる可能性もある。

なお、貯蔵穴は、カマドの右と左から検出されているが、貯蔵穴出土として一括して分類した。

大形甕の出土位置は、カマド周辺からの出土例が最も多く、次は貯蔵穴からである。貯蔵穴周辺に保管されていたものが流入した可能性も考えられる。三番目に多いのが、住居中央部からの出土である。これも、カマド前部より移動した可能性が考えられる。

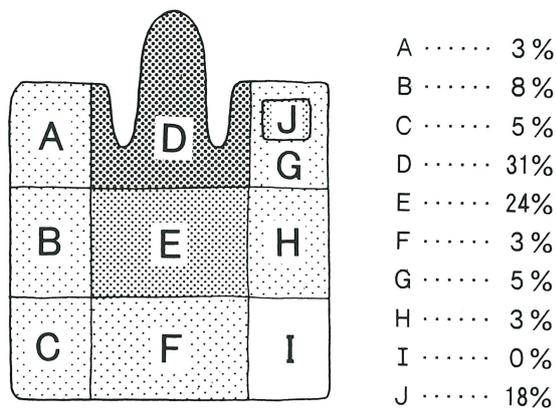
さらに、カマド周辺部のA・D・E・G・J部からの出土例を集計すると、全出土例中の86%を占め、竪穴住居内の空間利用について、著しい差異が認められた。甕の機能性から考えると、使用場所はカマドに限られると思われるが、保管場所についても、カマド周辺に設けていたためと推察することができる。

出土位置の考察からも、ミガキ処理をされている大形甕とそうでないものとの間に特別な相違点は認められなかった。このことから、製作技法による甕の使い分けをしていない可能性が高い。

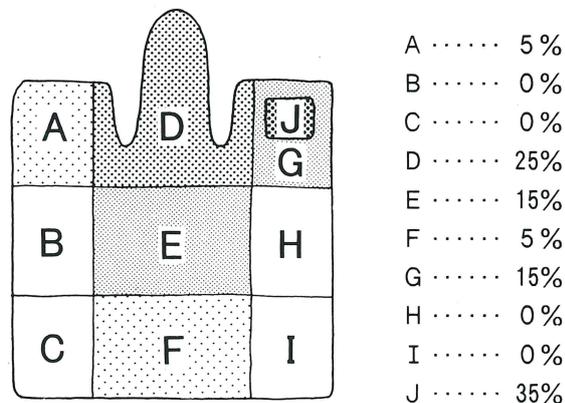
c 問題 (課題)

大形甕が出現する背景には、調理方法の変化やカマドの出現などの要因が考えられる。該当時期の住居の形態や、共伴する土器の形態や出土状況などとの検討を重ねる必要があると思われる。また、同時期に出土する須恵器の甕との相違点や関連性を考察していくことも重要である。

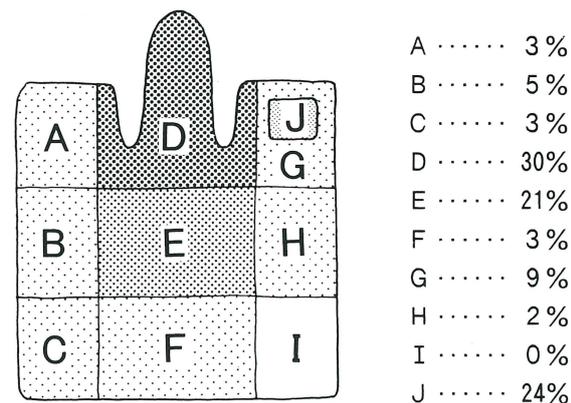
第194図 大形甕の出土位置



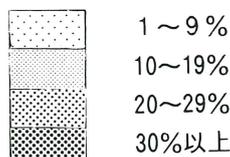
大形甕の出土位置



ミガキ処理のある大形甕の出土位置



ミガキ処理のない大形甕の出土位置



さらに、今回の分類により、同地域の大形甗は、戸森前Ⅵ期から熊野Ⅴ期の間に出土し、砂田前Ⅲ期を境に、その出土例は著しく減少することがわかった。甗が使用されなくなる要因として、木製甗の導入や調理方法の変化などを詳しく検討していく必要がある。

今回は、内面にミガキ処理されたものと、そうでないもの間に特別な相違点を認めることが出来なかった。埼玉県内の他地域でも、同じようにミガキ処理を施された甗が出土している。今後、そのような他地域での甗の出土例を詳しく比較・検討していきたい。

(真野目洋子)

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1999 『宮西遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第250集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 1999 『末野遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢太久夫、石岡憲雄 1981 『六反田』 六反田遺跡調査会、埼玉県立歴史資料館
- 柿沼幹夫 1976 「甗型土器に関する一考察」『埼玉考古』 第15号
- 佐藤康二 1998 『砂田前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1991 「古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集 児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄 1997 「古代北武蔵の土地利用と集落」『日本歴史』 第592号
- 高橋一夫 1979 「計画村落について」『古代を考える—東国集落遺跡の検討』 第20号
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点—入口と集落の道」『埼玉考古』 第21号
- 鳥羽政之 1997 「北武蔵における律令期集落の検討」『埼玉考古』 第33号
- 鳥羽政之 1997 『中宿遺跡Ⅱ』 岡部町埋蔵文化財調査報告書第5集 岡部町教育委員会
- 鳥羽政之 1998 「律令期集落の成立と変貌（上）—北武蔵野7、8世紀の事例を中心として—」『土曜考古』 第22号
- 鳥羽政之・平田重之 1997 『熊野遺跡発掘調査報告書』 岡部町遺跡調査会
- 中村倉司 1982 「大形甗—埼玉県を中心として—」『土曜考古』 第5号
- 中村倉司 1989 『白山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第17集 埼玉県教育委員会
- 中村倉司 1999 『岡部条里／戸森前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飛田野正佳、鬼形芳夫 1986 『内出遺跡』 内出遺跡調査会
- 宮本直樹 1998 『岡部条里遺跡』 岡部町埋蔵文化財調査報告書第3集 岡部町教育委員会

附 編

1. 熊野遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

埼玉県北部の火山灰土中には、浅間火山や榛名火山など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになってきている。そこで、熊野遺跡でも土層や遺構の年代に関する資料を求めるために、地質調査を行う土層の層序について記載するとともに、テフラ組成分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行うことになった。

調査分析の対象となった地点は、深掘トレンチ、SD09北道路面、SD09、SJ34の4地点である。

2. 土層の層序

(1) 深掘トレンチ

ここでは、台地を構成する礫層を覆う、いわゆるローム層とその上位の黒ボク土をよく観察することができた。この地点では、下位より垂円礫混じり灰褐色土（層厚45cm、礫の最大径37mm）、褐色土（層厚21cm）、灰色がかった褐色土（層厚23cm）、垂円礫混じり褐色土（層厚23cm、礫の最大径18mm）、若干色調の暗い褐色土（層厚24cm）、黒みがかった暗褐色土（層厚23cm）、暗褐色土（層厚3cm）、褐色土（層厚4cm）、黄色細粒軽石に富む暗褐色土（層厚11cm、軽石の最大径4mm）、黄白色細粒軽石混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚8cm、軽石の最大径2mm）、黄白色粗粒火山灰混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚14cm）、黄白色粗粒火山灰に富む灰褐色土（層厚14cm）、褐色土（層厚19cm）、黄色細粒軽石混じり褐色土（層厚8cm）、褐色土（層厚13cm）、灰色がかった暗褐色土（層厚14cm）、白色細

粒軽石混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚17cm、軽石の最大径3mm）、灰色がかった暗褐色表土（層厚7cm）が認められた（図1）。

これらのうち、上位より2層目に含まれる白色軽石は、比較的よく発泡しており、その岩相から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）に由来すると考えられる。

(2) SD09北道路面

この地点では、道路面の断面を観察できた。ここでは、下位より褐色土（層厚5cm以上）、暗褐色土（層厚18cm）、褐灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚5cm）、灰色がかった暗褐色土（層厚8cm）、白色細粒軽石混じりで灰色がかった暗褐色表土（層厚29cm、軽石の最大径3mm）が認められる（図2）。これらの土層のうち、褐灰色粗粒火山灰混じり黒褐色土層の上面に道路面が検出されている。表土中に含まれる白色軽石は、比較的よく発泡しており、その岩相からAs-Aに由来すると考えられる。

(3) SD09

道路に伴う溝である本遺構の覆土は、下位より黄褐色土のブロック混じり褐色土（層厚12cm）、暗褐色土（層厚8cm）、黒みがかった暗褐色土（層厚14cm）、黄褐色土の粒子混じり暗褐色土（層厚10cm）、暗褐色土（層厚26cm）、白色細粒軽石混じりで灰色がかった暗褐色土（層厚34cm、軽石の最大径3mm）、灰色がかった暗褐色表土（層厚8cm）が認められた（図3）。上位より2層目に含まれる白色軽石は、比較的よく発泡しており、その岩相からAs-Aに由来すると考えられる。

(4) SJ34

奈良平安時代の粘土貯めと考えられているSJ34土坑の中から、粘土塊が検出されている。

3. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

深掘トレンチの土層断面において、基本的に5 cmごとに採取された試料のうち、いわゆる暗色帯以上の土層について5 cmおき、それより下位の土層について15 cmおきの試料の合計14点を対象として、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行って、示標テフラの降灰層準を定めることにした。テフラ組成分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別組成を求める(火山ガラス比分析)。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める(重鉍物組成分析)。

(2) 分析結果

テフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして図4に、火山ガラス比と重鉍物組成の内訳を表1および表2に示す。火山ガラス比分析では、試料番号17に透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスの出現ピークが認められた(2.8%)。また試料番号11に、スポンジ状に発泡した軽石型ガラス(2.8%)の、試料番号5に分厚い中間型ガラス(3.6%)とスポンジ状に発泡した軽石型ガラス(4.4%)の出現ピークが検出された。

一方、重鉍物組成分析では、試料番号25に角閃石が比較的多く含まれている(24.8%)ことが明らかになった。また試料番号17から上位で、斜方輝石や単斜輝石に富む両輝石型の組成が認められた。このことは、これらの層準に浅間火山起源のテフラが多く混在している可能性を示している。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

SD09北道路面およびSD09遺構覆土において、基本的に5 cmごとに採取された試料のうち5 cmおきの試料12点、さらにSJ-34粘土溜まりにおいて採取された粘土

についてテフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴から示標テフラの降灰層準や粘土の層位を把握することにした。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表3に示す。SD09北道路面では、試料番号5にスポンジ状によく発泡した灰白色軽石(最大径1.2mm)が少量認められた。この軽石は、その岩相から4世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に由来すると考えられる。試料番号3には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石(最大径2.6mm)のほか、発泡のあまりよくない白色軽石(最大径0.6mm)が少量含まれている。岩相から、前者は1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に、また後者は6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ層(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)由来すると考えられる。試料番号1に比較的多く含まれる淡褐色軽石(最大径3.3mm)も、その岩相からAs-Bに由来する軽石と考えられる。試料番号3に比較してより多くの軽石が認められることから、試料番号1付近にその降灰層準のある可能性が推定される。

SD09遺構覆土では、試料番号13にHr-FA起源の、試料番号4および1にAs-A起源の軽石が認められた。しかし全試料にAs-B起源の淡褐色軽石が比較的多く認められた。

SJ34土坑の粘土塊から、特徴的な軽石粒子を検出することはできなかった。重鉍物としては、角閃石、斜方輝石、単斜輝石が含まれている。角閃石には、色調が薄く、カミングトン閃石の可能性のあるものが含まれている。このことは、粘土の形成がHr-HA降灰以後で、AT降灰前の粘土である可能性を示唆している。少なくとも深掘トレンチでは、Hr-HA降灰以降には風

成の土壌しか認められておらず、別の地点において採取、運搬されて土坑内に蓄えられた可能性が考えられる。

5. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ組成分析により、ローム層中に示標テフラの存在の可能性が考えられた試料番号25、17、11、5の4試料について、位相差法(新井, 1972)により屈折率測定を行い、示標テフラとの同定を試みた。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。試料番号25に含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は1.707-1.712、角閃石の屈折率(n_2)は1.672-1.677である。これらのテフラ粒子は、重鉱物の組み合わせや屈折率などから、約2.5-3.0万年前に榛名火山から噴出した榛名箱田テフラ(Hr-HA, 早田, 1996)に由来すると考えられる。

試料番号17に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスの屈折率(n)は1.499-1.501(中央値は1.500)である。この火山ガラスは、その形態や色調さらに屈折率などから、約2.4-2.5万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。層相を合わせて考慮すると、試料番号18付近にその降灰層準があると推定される。

一方、重鉱物のうち本試料層準から増加する斜方輝石の屈折率(γ)は、1.701-1.725である。このことから、ここには約1.8-2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1994)の最下部の浅間室田軽石(As-MP, 早田, 1990)の層位があると考えられる。

試料番号11に含まれる重鉱物のうち、斜方輝石の屈

折率(γ)は1.703-1.711である。このことは、本試料付近にAs-BP Groupの中部の降灰層準のあることを示唆している。試料番号5に含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は、1.707-1.711である。この斜方輝石は、その屈折率から約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

6. 考察—示標テフラの層位と遺構の年代について

熊野遺跡深掘トレンチで認められたローム層中には、試料番号25にHr-HA、試料番号18にAT、試料番号17にAs-BP Groupの最下部のAs-MP、試料番号11にAs-BP Groupの中部、さらに試料番号5にAs-YPの降灰層準があると推定された。またSD09北道路面では、試料番号5にAs-C、試料番号3にHr-FA、試料番号1にAs-Bの、各々の降灰層準があると推定された。したがって、As-Bの軽石を含むSD09北道路面の硬化層については、As-B降灰後に形成された可能性が考えられる。道路に伴う溝であるSD09の覆土がAs-Bの降灰後に形成されたと推定されたことも、この年代を支持している。

7. まとめ

熊野遺跡において、地質調査、テフラ組成分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より榛名箱田テフラ(Hr-HA, 約2.5-3.0万年前)、始良Tn火山灰(AT, 約2.4-2.5万年前)、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 約1.8-2.1万年前)の2層、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)などの示標テフラの降灰層準を把握することができた。そしてこれらの示標テフラとの関係から、道路面の硬化層の形成は、As-B降灰後であると推定された。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器 14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰(AT)の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班～前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.37-129.

早田 勉 (1994) 群馬の示標テフラと自然環境. 笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色予稿集」, p.20-24.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.256-267.

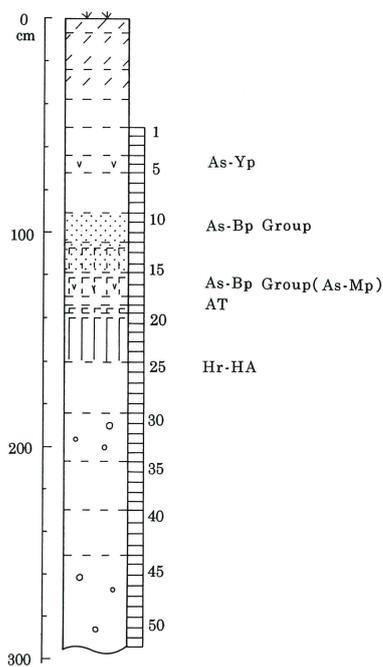


図1 深掘トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

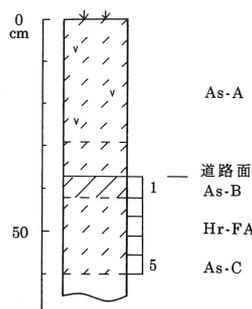


図2 SD09北道路面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

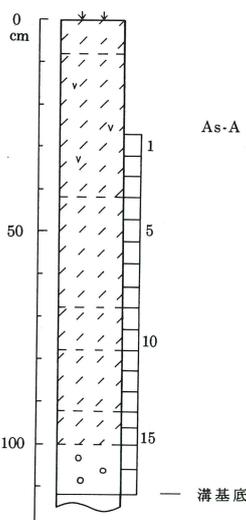


図3 SD09覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

表1 熊野遺跡の火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw	md	pm	その他	合計
深屈	3	0	9	2	239	250
	5	0	11	8	231	250
	7	0	1	1	248	250
	9	1	1	6	242	250
	11	0	0	7	243	250
	13	3	0	3	244	250
	15	1	1	0	248	250
	17	7	1	9	233	250
	19	4	3	0	243	250
	21	0	0	1	249	250
	23	0	0	1	249	250
	25	0	1	1	248	250
	29	0	1	0	249	250
	33	0	0	1	249	250

数字は個数. bw : バブル型, md : 中間型, pm : 軽石型.

表2 熊野遺跡の重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
深屈	3	1	149	41	0	0	59	0	250
	5	2	134	48	2	0	61	3	250
	7	0	132	70	0	0	48	0	250
	9	1	141	62	1	0	44	1	250
	11	0	138	64	0	0	48	0	250
	13	5	142	65	1	0	36	1	250
	15	2	159	55	2	0	31	1	250
	17	2	141	66	5	0	34	2	250
	19	1	114	21	18	0	92	4	250
	21	1	79	6	49	0	110	5	250
	23	2	91	5	57	0	94	1	250
	25	0	56	2	62	0	127	3	250
	29	1	62	2	33	0	148	4	250
	33	1	55	6	21	0	164	3	250

数字は個数. ol : カンラン石, opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, ho : 角閃石, bi : 黒雲母, mt : 磁鉄鉱.

表3 熊野遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
SD09北道路面	1	++	淡褐	3.3
	3	+	淡褐>白	2.6,0.9
	5	+	灰白	1.2
SD09	1	++	淡褐>灰白	2.0,2.1
	3	++	淡褐>灰白	2.8,1.9
	5	++	淡褐	3.3
	7	++	淡褐	3.3
	9	++	淡褐	3.3
	11	++	淡褐	3.3
	13	++	淡褐>白	1.9,0.9
	15	++	淡褐	3.3
	17	+	淡褐	3.3
SJ34		-	-	-

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない. 最大径の単位は, mm.

表4 熊野遺跡の屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス		重鉱物	
		量	形態 色調	組成	屈折率
深屈	5	-	-	-	opx>cpx opx(γ) : 1.707-1.711
	11	-	-	-	opx>cpx opx(γ) : 1.703-1.711
	17	++ bw	透明	1.499-1.501 (1.500)	opx>cpx opx(γ) : 1.701-1.725
	25	-	-	-	ho>opx opx(γ) : 1.707-1.712 ho(n2) : 1.672-1.677

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, - : 認められない. pm : 軽石型. opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石, ho : 角閃石. 屈折率の測定は, 位相差法 (新井, 1972) による.

2. 熊野・新田遺跡と築道下遺跡から出土した土器(7世紀末から8世紀前半)の赤色部分の蛍光X線分析装置による元素同定

松葉礼子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

埼玉県岡部町にある熊野・新田遺跡と埼玉県行田市の築道下遺跡から出土した7世紀末～8世紀前半に相当する土器の一部に赤色を呈するものが見つかった。この赤色部位の元素を同定することによって、赤色を呈している原因が何であるか同定するために蛍光X線分析装置を用い元素を同定することにした。

2. 試料と方法

試料は、熊野新田遺跡2点(遺物番号: SJ10-7, SJ27-8)と築道下遺跡1点(SJ62), 計3点である。

化学組成は蛍光X線分析計を用いて調べた。土器の赤色部分をブローワー等で埃を払いそのまま表面を測定試料とした。分析装置は、セイコー電子工業(株)製の卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線管球は、ロジウム(Rh)ターゲット, ベリリウム(Bc)窓, X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒, 照射径10mm, 電圧50KV, 試料室内は真空である。なお、ロジウム(Rh)のX線ピークはX線管球に由来する物であり、対象物とは関係が無い。

3. 結果

蛍光X線スペクトル図を第1図に示す。測定の結果、アルミニウムAl, ケイ素Si, カリウムK, カルシウムCa, チタンTi, マンガンMn, 鉄Fe, 亜鉛Zn, ストロニウムSrなどが検出された。

一般的に赤色顔料には、水銀朱(HgS)・ベンガラ(Fe₂O₃)・鉛丹(PbO₄)がある(市毛, 1984)。その点から、今回分析した試料は赤色を呈し鉄Feがいずれも高

く確認されているためベンガラであると考えられるが、鉄は土壌中にも4.0%程度含まれており土壌由来の場合も考えられる。そのため今回は双眼実体顕微鏡で表面・断面などを観察し、紛らわしいものについては胎土部分も測定した。

その結果、SJ10-7は表面の赤色部分に顔料が明確に確認されないこと(写真)、断面の色彩が表面の赤色部分と近似していること、胎部の測定結果が非常に近似していることから積極的な塗彩は無かったのではないかと推定された。その他、SJ27-8も実体顕微鏡の観察では顔料が確認できなかった。

逆にSJ62は実体顕微鏡でも赤色の微粒子が表面に観察でき、蛍光X線スペクトルも他の2試料に対して鉄Feの強度が強い。これらのことから本試料はベンガラによる塗彩がなされているものと考えられる。

ベンガラの原材料や製法については赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した可能性や鉄分に富んだ土壌を焼く方法などがあると考えられている。縄文時代や弥生時代の赤色漆に用いられたパイプ状を呈するベンガラは珪藻化石が付随することから、水成環境下で生成した酸化鉄である可能性が指摘されている(岡田, 1997)。江戸時代中期以降には緑礬(ろうは: 硫化鉄FeSO₄·7H₂O)からの人造も確認されている(北野, 1994)。今回のSJ62の試料には硫黄Sが含まれているが、これは土器を復元する際に使用される石膏に含まれるものが表面に付着している可能性があり、硫化鉄起源を示唆する結果ではないと考えられる。

表2 分析結果

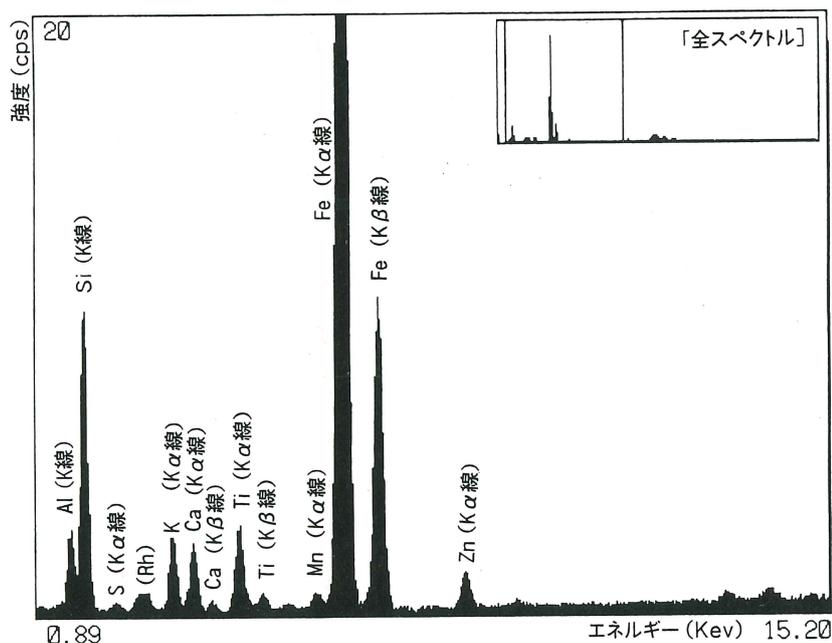
No.	出土遺構等	主成分元素	双眼実体顕微鏡での観察
SJ10-7	熊野・新田遺跡	Fe≫Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Zn	赤色を呈しているが、明瞭な顔料は確認できない。
SJ27-8	熊野・新田遺跡	Fe≫Al,k,Ca,Ti,Mn,Zn,Sr	赤色を呈しているが、明瞭な顔料は確認できない。
SJ62	築道下遺跡	Fe≫Al,Si,S,K,Ca,Ti,Mn,Zn,Sr	胎土と明らかに異なる赤色。 表面に微細な赤色粒子が確認できる。

引用文献

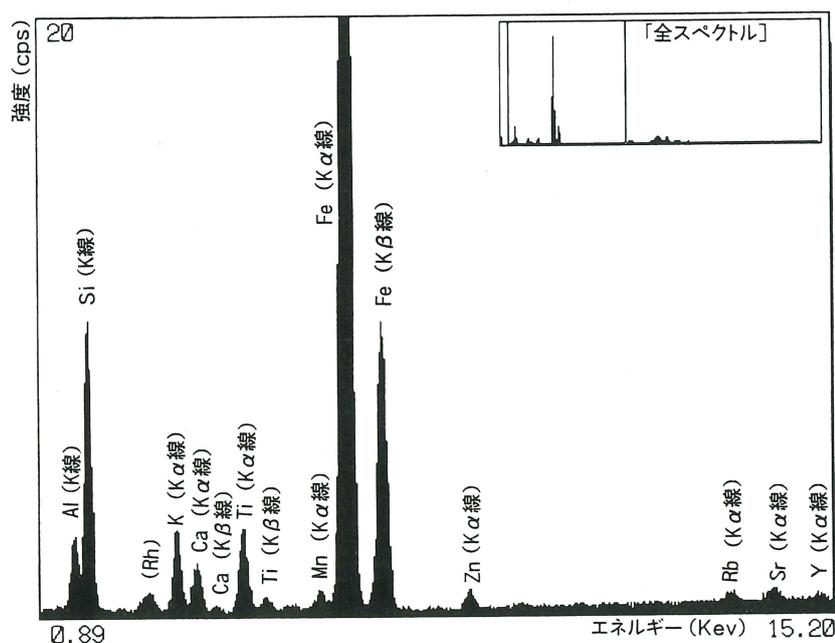
北野信彦, 1994. 近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅱ—文献史料から見た赤色系漆に使用するベンガラの製法について—, 古文化財の科学, 39: 93-102.

市毛 勲, 1984. 増補朱の考古学, 324pp. 雄山閣出版, 東京.

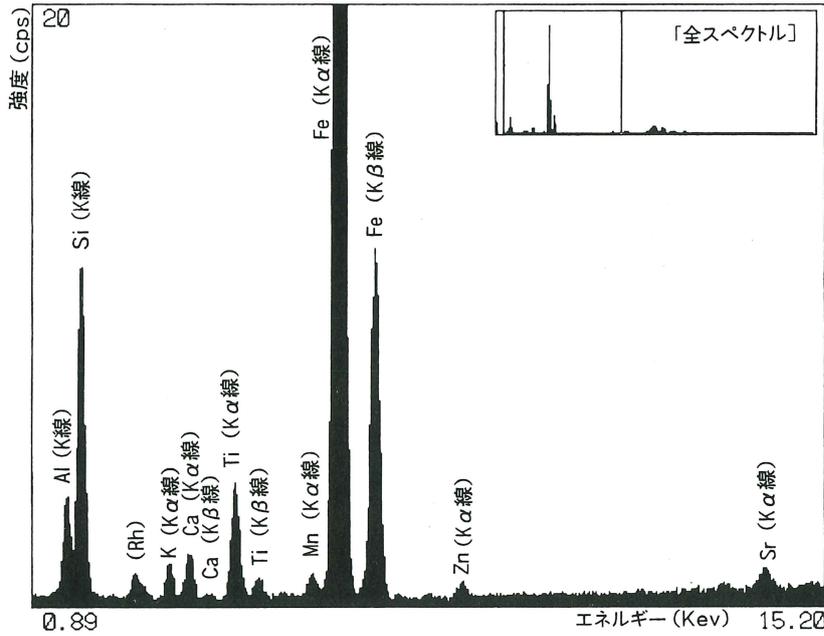
岡田文男, 1997. パイプ状ベンガラ粒子の復元, 日本文化財科学会第14回大会研究要旨集, 38-39. 日本文化財科学会第14回大会実行委員会編.



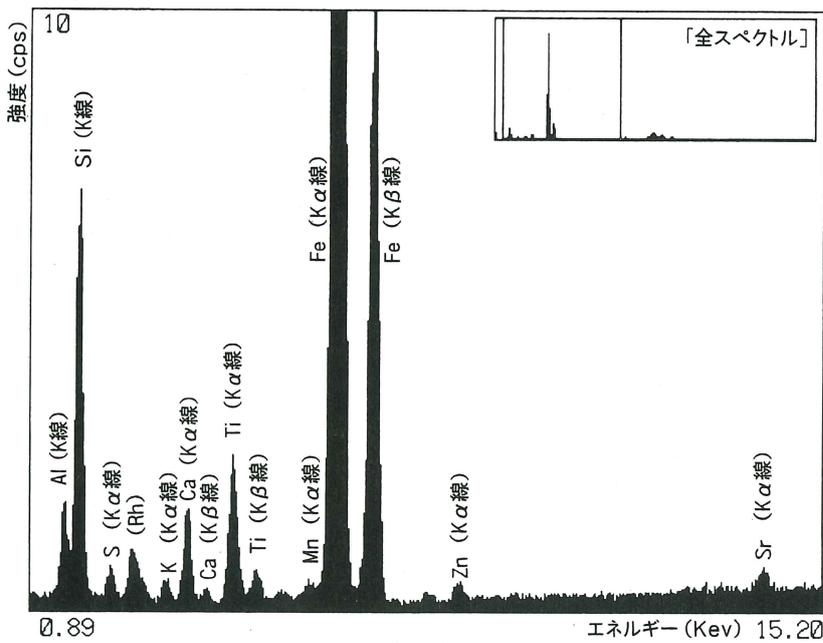
測定条件	
設定時間	300 sec
照射径	10 mm
電流	21 uA
電圧	50 kV
試料室	真空
マイラー容器	無し
測定日	Jan.7.2000
ファイル名	SJ10-7
測定試料	熊野・新田遺跡 岡部町 出土土器 表面赤色部



測定条件	
設定時間	300 sec
照射径	10 mm
電流	7 uA
電圧	50 kV
試料室	真空
マイラー容器	無し
測定日	Jan.7.2000
ファイル名	SJ10-7ve
測定試料	熊野・新田遺跡 岡部町 出土土器 胎土



測定条件	
設定時間	300 sec
照射径	10 mm
電流	7 uA
電圧	50 kV
試料室	真空
マイラー容器	無し
測定日	Jan.7.2000
ファイル名	SJ27-8
測定試料	熊野・新田遺跡 岡部町 出土土器 表面赤色部



測定条件	
設定時間	300 sec
照射径	10 mm
電流	5 uA
電圧	50 kV
試料室	真空
マイラー容器	無し
測定日	Jan.7.2000
ファイル名	SJ62
測定試料	筑道下遺跡 行田市 出土土器 表面赤色部